
R.A.G Rebellion Against God

Rick.

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

R・A・G Rebellion Against God

【Nコード】

N5757S

【作者名】

Rick・

【あらすじ】

この作品には暴力表現、残酷描写、ご都合主義、オマージュ、パロディ、厨二、半端な銃知識が含まれます。苦手な方はご注意ください。

今の世界とは少し違う日本で、テロリストと戦う7人の男達の話、の予定。

001 - ある被害者の回想1（前書き）

この作品はフィクションです。 実在する人物・地名・団体・事件等
とは一切関係ありません。

001 - ある被害者の回想1

2010年2月25日。取調室の大川。

「で、君はその電話の相手に唆されて、こんなものを作っていた、間違いないかい？」
男が尋ねる。

「はい、おおむねその通りです」
私はそれに応じる。

「それで、だ。もう一度確認するよ」
男は眼鏡を掛けなおし、私に質問を投げかけた。

「その電話の相手の声は、どんな風に聞こえたんだい？」
唆されたなんて嘘だ。あれは天啓だった。

「はい、彼の声はまるで」
「

あの時私は確かに、神の声を聞いた。

遠くから銃声が聞こえる。部下であり友人でもある、それらの怒号と一緒に。

「くそっ、ガサ入れなんて聞いてねえぞ」

「馬鹿野郎！ココ入ったときからこういうことは想定してただろうが！」

「とにかく俺だけでも逃げるしか・・・」

「裏口も固められてんだぞ！どうしろってんだ！」

銃声が止み、外から部屋のドアが勢いよく開かれた。

大川は思い返す。

どうしてこんなことになってしまったのかと。

ごく普通の家庭に生まれ、ごく普通に生きてきた。そしてごく普通の人生を望んでいた。

都会に出て就職し、安定した生活を手に入れる。

休日には遊ぶために時間を使い、好きなものを買ひ、眠る。

要は楽しく暮らせればそれで良かったのだ。

すべては順調だった。

工場勤務の内定を貰った。地元に比べると格段に賃金が高く、定時に帰宅できる。

作業は機械の点検と、ライン管理。難しいことは何一つ無い。

1年も経つと、業務を一通り覚え、ほとんどの仕事をこなせるようになっていた。

そして、一本の電話があった。

上層部の役員から、昇進を含めた仕事先の変更通知。

大川の地元にある古い金属工場を再利用し、精密部品を作り、組み立てる。

今までの仕事と相違なかった。

仕事の話を手土産に地元に戻り、久方ぶりの後輩たちと晩酌を交わす。

「へー、大川さんも出世したなあ。大したもんだ」

横谷は素直に尊敬の眼差しを向け、タバコをふかしている。

「マジパねえな大川さん！俺らもあやかりてえ」

軽口を叩く高居。酒のペースが早い。かなりアルコールが回っているようだ。

「いやね、わざわざこっちに戻ってきたのは、もう1つ理由があるんだ」

「理由？へまして飛ばされちゃったんスか？」

武田は首を傾げる。こいつは酒が入っていないくても話を聞かない。

大川の居た工場は元々人手が足りなかったため、地方に回す人員が不足していた。

足りない人員分の仕事は簡単なものだからバイト感覚でやってもらって構わない、と上から聞かされていた。

そこで仕事探し真つ最中の後輩に声をかけ、人員不足を何とかしようという算段である。

「マジすか！？雇ってくれんすか！？」

「ほんと大川さんは頼りになりますわあ」

「あ、足りない分は小野と山上と・・・あと長谷川にも声かけましよう！」

きつと飛びつきますよ！」

3人はそれぞれに電話を掛け、全員からすぐさま了承の返事が返ってくる。

ヘリウム並のノリで人員不足は解消された。

目の前で口論が起きている。

高居が吼えた。

「おい！大川さんにまで手出すんじゃないやねえ！！大川さんはなあ！」
眼下の男は心底退屈そうな表情で、

「あーあー、そういうのは後で別のヤツが聞くから。俺に感情ぶつけないよ鬱陶しい」

「ざけんなてめえ！ぶっ飛ばして・・・」

高居が殴りかかる。彼は確かボクシングをやっていた。

素早い動作で放たれた拳は、間違いなく男の顔面に喰らいつく。筈だった。

男はそれを首を捻るだけで難なく避け、懷からベレッタを取り出す。

銃声が聞こえた。

「わりいな。俺には未来が見えてンだわ」

大川は思い返す。

引き返すべきだったのだろうか。

工場の再稼働から1ヶ月後、追加人員を含めた23人は順調に仕事をこなしていた。

ラインの管理と、施設の見回り。部品の組み立て、それに正面入り口と裏口の警備。

最初こそ退屈そうだったが、上層部に直接仕事の文句を言った1人がいなくなっただけからは、皆黙々と作業していた。

機械が何の部品を作り、それを組み上げると何になるのか。皆正しく理解していた。

でも誰も文句を言わなかった。友人である大川の言葉を信じていたからだ。

大川が電話の声を信じたように。

大川の仕事。それは工場全体の管理と、

「大川さん・・・これヤバいんじゃない・・・」

「大丈夫だ。きちんと手続きを取って生産していると聞いている」

「聞いているって・・・直接証明できるもの無いとマジでまずいんじゃないっスか？」

「・・・大丈夫だ。何も問題ない」

嘘をつく事。この2つ。

眼の前では恐らく気絶している横谷と、足から血を流して倒れている高居。

そして黒い丈長のコートを羽織った小柄な男。

「大川だな」

「ああ」

「眼エ座ってンぞ。大丈夫かオマエ」

「覚悟はしていたよ」

「そオかい。それじゃあおやすみ、工場長」

すまない。

誰にでもなく、
うわ言のように、
そう呟いた。

002 - ある被害者の回想2

2月24日、21時38分。

「終わったぞ」

「ヤス君、お疲れ様」

ヤスと呼ばれた男はシガーケースから煙草を取り出し火を点けた。

「つーかジョニーよお」

ヤスは不満そうに話す。

「わざわざ俺まで出る必要なかったンじゃねえの？ひよこと武信だけでどオにかなったろ」

「ひよこ君は制圧担当だし、武信君があんなになっちゃったからね。直毅君でもよかったんだけど、彼は・・・ね？」

「ッチ」

軽く舌打ちをして、さっきまでの出来事を振り返る。

市街地を1台のトラックが走り抜ける。

トラックには運転手が一人、荷台は会議室のようになっており、テーブルを囲むようにして5人の男が座っていた。

「作戦内容をもう一度確認するよ」

この場の指揮官であるジョニーは、ずれた眼鏡をなおしつつ喋り始めた。

「今回の作戦は、銃を密造してる工場の制圧、従業員の保護だ」

「またお巡りさんごつこだもんな。いい加減『本筋』の仕事を貰いたいね」

男のうちの一人、ひよこが悪態をつく。

「1人でも殺したらずいんだろ？」

髪を適当に切りそろえた金髪の男、直毅が口を挟む。

「駄目だ。恐らく従業員は密造してるなんて思っていないだろうし、そこまで重い罪にもならない」

長身で切れ目の優輝がそれに応じた。

車は市街地を抜け、海に面した工場地帯へと入る。

「・・・でも発砲に関しては制限されてないよね。そのあたりはどうなの？」

「さすがに従業員全員が丸腰ってわけじゃねえんだろうさ。そこで俺らの出番なんだろう」

茶髪のショートカット、童顔の武信の問いに、ひよこが答えた。

「そういうことだ。まずひよこ君が陽動のために正面から進入、武信君は裏口の確保の後、1課と2課の応援を待って従業員の武装解除、後に保護だね」

「相手が発砲してきたら？」

「させないのが一番だけど、もしされちゃったら黙らせるくらいはやつても構わない」

「撃つていいのに殺しちゃダメってか。そりゃ俺には無理だわな」
直毅が笑う。

「もう着く。車は手前で待機させッから2人とも降りろ」
ヤスが到着を知らせ、作戦が開始される。

「さて行くか。一応気をつけるよ武信」
ひよこがギターケースを肩に担ぎ、車から降りる。

「・・・お互いに」
続けて武信も降り、走り出した。

「ひよこ、聞こえてるか？」

優輝がインカムの動作確認も含めた通信を飛ばした。

「バッチリ聞こえるけど少し黙って。今サビなんだよ」

「お前またインカムで音楽聴きやがって！遊びじゃねえんだぞ」

「くそ、武信はどうだ、聞こえるか？」

「らーらーあああああああ」

「テーマもかよクソ野郎共！！おい直毅、こいつらのインカムいじったのお前だろ！！」

優輝が声を荒げる。

「・・・なんだってえ？よく聞こえねえ」

インカムに音楽プレーヤーを仕込んだ張本人は絶賛電波垂れ流し中である。

「・・・ジョニー俺帰るわ」

「みんな真面目にやってくれ。優輝君スネちゃったよ」

「ごめんごめん。悪かったよ」

悪びれる様子も無く答えられたが、この場は流す。あまり時間が無い。

「それじゃあひよこ君、レーダーお願い」

「あいよ。ちょい待っててな・・・」

ひよこは目を閉じ、正面の建物に意識を集中させた。

見たことも入ったことも無い建物だったが、頭の中に鮮明なイメージが流れ込んでくる。

ドアが開く様子、機械が稼動している様子、配管から滴り落ちる水の一滴に至るまで。

もちろん人間の動きも例外ではない。

「正面に1人、中に・・・20人。うち3人は1部屋に固まってる、あとはお仕事中かな・・・んで裏に1人」

「調査報告より1人少ないね。終わりかい？」

「終わり。休みかなかな。もう行つていいかい？」

「行こうか。カウントを合わせよう」

「現在時刻21時23分。15分で片付けてくれ。3・・・2・・・

1・・・GO」

「行つてきまーす」

「らららああああああああああ！！！」

21時24分。

工場の正面玄関の見張り当番、山上は困惑していた。

「・・・なんだって？」

「いや、だから道をお尋ねしたいんですよ・・・迷っちゃって・・・

」

市街地の方向から突然でかいアタッシユケースを持ったボサボサの黒い長髪の男がやってきたのだ。

どう見ても浮浪者にしか見えない。

そもそも道に迷うにしても限度がある。このあたりには倉庫くらいしかない。

普通は海が見えたあたりで引き返すはずだ。

「で、あんたはどこに向かってんだ？」

「大川製鉄所つてとこ探してるんですけどね」

「そりゃココの事だ。んで何の用だ」

「工場見学を・・・」

「おもむろに入ろうとすんじゃないよ。何の用だつて聞いてんだ」

「いやね、この荷物をお届けにあがりまして」

「中には何が入ってる」

「・・・見たいですか？」

男が尋ねる。

「ああすごい見たいね。だからさっさと開ける」

「実はこれね、そうなんですよ」

「は？」

「だから、そうなんです」

「からかってんのかテメエ！」

「真面目です。そうなんです！・・・！」

男の目は真剣そのものである。

「もういい、はやく開けろ」

山上は強引に荷物を奪った。いや、奪おうとした。

「わかんねえ野郎だなお前」

瞬間、山上は目の前が暗くなった。

「だから分隊支援火器だつつってんだろ^{S A W}うが」

ギターケースで思い切り殴られた男は、床に伸びていた。

「んじゃまあ、始めるかね」

ひよこはギターケースを開け、中身を取り出す。

M 2 4 9 M I N I M I。軽機関銃である。

ひよこはM I N I M Iを構え動作確認を済ませると、懷に手を伸ばした。

「さてと」

「みなさん！！ガサ入れですよー！！！！」

懷から取り出したガバメントで監視カメラをぶち抜き、続けざまに入り口に向かってM I N I M Iを乱射した。

003 - ある被害者の回想3

21時27分、工場内。

「襲撃だ！」

「なんなんだよ！警察のガサ入れか！？」

「ガサ入れにしてもやりすぎだろあいつ！」

「手空いてる奴は武器持つて逃げろ！！」

大混乱だった。なにせ入り口から男がマシンガンを乱射しながら近づいてきているのである。

大川が見あたらないので、現場責任者代理の武田と小野が指揮を執り、避難を促していた。

銃声とともに声が聞こえる。

こっちに近づいてきている。

「こうなったら俺等も迎え撃つか・・・」

残った2人は意を決して侵入者を迎え撃とうとしたが、

「オラア！わざわざ弾当てないように気遣ってやってんだ！射線に出てくんなテメエ等ア！！」

入り口側の通路には既にマシンガン乱射魔が辿り着いていた。

「銃声が近づいてくるウウウッ！！！」

「いいから裏口に逃げるんだよオオオオオッ！！！！！！！」

同時刻、裏口。

男は携帯を耳にあて、

「正面に襲撃！？お祭りなんだけどマジで！！」

「んでお前は正面のヤツの仲間かあ？」

「いや・・・あの・・・」

「答えねえと脳天ブチ抜くぞ」

武信は今、頭にトカレフを押し付けられている。
進入に失敗し、見張りに捕まった拳句、近い将来人質にジョブチェンジするだろう。

「・・・仲間です」

「よしわかった。まず銃出せや」

武信は懷からベレッタを取り出し、床に置く。同時に内ポケットから紙切れが舞い、裏口の見張り、長谷部の目の前に落ちた。

「なんだこれ、写真？」

「あ、あの・・・それは・・・」

「いいからお前は手あげてろ！ブツ殺すぞ！！」

「ごめんなさい！撃たないで！！」

「なんだこの汚ねえ写真」

男は写真を拾い上げる。

写真はところどころ擦り切れて、色褪せていた。

被写体は武信と、長い黒髪の女性。柔らかな笑みを浮かべている。

「・・・」

「ああわかった、お前の彼女だろこれ。大事そうに持ってやがって」

「・・・返せ」

今までの態度からは想像出来ない声が発せられる。

「ああ？」

「それを返せ」

武信の顔がみるみるうちに怒りの色に染め上げられていく。

男は歪んだ笑顔をその顔に貼り付け、写真を地面に落とし、片足を振り上げた。

「お前自分の立場わかってんのかぁ！？」

言い終わると同時、裏口の警備をしていた憐れな男、長谷川は壁に叩きつけられた。

21時29分、裏口に待機していたトラック。

「うああああああああああ！！！！！！！！！！」

インカムから飛行機のエンジンのような叫び声が漏れている。

「まずい、あいつ殺されるぞ！」

「ちょっと止めてくるわ！！」

会話を聞いていた優輝が慌てて外に飛び出す。

「僕たちも、確保の準備だ」

「あいよ、ああ背骨いつてえ」

ジョニーと直毅が立ち上がり、到着した応援に指示を飛ばす。

「返せって言ってたんだよおおおおおおおおつつ！！！！！！！！！！」

武信は長谷川の上に馬乗りになり、顔面を拳で殴打していた。

長谷部は最初の一撃で気絶していたが、そんなことはお構い無しに武信は長谷川を殴り続ける。

「おい武信！」

自分を呼ぶ声がある。武信は本能の赴くまま、左に振り返る。

それと同時に、優輝の放った右フックが、武信の顔面に突き刺さった。武信は空中で見事なトリプルアクセルを決め、そのまま重力に身を任せ、地面に倒れ動かなくなった。

21時33分。裏口通路。

「おい武田、全員ついてきてるか？」

「来てるよ小野。あ、でも高居と横谷、それに大川さんが居ない」

「あいつらは勝手に逃げてるだろ。俺等はまず自分の心配しようぜ」

「そうだね。外出たらみんなバラバラに逃げよう！」

「オーケー。行くぞ！」

外に出た瞬間、フラッシュライトの光と、多数の銃口に迎えられた。

同時刻、裏口。

「オーケーじゃねえよ。全員動くな」

外に待機していた優輝とヤスは、裏口から出てきた連中をまとめて縛り上げ、警察に引き渡した。

「おかしいな。3人足りない」

「オイオイ。トチったかひよこオ？」

ヤスはひよこに問いかける。

「なーんか最初の3人がずっと管理室から出てこないんだよねえ。
ヤス頼める？」

「ツチ、高くつくぞ」

ヤスは裏口から管理室へと向かった。

以上が事の成り行きである。

「いつから俺等は警察の真似事させてれンだつつの。つまんね
え」

煙草をふかしながら悪態をつく。

「仕方ないさ。定期的にこういう仕事もしないと信用無くなっちゃ
うからね」

「ツたく、ガキの使いじゃ・・・ん？」

「うう・・・」

ふと目線を下にやると、先程気絶させた大川が目を覚ましていた。

「オマエなかなかガツツあんじゃないかねえか」

「こんな・・・こんなはずじゃなかったんだ・・・」
大川は呟く。

「自業自得、ツてヤツだなあ。一生かけて後悔すると良い」

「絶対に失敗しないと思っていた・・・彼の言葉はそれ程に・・・」

「彼？」

ヤスが飛びついた。

「オマエ、なんでここの工場長やってんだ？」

「上からの指示さ・・・」

「業務内容は知らされなかったンか」

「こっちについてから電話で聞かされたよ・・・上層部のうちの1人らしいが」

大川は意識が完全に回復したようで、はつきりと話し始めた。

「オマエはこんな危険な橋渡らなきゃならねエ状況だったンかよ」

「違う。それなりに満足できる生活を送っていたさ。でも電話で仕事の内容を聞いた時、

何故だかやらなきゃいけない、やって当然だと思ったんだ」

「なるほどねエ」

ヤスは少し考える素振りを見せ、

「おいオマエ、その電話の時、声以外の妙な『音』聞かなかったか

「なんでもいい」

「『音』・・・？すまない、今はよく思い出せないな」

「そオかい。まあ聞く時間はこれからたっぷりあるからなあ。連れてけ」

いつの間にか部屋に居た連中に指示を出す。

この集団は基本的に指示待ち人間だ。使いやすくて助かる。

「・・・ジョニー、聞いてたか？」

「ああ、単に変な使命感が芽生えただけかもしれないけど、調べてみる価値はあるね」

「・・・なにが”神の啓示”だ、糞つたれのテロリスト共が」
ヤスが思考しようとするど、

「ヤスー。撤収だ。車回してくれ」
ひよこがギターケースにMINIを仕舞いつつ部屋に入ってくるといふ器用な真似をしていた。

「たまにはテメエが運転しろ。俺は疲れてんだ」

「俺だつて疲れてるさ。これ結構重いんだぞ？武信はダメなんか？」
ひよこはギターケースを肩に担ぐと、ヤスと共に裏口へと歩き始める。

「アイツは今頃車ン中で鼻治してるだろオよ」

「まーたやらかしたかあいつ・・・」

「まあまあ、俺が代わりに運転してやつからよお」

直毅がインカム越しに伝わる程愉しそうな声で言った。

「お前は人轢きそうだからダメだ」

「オマエは海に落ちそうだから却下」

「ぐざぎ」

結局優輝が運転を任され、6人は帰路についた。

c a s e . 0 2 e n d

意識を取り戻す。体中が痛い。どうやら、まだ生きているようだ。

非常ベルの音。悲鳴。足音。爆発音。

暑い。いや、熱い。ここはどこだったか。

熱源から遠ざかるため、痛みを訴える体を見捨て、壁まで這いずる。

背中を壁に預ける。ここでやっと視力が回復した。

すぐ正面には、人間だったであろうものの、千切れた部品が

目覚まし時計の鳴る前に目が覚めるのは、ここに来てからほぼ毎日だった。

何か嫌な夢を見ていた気がしたが、とりあえずはこのベッドのせいにしておこう。

隊舎の備え付けのベッドは寝心地が悪すぎる。明らかに固い。そして無駄にデカイ。

自主的に起床すると脳の活性化は早いもので、カーテンを開けて冷蔵庫を漁る頃にはもうすっかり目が覚めていた。

メシ作るうえにも材料が無いな。パンでいいや。

戸棚から食パンを2枚取り出し、コーヒーと一緒に頬張る。ジャムはつけない主義だ。

さつさと朝食を済ませ、顔を洗い、クローゼットに適当に掛けてある服を取り、着替える。

着替えを済ませながら改めて思う。部屋が広い。広すぎる。

16畳一間にキッチンと風呂、更に完全個室。隊舎とは名ばかりで、そのへんの旅館の一室のようだった。

元々6畳一間で生活していた俺にとっては、いきなりオーバースペックな部屋を与えられても対処に困る。

物が遠すぎていちいち歩かなければならないのだ。面倒な事この上ない。

そんな贅沢な悩みを抱えつつ、部屋を後にした。
先日の大川製鉄所制圧の報告会までまだ時間があるし、ゆっくり歩いていこう。

隊舎から出て朝陽を浴びる。少し肌寒いが、雲ひとつ無い青空が広がっている。
相変わらず空気はまずいけど天気はいいな。うん、いい朝だ、感動的だな。

ここから歩いて15分程の場所に武装警察本部がある。

そこらへんに生えてる高層商社ビルと見た目変わりなく、実際中もほとんど変わらない。

表向きは財政管理の仕事だっけか？そのあたり曖昧だ。

実際に財政管理の仕事もしているらしいが、部署が違つのでそのあたりは疎い。後でヤスに聞こう。

まあそんなわけでビジネスマンよろしく鞆を抱えて出勤中だ。中身は銃だけだ。

政府直轄の治安維持機関、武装警察隊。俺はその第7課所属。

組織自体は元々、立て籠もり発生の際の突入班や銃撃事件等の際に狩り出される、らしい。

でも最近は荒事が発生することがほぼ無いため、俺が来た頃には既に便利屋さんみたいになっていた。

昨日みたいに出勤することは稀で、普段は本部の電気の玉を替えた

り、

社内のパソコンの点検やら修理やらをしている。決して事務員ではない。

まあ出勤したらしたで怪我人出ちゃうし、平和なら何よりだ。あんまり動きたくないし。

ちなみに7課は武装警察の中でも特殊技能を持った者が集められ、より危険な仕事、主にテロ集団殲滅に回されるため誰も入りたがらない。まあ、簡単には入れないわけだが。

その分待遇がいい。おかげで遊ぶ金には困ったためしがない。

そもそも何故ただの学生だった俺がこんな物騒な機関にいるのか。

3年前に事件があつた。その事件に巻き込まれた俺は、ジョニーに再会し、この仕事に就いた。

それだけである。まあ、細かく色々あったのだが、そのあたりは思い出したくないので省略だ。

ビルに着き、ビルの名前を再確認する。

「東京財務管理局」、と書いてある。

15階建てのビルで、普通の仕事は10階までで行っているらしい。俺が向かうのは14階だ。

14階に目的の会議室があるが、その前に武器保管室へと足を向ける。

世界各国の様々な武器が並べられたその部屋は、厳重な管理をされ

るわけでもなく、
ドアが開けっ放しになっていた。無用心すぎる。鍵はともかくドア
くらい閉めてほしい。

しばらく部屋で武器を眺める。

何故だか心が落ち着く。俺の密かな楽しみが1つだった。
気がつくと報告会の時刻ギリギリだった。我ながらアホだ。

駆け足で会議室へ向かい、ドアを開ける。

会議室とは言っても、ほぼこの部屋が7課の拠点となっている。

隊員それぞれのデスクがあり、部屋前面には馬鹿でかい液晶画面、
その前に長机が1つ。

そしてなんだかバナナの匂いがする。

「おせえぞひよこよお」

直毅が煽ってくる。普段遅刻してくる割に、自分が早いと調子がい
いようだ。

「まあ時間ピッタリだし遅くはないだろ。普段遅れるヤツが良く言
う」

言っておくが優輝、お前も遅刻魔だぞ。

あれ、武信はどこいった？

「ああ、アイツなら入院中だ。鼻と体の調整だによ」

ヤスがパソコンを操作しながらバタフライナイフをくるくる回す。
危なっかしい。

「おおそい」

ああぐんま、帰ってたのか。

路地裏のチンピラにスーツを着せたような風貌のぐんまに軽く挨拶をする。

ん、なんだこれ。

見慣れない黄色いパッケージのタバコを渡される。

「キヤあプテンアーク」

バナナの匂いはこれか。・・・結構うまいなこれ。

「みいやげ」

そっぴやブラジルの方行ってたんだっか。ご苦労さん。

「ああ？ああ」

ぐんまは日本語こそ適当だが、13カ国語を使い分ける秀才だ。そのためよく通訳として使われているようである。昨日の制圧のときは飛行機の中か。

「みんな揃ったみたいだね。それじゃあまず重要な事から話そうか」
俺が会話を終えたのを見計らい、ジョニーが眼鏡を中指で押し上げる。

「まずはこれを見てくれ。押収したうちの一丁だ」

「クリンコフかぁ。いかにもな物作ってやがる」

AKS-74U。中東のテロリストが使っていた事で不名誉な名称のついている銃だ。

「問題なのは銃の種類じゃないんだ。グリップを見てくれ」

ジョニーが写真を拡大し、銃を利き手で握る部分が大きく映し出される。

ダーツボード上に、十字架が描かれたマーク。その刻印が埋め込まれていた。

これは最近流行しているマークで、Tシャツからライターまで色々なものにプリントされている。

そしてこのマークを好んで使用する犯罪者集団に、俺達は覚えがあった。

「おい、こいつぁ・・・」

「結論から言うと、アタリを引いた」

会議室の空気が変わる。

俺達の本当の仕事が始まるうとしている。

「大川から『音』についての証言が得られたよ」

本当の仕事、それは

「上層部の一人が、どうやら『円卓の騎士』の一員らしい」

『円卓の騎士』と呼ばれるテロリスト達を、そいつらの本当の目的

を

「では、詳細を説明するよ」

1つ残らず潰す事。

「まず証言については、今話したとおりだ」

ジョニーの話に、俺は真っ先に思いついた疑問を口にする。

今回は『音』じゃなくて『声』なのかえ？

「うん。後半は僕が直接話を聞いたからね。確かにそう言っていたよ」

「なるほどねエ。連中もなかなかやらかしてくれンじゃねえの」
ヤスは感心したように大げさに頷く。

こういうあからさまな動作をするとき、ヤスは全く感心していない。

要は、何もわかってないってことだ。

ぐんまもその動作の意味に気づいたようで、

「しいったか」

「あ？言う様になったじゃねエかぐんま。その口もつと横に開くようにしてやろうかア？」

ナイフをちらつかせている。

「すみませんでした」

謝る時は流暢な日本語だなこいつ・・・。

「声で人間の意思を操ると考えると、電話の相手は俺等と同じ人種だな」

優輝が結論づけ、

「恐らくね。そしてその電話の主は、声帯が特殊なんだろう」
そしてジョニーが優輝の発言を裏付ける。

世の中にはいくつかの区分がある。

人種の違い、性別の違い、国籍の違い、宗教・思想の違い。挙げればキリがない。

その中で、最も大きいとされる分け方。

能力を持つものと、持たないものだ。

能力といっても、ちよつと普通の人より何かに長けているというだけだ。

例えばヤスはちよつとだけ先の『未来』が見えているし、俺は『見えないもの』が見える。それだけ。

俺に言わせれば、こんなもんより生まれ持った才能のがでかいと思うがね。

「大川製鉄所の大元は、日本中央財閥。第二次大戦後に急成長を遂げた財閥だね」

「日財かよ！？そんなところが犯罪者匿つてんのぉ！？」

直毅が驚くのも当然だった。

日本中央財閥と言えば、重工業で国内大手の財閥であり、ここが潰れればこの国も潰れると言われる程である。

それだけ下請けの企業も多くなる。特定は難しそうだ。

「うん。その下請け企業の1つに、騎士がいる」

迅速な発見ありがたいもんだ。

俺は呟く。

「んで、俺等はなんだ、潰してくりゃいいのか」

ヤスはいつの間にかナイフをしまい、真面目に話を聞いていた。

「殺しちゃってええのー？」

ぐんまは物騒なことを口にする。

直毅はというと、黙々とP90のマガジンに弾をこめていた。
こいつのが物騒だった。

「さて、指令を聞こうかジョニー」

優輝の瞳に決意の光が射す。

「デスクワークだ」

「……は？」

ジョニー以外が全員、間抜けな声を出す。

「デスクワークだ」

大事なことなので二回言ったようだ。

「……こういう場でその様な冗談はいらないぞ」

優輝が人でも殺す勢いでジョニーを見ていた。無理もない。

「いやいや、ごめんごめん。僕は嘘をつくのが苦手だ」

「その割にどっから嘘なのかわからねえぞ」

「クリンコフが押収されたあたりからだ」

そこから！？

思わず突っ込む。

「いやほんとにすまない。そろそろやめないと殺されてしまいそう
だ」

気づくと直毅が銃口をジョニーに向け、ヤスがナイフを投げる寸前
だった。

「真面目な話、日財ともなると調べるのに時間がかかるんだ。

少し時間がかかるが、4課が血眼になって調べている。動くのは
その後だね」

円卓の騎士の構成は、各企業や要人のトップ集団等というわかりや
すいものではないらしい。

そのあたりを調べただけ、4課には頭が下がる。ご苦労なことだ。

「だから君達は持ち場に戻って、指令を待ってくれ」

「結局デスクワークじゃねえか・・・ああやだやだ、煙草吸ってく
る」

直毅はガンオイルを注すのを止め、部屋から出る。

「さアて資金調達でもすっかなア」

ヤスはパソコンと向き合った。

「俺は武信の見舞いでも行くか・・・おいぐんま、顔出しに行くぞ」

「ホッヒヒ」

2人して部屋から出て行く。こいつら仕事する気0だな。
ジョニーはどうするのだろう。

「ん、僕は4課の手伝いだ。上からの御呼びがかかってもいいようにね」

相変わらず仕事熱心だな。

俺もとりあえず病院に向かうとしよう。仕事は・・・空いた時間でもいいや。

7課は基本的に、自由人の集まりだった。

006 - 道化師は踊る1

3月1日、19時15分。7課会議室。非通知電話。

『今日の演出は気に入ってもらえたかな?』

「・・・君が電話の主だね?」

ジヨニーが電話の相手に問いかける。

『質問に質問で返すのは感心出来ないな。まあ、そう呼んで貰っても差し支えない』

「何故ここの番号を知っている?君達の目的は何なんだい?」

『まあそう焦ることもあるまい』

電話の主は溜息をつき、

『とりあえずその懷に仕舞っている銃で、自分の頭を撃ち抜いてみてはどうか?』

ジヨニーはその『声』を聞くと、懷からリボルバーを取り出し、自分のこめかみに押し付けた。

c a s e ・ 0 3 - 道化師は踊る -

「で、誰が行くんのだ？」

優輝が空になったソレを一瞥した。

「公平にジャンケンでいいだろこんなもん」
ヤスが気だるそうにぼやく。

「駄目だ。絶対ヤスが勝つ」
始めから出す手を見透かしている者にとって、その勝負は勝負とは言えない。

「じゃあ面倒だけどハイアンドローでもしない？」
隠しきれない笑みを浮かべたひよこが言う。

「ひよこが勝つだろ。くだらん事に能力使うなよ」
次の一手が確実にわかる賭け事は、イカサマと変わらない。

「もうポーカーやろうぜえ」
直毅は既にトランプを配り始めていた。

「誰が配つてもお前が勝つだろうが」
圧倒的な運を持ち合わせている者は、いかなる勝負も茶番に見えた。

この空間では、あらゆる勝負事はアンフェアなのである。

「じゃあどおすんのお？俺が行けばええのお？」
ぐんまが支度を始める。

「なら俺が行こう」

「仕方ねエな俺が行ってやんよ」

「いいっていいって。俺が行ってやつからよお」

「いいよ。ここは俺が行くからみんな待っててよ」

「・・・じゃあ僕go」

「」「」「」「」「」「」「」「」「」

「ええ・・・僕まだ何m」

「いいから行けよ武信」

「・・・はい・・・」

現在この部屋には、煙草が一本も無い。

7課ではジョニーと武信以外が全員煙草を吸い、普段は会議室が雀荘のように白く煙っている。

そんな7課会議室の空気が澄み切っている事自体が異常であり、この異常事態を解決すべく1人の勇者が立ち上がらなければならなかった。

何故煙草の買出しごときで皆ここまで渋るのか。まず銘柄が面倒なのである。

優輝と直毅はマルボロソフト、ひよこはハイライト、ぐんまはパラメント。ここまではいい。

ヤスは缶入りのピース。これが厄介で、近辺のコンビニで取り扱っているところが無い。

これを買いに車を街中の煙草屋まで走らせないとならないのだが、

「あ、俺はコンビニ弁当とコーラを頼む」

「俺も弁当でいい。ああコーヒーも頼んだ」

「俺あハンバーガーな。ポテトのしも3つくらい。あとコーラな」

「俺もハンバーガー食いたいわ。シェイクはバニラでいいよ。溶けてたら怒るけど」

「たあこ焼き食いたい」

この様に昼飯もついでに買われるのである。

最早煙草を買うほうがついでになっている気がするかもしれない。

そんなわけで剣の代わりに金を持ち、馬車の代わりに自動車に乗り、勇者武信はお使いクエストをこなすために会議室を後にした。

「・・・まったく、昼食くらい食堂で済ませればいいんじゃないかな？」

会話の一部始終を聞いていたらしいジョニーが、入れ替わりに入室する。

「食堂のメシとか食ってらんねえよ。なんで社内食堂なのにあんなにたけえの？」

「メニューにサンドウィッチって書いてあるのが気にいらないよ。サンドイッチって書けばいいだろ素直にねえ」

「米が硬いよおホヒヒ」

「難癖つけるの好きだね君達は・・・煙草だって下の自販機にあるじゃないか」

「可愛い子には旅をさせろッて言っただろオ？」

「意味が違っよ」

「まあ、武信が買出しに行くのは最早様式美だ。仕方ない」

「苦勞は買っほどの価値があつてこそなんだけど・・・あ、そうだ」

ジョニーは思い出したように手を叩き、

「今日の坂上利章さかがみとしあき議員の街頭演説会、テロリストに狙われるそうだし」

「そんな軽いノリで言う内容ではないだろう」

「このご時勢に街頭演説なんかやろうもんならタダじゃ済まないだろう？」

「前総理のアホがやらかしたかな。お陰でこっちは尻拭いだ」
テロリスト達が演説中の政治家を襲撃する事件が割と頻繁に起こっている。

理由は様々だが、最近は相対する思想を持った派閥が傭兵を雇い襲わせているようだ。

過激派のやる事はテロリストと相違ない。

そついった他派閥の牽制の意味を込めて、現在の主流は立会演説会、苦肉の策である。

坂上議員は、歪んでしまったこの国を立て直す民主再建派の筆頭だ。変革を望む派閥にとっては目の上のたんこぶであり、狙われるのは必然であった。

更に彼は派手な演出を好むため、個人演説で済むところをわざわざ街頭演説に切り替えた。

「まあまあ。とにかく彼が安全に演説を終えるために、今回僕達は雇われた」

「雇われた？今回は上からの指令じゃないわけか」

「うん。坂上議員直々の御指名だ。それにもちゃんと理由があつてね」

ジョニーがリモコンを操作すると、液晶画面に文章が映し出される。

「脅迫文か。奇襲じゃないだけ良心的かもね。えーっと・・・」
ひよこは長つたらしい文章を簡潔に訳した。

「わざわざ的になりやしやり出て来るようなら射殺するので、大人しく演説中止してねこの糞野郎が、つてどこかい」

「そこまで書いてないがな。まあ、ご丁寧に射殺すると書くあたり底が知れる」

優輝が率直な感想を述べる。

「まあブラフだろ。大方爆弾あたり投げ込んでドカンじゃねえのか」

「そこで僕達の出番だ。あらゆる危険を防止もしくは排除し、彼の剣となる」

「盾は下ッ端の役目だもんなあ。さて、支度すつかねエ」

各々が出動の準備を進めていると、

「・・・ただいま」

大量の袋を抱えた武信が帰ってきた。

ジョニーは顔色ひとつ変えずに告げる。

「お帰り武信君。悪いけどその荷物抱えて駐車場にＵターンだ」

「おめえもなんだかんだパシってんじゃねえか！」

「まあ流石にアワレだからなあ。持ってやんよ」
そう言うത്ヤスは自分の昼食と煙草の入った袋だけを掴み、会議室を出た。

「俺等が必要な物積み込むかねえ。行こか」

「どうせ俺は今回も待機なんだろう？わかってても泣けるぜ」

「ホヒヒー」

ひよこと直毅、ぐんまがそれに続く。

「僕はたいして荷物無いからね。半分持つよ」

「・・・ありがと。ところで何処に行くの？」

「仕事だ。鍵閉めておくから先に行ってる」
残り2人の退室を確認し、優輝が溜息をついた。

「片付けもしないでさっさと行くんだもんないつら」

「トランプくらいすぐ片付くだろうに・・・ん？」
そつえば、さっき直毅がポーカーのために手札を配っていた。

「・・・まあこんなもんか」

優輝の手札は2ペア。初手にしては上出来だ。

「こいつらは・・・大方想像通り、か」
ひよこと武信が1ペア、ぐんまは役無し。

「こいつの運も大概だな」

ヤスの手札はスペードの10から13までと、ハートのクイーン。
ロイヤルストレートフラッシュも狙えなくはない手札だ。

残りは直毅の手札だが、結果は言うまでもなかった。

「イカサマ無しだとしたら、やっぱり流石だよ直毅」
優輝は会議室に施錠し、エレベーターへ向かった。

直毅の手札には、エース4枚に挟まれ、満面の笑みを浮かべたピエ
ロが1人。

本部から車で20分程のところにある公園。

周辺の道は既に交通規制が敷かれ、演台前の広場には既に多くの人
が押し寄せている。

現在この公園には警察の他、市民に紛れて武装警察隊の1課と2課、
7課が配置されていた。

「武装警察隊7課です。本日は宜しくお願いします」
ジョニーが一礼し、皆もそれに倣う。

「うむ。坂上だ。今日は宜しく頼むよ」

灰色のスーツを身に纏った小太りの中年男、坂上が礼に応じた。
両脇にがっしりとした体格のSPを立たせ、ふんぞり返っている。

「君達は私の身の安全だけ考えて動いてくれ。何かあったら大事だ」

「・・・一つ質問いいでしょうか」
武信が自信なさげに手を挙げる。

「何だね」

「・・・7課は基本的に外から依頼を受けないんですが・・・そも
そも知ってる人もあまり居ないし・・・」

どうして直接依頼をくれたんでしょう・・・か・・・」

坂上の偉そうな態度に萎縮しているようだ。

「船木総理から直接の推薦があつたんだよ。聞いていないかね？」

「ああ・・・船木の爺ちゃんから・・・」

「さつき車で話しただろうが。ちゃんと聞け馬鹿者」

優輝が叱責する。武信は基本的に3回くらい言わないと話を聞かない。

つい先程も昼飯のポテトが1つしかない事に腹を立てた直毅から怒られたばかりである。

「しかし君達随分と若いな。本当に大丈夫なのかね」

坂上が首を傾げるのも無理はなかった。

7課メンバーはジョニーが23歳、他が全員20歳なのである。

更に全員、線が細い。隣のSPと比べても頼りないように見える。

「問題ありません。身の安全は約束します」

優輝がはつきりと告げる。

シュコー

音がする。

「ならいいんだがね。あとスーツの上にトレンチコートとは、そろそろ暑いのではないか」

シュコー

それは、この場に似つかわしくない。

「防弾服も兼ねてますんで。暑いけど着けてないと、撃たれたら結構痛いですからね。」

あ、普通の人だと衝撃で骨にヒビいっちゃうんですが、俺等能力者なので基本なんともないっす」

ひよこが営業スマイル全開で語る。

シュコー

まるで、獲物を狙う獣のような。

「それならいい。それで、だ。さっきからその」
坂上が純粋な疑問を口にしようとした。

シュコー

7課一同は、その音の正体を、後ろを振り返ることで確認した。

「シュコー俺のことですかシュコーここの空気はシュコー排気が多くてシュコー」

「なんでガスマスク着けてんだ馬鹿野郎！さっさと外せ！！」
ひよこが直毅からガスマスクを引っぺがした。

「ガスマスクは良い。初期型も好きだが、やはりキャニスターは左に付いていた方が」

「んな事聞いてねエよ」

「悪いねえおっちゃん。コイツあたまおっかしいからホヒヒ」
ぐんまが下卑た笑いを浮かべる。

「・・・本当に問題無いのかね・・・？」

「・・・後でよく言っておきます」

ジョニーが申し訳なさそうに頭をたれた。

「もう一度言うが、何かあったらただでは済まないからな。
おっと、スポンサーから電話のようだ。失礼するよ」

坂上はSPを引き連れて、演説カーへと戻っていく。

「君達は真面目に仕事する気があるのかい？」

ジョニーがズレた眼鏡を中指で押し上げる。

「・・・すいません」

「だあって暇なんだもんよお。ちょっとした遊び心も必要だろ？」

「いないっての。仕事なんだぞ」

ひよこが至極真つ当な意見を口にするが、

「オマエも音楽聴きながらヘラヘラしてたじゃねえか」

「ヤスだって携帯いじってただろー！？見てたんだぞ俺は」

「ホッヒヒ」

「はぁ・・・こいつら・・・」
優輝が今日何回目かわからない溜息をついた。

「これが公園周辺の地図だ」
一同はトラックに戻り、配置を確認していた。

「ここが今いる公園。で、ここが広場だね。
広場は直毅君とぐんま君、武信君に任せるよ」

「・・・怪しい行動してる人がいたら、確保すればいいの？」

「派手に暴れてえけどまあ、船木のジジイに推薦されてっからな。
下手な真似はしねえ」

現総理の船木とは、メンバー全員知り合いだった。
第7課は武装警察隊の中でも特殊任務向けに、総理が直々にメンバ
ーを選出し作られている。

「周辺2km以内に狙撃できそうなビルは5つ。そのうち一番高い
ビルに優輝君とヤス君」

「ヤス、観測は任せるぞ」

「言われねエでもな。オマエこそミスンなよ優輝」
ヤスと優輝は狙撃手対策のためにライフルを抱えている。

他のメンバーはアタツシケースに仕込んだMP5。ケースに仕舞った状態で撃てるよう細工がしてある。

「まあ物騒なもの使わない状況作るのが一番だからねえ。精々ががんばるよ」

ひよこは1課と共に周辺ビルの警戒。

残る2課は私服に着替え、公園およびその周囲の警戒である。

「武信、ちゃんと聞いてた？」

「・・・えっと、確保すればいいんでしょ？」

「不審な行動をとった奴の確保だ。一言一句聞き逃すな」

「僕は残って広場の監視、指揮を執るよ。じゃあ皆、持ち場につこうか」

「了解」

それぞれトラックを降り、指定された場所へと向かっていく。

008 - 道化師は踊る3

3月1日。12時55分。公園横トラック。

「全員指定位置についたかい？」
ジョニーが確認する。

「O K E。いい眺めだ」
ヤスが屋上から双眼鏡を覗きながら呟く。

「風も無い。狙撃するには絶好だな」
優輝が即座に通信を返した。

「・・・こつちは異常ないけど、人が多いねやっぱり・・・」
開始5分前ともなると、公園広場は既に人の洪水が押し寄せている。

「問題なしだ・・・やっぱ煙草逆につけちゃった!!」

「1人かあくほ」
ぐんまが不審人物を取り押さえたようだ。

「ぐんま君、報告を」

「爆弾ふたあつ」

「爆弾？」

「きれえなねえちゃんだよホヒヒ」

「ナンパしてんじゃねえよ糞が！俺も混ぜろ！！」
直毅が抗議の声をあげた。

「・・・真面目にやれ。ここからはお前の頭がよく見える」
優輝の声にかなりの濃度で怒りが配合されている。ちなみに残りはやさしさではなく侮蔑だ。

「すいませんでした」

「1時には演説が始まるからね。ほんと頼むよ」

「まあリラックスしてこ。こっちも1つ目のビルは問題ないよ・・・
ん？」

公園から一番近いホテルの前で、ひよこは何かを見つけたようだ。

「ひよこ君、何かあったのかい？」

「ちょっと様子見てくる」

12時56分。公園付近のホテル前。

黒いタキシードを着た男がホテルに入ろうとしている。

手には大きめのチェロのケースを持ち、急いでいるように見えた。そのケースの中身がチェロであり、男が楽団員であれば、ひよこは見逃していただろう。

「すいませーん。ちょっといいですか？」

「何だ君は。私は急いでいる」

男が応じる。

「演説はじまりますもんね。間に合わなかったら大変だ」

「そうだな。じゃあな」

「まあまあ。時間を聞こうと思ひまして」

「12時3分前だ。もういいか」

「あと一つだけよろしいですかね？」

「・・・何だ」

男が訝しげにひよこを眺める。

「レミントンM700。いいですよー。ライフルはボルトアクションに限る」

「・・・何を言ってるんだ？」

「独り言ですよ。ああそうだ、そのケース、開けてみてよろしいですか？ 楽器好きなんですよ」

「ふざけるな。私はもう行くぞ」

男がホテルに入ろうとするのを強引に引き止める。

周囲を確認すると、既に何人かの警官がこちらに向かっているようだった。

「あと懐のワルサー PPKS ですが、ちゃんと整備しましょうね。銃に裏切られますよ？」

「くそっ・・・!!」

男は懐からサイレンサーのついたワルサーを取り出し、迷い無く発砲する。

ひよこはそれを1発左腕で受け、男に詰め寄る。次弾が発射されることはなかった。

「くそっ、弾詰まりだと!？」

「だから整備してやれつつってんだよ。そりゃ銃も機嫌損ねるわ」
ひよこが顎に右ストレートを放つと、男の体から力が抜けた。

「馬鹿野郎を1人確保。やっぱりスナイパー居るみたいだわ」

「良くやったよひよこ君。他のビルはどうだい？」

「まだかかりそう。ちょっと急がないとまずいね。ヤス、頼む」

「おオよ」

13時00分。屋上。

ヤスは双眼鏡で、優輝はライフルについたスコープで、それぞれが近辺のビルを警戒していた。

「ヤスどうだ。見えるか？」

「演説が始まったみたいだなア。まだ問題はねえが」
ヤスは広場からビルに視線を戻す。

「さあて、見つけたぜエ。10時方向、最上階の奥から2番目に1人だ」

「了解・・・っと、居たな」

ビルの窓が四角く切り取られ、そこから銃口が覗いていた。
優輝はPSG-1を構えなおすと、

「殺すには角度が足りないな。スマートじゃないが」
発砲する。窓から覗く銃口に向けて。

発射された弾は、まるで吸い寄せられるように銃口に直撃した。

「ヒュウ、流石だなあ優輝。シモヘイへも真ッ青だ」

「スコープ覗いてるけどな。ここから10時の方向のビルの10階に2課を突入させろ」

「了解だ。2人とも引き続き警戒を頼むよ」

13時02分。公園広場脇。

公衆トイレのすぐ横で、直毅は煙草を吸っていた。

このあたりは広場に収まりきらなかった人たちがぼつぼつと立っているだけである。

「演説なんてテレビ通して聞きたいのにご苦労さんだなあ」

「なあ、あんたもそう思わねえか？」

直毅は誰にでもなく話しかける。

「え？すみません、もう一度言っただけですか」

右斜め前の男がそれに反応した。

「あー、いや悪いな。聞き入ってる奴に吐くセリフじゃなかったわ」

「はい」

男は気にも留めていない様子だ。

「んー？」

直毅は額に人差し指を当て考え込み、思いついたように指を鳴らす。

「あーわかった。ピンときた。お前確保な。なんか怪しいわ」

「え？」

男が左を向くと同時、2人の私服警官に取り押さえられる。

「ちょ、なんなんですかいきなり!？」

「お前聞き入ってたの、演説じゃなくて通信かなんかだろ。
あと独り言のつもりだったんだけどなあ。演説まともに聞いてた
らいちいち
知らん奴の言葉に反応しねえよな？まあ全部勘だからよお。悪い
な」

「出鱈目だ・・・」

男は力なくそう呟くと、大人しく連行されていった。

後の調べでわかった事だが、この男はポケットに手榴弾を入れてお
り、

演台に投げこむタイミングを見計らっていたとの事だった。

13時05分。屋上。

「優輝、ヤス。そこから2時方向のビルの上から3番目、左から・
・4番目」

「見えてンぜえ。優輝」

「応よ」

優輝はライフルを構える男の額に向けて銃弾を放つ。

男と目が合った気がした。

直後窓ガラスにヒビが入り、血が付着する。

「命中だ。2課より1課の方が近いな。処理を頼む」
優輝は言い終わると、再びスコップを覗き込む。

「これで周辺は安泰かアひよこ？」

ヤスが肩を鳴らし、凝り固まった腰を捻る。ついでに周囲をもう一度見渡す。

公園の反対側に高いビルが建っている以外、周りには何も無い。いい景色だ。

その一際高いビルの屋上で、何かが光に反射した。

「うん。ここいら一帯は問題なし。俺は戻ってぐんま達のサポートを」

瞬間、ヤスの頭にイメージが過ぎる。

このままの姿勢だと、優輝は確実に、

「ツチ、間に合わねえ!!」

ヤスは突然、横にいる優輝を蹴り飛ばした。

13時07分。

いきなり横つ腹を蹴られた優輝は、体をくの字に曲げてのたうつ。

「お前つ・・・いきなり何を」

「転がれ!!」

優輝は状況を理解し横に転がり、屋上入り口の陰に隠れる。

元いた場所を見ると、コンクリートが2箇所挟れていた。

「ケツにいやがった!糞ツタレがア!!」

ヤスはP S G - 1を持ち、立って構える。
しかし発砲を許す間も無く何発も弾が飛んでくる。

「踊ってやるから付き合えよ！！ホラ当ててみろってんだよォ！！」

ヤスは狙撃手を狙いつつライフルを構え、銃弾を避ける。発砲はしない。

ヤスを狙った弾の全てが地面に突き刺さり、その度にコンクリート片が舞い上がった。

「優輝、そっちの使え！」

「OK、持ちこたえてくれよ」

「問題ねエよ。当たる方が難しい」

そう言いながらヤスは弾を次々と避ける。

ヤスには未来が見えている。いかなる速度で弾を撃ち出したとしても、

それらの撃ち出されるタイミングから当たる場所までわかる者にとつて

避けることは造作も無かった。

13時09分。

「重たい思いして持ってきた甲斐があつたもんだな」

優輝は一際大きなライフルを構える。M82、バレットライフル。それを軽々と持ち上げ、陰から飛び出した。

「誤射はしない。俺が狙うのは、お前の銃だ」

公園から1.5km離れたこのビルの、さらに1km離れたビルから狙撃しているようだ。

そのビルの屋上に狙撃手を発見する。

スコップを覗き、構える。手は震えない。呼吸を止める必要すらない程に。

「スナイパーというのは、一撃で仕留めてこそだ」

放たれた弾丸は、狙撃手のライフルと、ついでに頭と右半身を引き裂いた。

13時10分。同じく屋上。

「ジョニー、恐らく最後のスナイパーを仕留めた。後ろのビルに潜んでいたみたいだ」

「お疲れ様。もう演説は終わるけど、まだ気を抜いちゃダメだよ」

「わあってンよ。ああ疲れた」

ヤスはうんざりした様に煙草に火を点け、双眼鏡を覗きなおす。

「なあヤス、最後に殺したスナイパーの事だが」

「ああ、妙だな」

「あそこまで離れていると、普通の人間なら正確な射撃はほぼ不可

能だ」

広場からあのビルまで、3 k m 近く離れている。
通常のライフルならば有効射程はせいぜい1 k m。それ以上は精度
が落ちる。

余程特殊なものを使わない限り、あの位置から広場を狙撃するのは
無理があつた。

「まあ今考えても答え出ねえかな。警戒しようや」

「ああ・・・」

何か引つかかった。

優輝はこれまでの狙撃手が居たポイントを思い返す。

広場から最も近い2箇所に狙撃手は無し。他2箇所に1人ずつ。そ
して明らかに遠い場所に1人。

その引つかかりを残したまま、優輝は演説が終わるの見届けてい
た。

13時15分。公園広場内。

会場では拍手が巻き起こっている。

坂上議員は演説を終え、得意満面で拍手を浴びていた。

「・・・最後まで異常無し、だった」

「こおつちも」

「あのおっさん、台本読んだだけでどや顔しやがつてよお」

「まあまあ直毅君。残りの3人は大丈夫そうかい？」

「問題ねエよ」

「異常は見当たらないな」

「異常無ーし。走り続きたったから疲れたわあ」

「よし、みんな本当にお疲れ様。これで・・・」

「待つて」

武信の声色が変わる。

「坂上の様子がおかしい」

坂上はいつになっても壇上から降りることは無かった。拍手もまばらになった頃、彼は再びマイクを握る。

「この国は腐敗してしまった。取り返しの付かない程に」
会場からざわめきが起こる。

「国民が悪いと決め付ける政府、政府が悪いと言い張る国民」
坂上は続ける。

「滑稽だとは思わないか。政治家は見え透いた嘘を吐き、それを見抜けない一部の愚かな国民が、騙されているだけだというのに」

「おいおい、トチ狂ったかおっさん」
直毅が苦笑いを浮かべる程、先程の彼の発言と正反対のことを口走る。

既に報道のカメラは止められていた。規制が入ったのだろうか。

「政治家は汚れきっている。特定企業と癒着し、国民に害を与えている」

「国民はどうだ。自らに降りかかる害を受けながら、懸命に生きている。その一方で、悪事を働きながら、甘い蜜を吸う者もいる。善

良な者が損をして、悪に染まった者ばかり得する。私はそれが許せない」

「政治家やつてるヤツが何言ってるんだ。偽善者かよ」

「しかし、この発言の変わりようはおかしい。ジョニー」

「調べてるよ。ただ見た限り、特別変わったことは無いようだ」
変わったことは無い。ジョニーはそう言った。

しかし、目に見えて変わったことが、ただ一つだけあった。
会場に居る誰もが、その言葉を黙って聞いていたのだ。

「更に能力者という存在が、それに拍車をかけている」

「人は生まれながらにして不平等だ。身分の差、育つ環境の差、色々ある」

「今まではそれを努力で埋めてきた。しかし、能力の有無、優劣により、その機会は失われた。働くのに有利な能力を持った者が優先され、他は二の次だ」

「当然だろ。能力者はそれなりに代償払ってるんだ」

ひよこが冷たく言い放つ。能力者には誰でもなることが出来る。
ただし能力の覚醒には、人それぞれに条件があった。

「そのような不平等な状況にも負けず、我慢して必死に今を生きる者達よ。もう苦勞を抱え込んで生きる必要は無い」

「今こそ、革命の時だ。武器を持ち、この印を掲げ、虐げられてきた環境を一変しようではないか」
坂上が紙を掲げる。

その紙には、ダーツボードに、十字架の描かれたマークが印刷されていた。

「こいつ、騎士の1人か!？」

ひよこが坂上の元へ走り出す。

しかし人の波を掻き分けて進むには、少々時間を要する。

「まさか・・・坂上議員が・・・」

ジョニーは驚いたように呟く。

「ただのアナキストとは、考え難いな」
何か考え込む優輝。

「なあになあにい」

状況についていけないぐんま。

「何か・・・何かおかしい・・・」

武信は思考する。

公開演説。脅迫。緊急招集。あからさまな不審人物。
遠くのスナイパー。手の平返し演説。スポンサー。

（あのおっさん、台本読んだだけでどや顔しやがってよお）

直毅の言葉を思い返す。

彼は、演説の時、どこを向いて話していた？

「そしてこの演説が革命への第一歩となることを、私は願っている」

「以上だ。私は、舞台から退場させてもらつたでしょう」

坂上は、前を見てはつきりと話していた。
その耳につけた、インカムを頼りにして。

「・・・そうだ」

武信が顔を上げる。

「あいつは騎士じゃない！！優輝！！坂上の手を」

言うが、もう遅い。

会場の静寂が、悲鳴へと変わった。

同日、19時12分。公園近くのホテルの一室。

テレビからニュースが流れる。

『今日の午後1時25分、公開演説中だった坂上利章議員が、演説終了と同時に

拳銃で自殺を図りました。坂上議員は頭部を銃弾が貫通しており、病院に搬送中の救急車で死亡が確認され

』

アナウンサーが言い終わる前に、テレビを消す。

「演説は大成功でしたね、坂上議員」

男は薄く笑いながら、坂上から聞き出した番号に電話をかけた。

『今日の演出は気に入ってもらえたかな?』

「完全に、してやられたね」

ジョニーは中指で眼鏡をなおす。

坂上が拳銃で自らの頭を撃ち抜いてから、7課会議室には敗北ムードが漂っていた。

「俺があと少し早く止めてりゃなー・・・」
ひよこが悔しそうに唸る。

「シュコーまああれはシュコーなかなかシュコー予測できないだろシュコー」

「直毅、ガスマスクは外そうな・・・」
優輝の声にも元気が無い。

「お、おう・・・」

「ツチ、辛気臭えンだよオマエら。コーヒー買ってくる」
ヤスが会議室を出ると、

「おれもおれもお」
ぐんまもそれに続く。

「・・・今僕達に出来るのは、今日の反省じゃないよね？」
武信が真っ直ぐな瞳でジョニーを見つめる。

「そうだね。起きた事を悔やむより、どうしてそれが起こったかを考えるべきだ」

「まあ、坂上も操られてたと考えるのが妥当だろうねー」

「そうだな。武信が言っていたように、インカムから声を聞いてその指示通りに動いた、というので間違いないだろう」
優輝が結論づけた。

「まだよくわかってねえ事あるよなあ？はじめから自殺すんなら、わざわざ俺等と呼ぶ必要も無え」

「・・・そこなんだけど」

武信が何か言おうとした直後、電話が鳴った。
ジョニーが受話器を取る。

「もしもし。こちらは・・・」

『今日の演出は気に入ってもらえたかな？』

「・・・君が電話の主だね？」

ジョニーが電話の相手に問いかける。

『質問に質問で返すのは感心出来ないな。まあ、そう呼んで貰っても差し支えない』

「何故ここの番号を知っている？君達の目的は何なんだい？」

『まあそう焦ることもあるまい』
電話の主は溜息をつき、

『とりあえずその懷に仕舞っている銃で、自分の頭を撃ち抜いてみてはどうか？』

ジョニーはその『声』を聞くと、懷からリボルバーを取り出し、自分のこめかみに押し付けた。

会議室に、銃声が響き渡った。

銃声は2つ。1つはジョニーのもの。
そしてもう1つは、

「なあになあにい。頭なんか撃つたら部屋が汚れちゃうよあ」
ぐんまのモーゼルM1916。その銃口は、ジョニーが引き金を引く直前、ジョニーの銃に向けられたものだった。

「・・・つはあ、はあ、ぐんま君、助かったよ・・・」

「我不需要謝謝。ホヒヒー」
取って付けたような中国語を放ち、ぐんまは自分の席へと戻る。

「オイオイやらかしてくれんなあ。うれしいね全く」
ヤスも着席し、7課全員が揃う。

「スピーカーに、切り替えるよ・・・」

額に脂汗を浮かべたジョニーがスイッチを押す。

『今のはほんの挨拶がわりさ。悪く思わないでくれ』

男の声だった。30代前半か、それよりもっと若いかな。

『全体通話に切り替えたようだな。まあその方が懸命だろう。電話とはいえ、一対一だとさすがに効きすぎる』

「おしゃべりな野郎だな teme。ウチに何の用だあ？」

『君達は無駄話が嫌いかな？友好を深める事も重要だと思うが』

「・・・僕が話すよ。皆は少しだけ静かにしてて」

「・・・こんばんわ、電話の主さん」

武信が電話の主に応じる。

『ふむ、話好きがいてくれて助かるよ。暇を持て余していてね』

「・・・電話の主さんは、今日の坂上事件を計画して実行した人で合ってるのかな？」

『その通りだ。あと電話の主では長かるう。木戸、とも呼んでくれ』

「・・・それじゃあ木戸さん。率直に聞くけど、あなたの能力はあまり、融通が利かないよね？」

『ふむ。なぜそう思うかね』

「だって、会場みんなは黙って話を聞いていたけど、僕達は坂上の異変に気づいたから。あなたはさっき、全体通話に切り替えたほうが懸命だ、と言ったよね？一対一では効きすぎる、とも言った。それはつまり、大人数に対しては能力の効果が薄れるって事」

『面白い。続けてくれ』

一区切り置き、武信は続ける。

「それを裏付ける根拠はもう一つ。先に行った15分間の演説。本来の目的だけで言うなら、あの演説は不必要だと思う。なら、何故15分も関係ない話を続けたのか。それはきっと、公園に居る人たちに、話を聞く、話を受け入れてもらうという土壌作りのため。だからあんなアナキーな演説も皆黙って聞いていたし、はじめから聞いていなかった僕達は、異変に気がついた。尤も、ちょっとだけ間に合わなかったけれど」

『たいした洞察力だ。君は頭がいい』

木戸は感心した様子で、

『確かにその通りだ。私の声は、大人数、そして聞く気がない者にとつては効果が薄れる。更に今回は電話で、更に坂上を通してだから。余計なフィルターを通す分、気を遣わなければならなかった。一対多数でも確実な効果を得られるかという実験さ』

「一対一なら絶対言うこと聞くツてか。詐欺師にでもなりやあいいヤスが悪態を吐く。」

「・・・これは推測ですが、声を発した者が死んだりすると、声の効果は・・・」

『切れる。その実験も兼ねての演説だった』

「だからあの場で暴動が起きなかったわけか・・・それと、1つわからない事があります」

『何だ？機嫌がいいから答えよう』

「・・・僕達を呼んだ訳です。実験だけなら、わざわざ邪魔者を呼んだりしない」

『君達の勧誘のためさ。スナイパー他を配置したのもそれが理由だ。彼等は元々坂上ではなく、坂上の指示で君達を狙っていた。それら全てを排除した君達には、こちら側につく資格がある。この電話もそれが目的だ』

『君達が我々に協力してくれれば、この国を立て直せる。どうだね。我々と一緒に、この国を変えていく気はないか』

「本気で言っているのなら、まずやり方を改めるべきだったねー」

「こいつは詐欺師じゃねえな。政治家やれよお前。つーか実は政治家か？」

「・・・ごめんなさい。犯罪者に加担することは出来ません」

『だろう、な。はじめからわかっていたとは言え、君達は実に、消すのが勿体無い。協力する姿勢が無いのであれば、脅威となる存在は排除しなければなるまい』

「宣戦布告か。こちらとしても、お前を捕まえて色々聞きたいところだ」

『近々、私はもっと大きな事件を起こす。君達が止められるか、今から楽しみだ』

「・・・止めます。今度は、絶対に」

『なかなか有意義な時間になったよ。それではさようなら、反逆者達』

通話は、そこで終わった。

「よくやった武信。ジョニー、逆探知は？」

「公園前のホテルからみたいだ。既に2課が向かってる」

「まあ、もぬけの殻だろうなア」

ヤスが煙草に火を点ける。

「なににせよ、忙しくなりそうだ」

「円卓の騎士壊滅のチャンスだ。ぬかるなよ」

「まあ、動かれる前に尻尾つかみたいねー」

「いい加減ニートには飽き飽きだぜえ。そろそろ俺の出番だろうしなあ」

「お祭りなんだけどおホッヒヒー」

「・・・ぐんまっで緊張感無いよね」

「さて、僕達は今の情報を頼りに、色々洗おうか」

時刻は既に21時を回っているが、7課の夜は終わらない。

c a s e . 0 3 e n d

演説から、既に3日経った。

木戸が居たらしきホテルは案の定もぬけの殻で、手がかりは何一つ無かった。

そこからは人海戦術で、演説を聞きに来た連中を片っ端から取調べ、日財に関する情報も再び洗い直し、今に至る。

1ヶ月程前から、日財の社員である木戸優一という男が会社に出勤しなくなっていること。

木戸の口ぶりから、今日の夜日本に帰国する総理が狙われる可能性が高いこと。

この2点以外、木戸に関する情報はほとんど得られていない。

坂上の関係者によると、演説の1週間程前からよく電話をかけるようになったらしいが、電話の内容は聞いていないし、不審な行動も無かったとの事だった。

捕まえた傭兵達を尋問しても、皆が皆「坂上に雇われた」と証言するだけであつた。

結局、木戸の後手に回るしかない。そんな現状に苛立ちを覚える。

そして今現在、俺の前には、信じ難い光景が広がっていた。

「くそー、どうなってんだよこいつら！死なないぞ！なんなんだよ！！」

ひよこが走りながら狼狽している。

「知るかよ。今は生き残ることだけ考えんぞ」

ヤスは振り返りながらベレッタを乱射し、再び走る。

「無駄弾使つなよお？頭だけ狙つとけ」

直毅は弾の無くなったショットガンを捨て、AKを取り出した。

「なあにこいつらあ。足はあやいんだけどお！？」

「いいから走れぐんま！追いつかれたら終わりだぞ！！」

4人は市街地をどうにか抜け、都心部へと続く工業地帯へと入った。

「行き止まりかあ。こいつあ終わったかもなあ」

「おゝいまジかよお。逃げられんねえだろお」

路地裏に追い詰められた4人は、異形の者と対峙する。

そいつらは体の大部分が腐敗し、目が血走り、皆一様に口を開けながら襲い掛かってくる。

「見る、あそこに階段あるぞ！」

ひよこの指差す先に、別の建物へと通じているらしい階段があった。しかしそこに行くには3M近いフェンスを越えなければならぬ。一人では無理な高さだ。

「っち、俺の肩使いな」

直毅はフェンスに両手をつき、3人を登らせる。

「おい直毅はどうすんだよ!？」

「俺は・・・そうだなあ、やれるだけやってみつか」

既に弾も尽きた直毅は、路地にあつた木材を手に取り構える。

「馬鹿一緒に行くぞ！はやくこつち来い！」

「時間稼ぎにでもなりやいいんだ。おら、いいから先行け」

「はあやく行くよひよこお」

ヤスとぐんまが階段に走り出す。

「くそっ・・・死ぬなよ、直毅」

「お互いなあ」

「さてえ、テメエ等の脳天力チ割る準備は整つたぜえ」

もう一度木材を握りなおすと、直毅は異形の者の群れの中へと消えていった。

「ありや直毅死んだなあ」

「手向けだ。取っときな」

ヤスは振り返ると、群れの中へと手榴弾を投げ込む。

手榴弾は群れの一部と、瀕死の状態で持ちこたえていた直毅とを、

フェンスごと吹き飛ばした。

「馬鹿野郎フェンス壊すなヤス！」

「ゾンビきてるう！ヤスはあやくう！！！」

「うるたえンな。走りや間に合う」

「お前等俺にトドメ刺したのはスルーかよお・・・」

コーラを買いに下の階まで行き、会議室に戻ってきたらこの有様だ。会議室のスクリーンには、ゾンビを蹴散らしながら進んでいく3人の男女が映し出されている。

俺は無言でゲーム機に近づき、その電源を消した。

「あ、おい優輝！今ボス戦直前だったのに！！」

「オマエ見てわかんねえのか。相当いいとこだったろおが」

「俺の犠牲・・・」

「なあにやってるう」

各々が俺に向かって抗議の声を上げている。

しかしこの場では俺のといった行動を咎める権利のある者は居ない筈だ。

「こっちの台詞だ。今は仕事中で、ついでに言つと警戒状態だ。仕事中にゲームを堂々とやる奴が居るか」

こいつら足りないのは忍耐仕事意識焦り危機感真面目さ誠実さ、そして何より緊張感が足りない。

「でも実際俺等はお留守番なンだしよお。もう調べることも無いしな」

「適度な？休憩も？必要なんじゃないんですかねえ？」

個人的にもものすごく直毅を殴りたかったが、ここは我慢する。

「確かに休憩は大事だ。だがゲームを始めるのは休憩とは言えないだろう」

「ちげえんだよ」

「ん、どうしたぐんま」

「養つてたんだよ」

「何をだ」

「判断力」

最早言い訳にすらなっていない。

「よしわかった。判断力が養われているかテストしよう」

「なあんでもこい」

「俺は今、かなり頭にきている」

「みればわかるよおホヒヒ」

「そして俺の内ポケットには、弾の入った銃が」
「すいませんでした」

「ふん。確かにいい判断力だ」
俺は少し笑うと、買ってきたコーラを皆に配る。
いかん。こいつのペースに流されている。

「とにかく、だ。俺達もいつ呼び出しがかかるかわからない」
現在空港にはジョニーと武信、それに1課と3課が待機している。
俺達は木戸が別の動きを見せた時の為、本部で調査がてら待機だ。
仕切り役のジョニーが居ない分、俺が頑張らないとまずい。

「いつでも出動できる様に、各自準備しておけ」

「なーんかもう出勤要請かかるみたいよ？」
ひよこがそう言った直後、会議室のドアが開かれる。

「ほ、報告します・・・」
息も切れ切れに、4課の1人が口を開く。

「内線使えばいいのにご苦労さんだなあ・・・あ、ゲームすんのに
線抜いてたか」
直毅がとんでもない事を口走った気がするが、今はそれどころではない。

「何があった」

「町外れの指定能力研究施設で、人質を取った立て籠もり事件が発生しました」

指定能力研究施設。

本来人間に備わっている、本質的な力。

それらは普段はリミッターがかけられていて、自分が危機的状況に陥った場合、

限定的に開放される。所謂火事場のクソ力だ。

そのリミッターが外れっぱなしになってしまった者、または意識的に外せる者。

それらを総称して、この国では能力者と呼んでいる。

その能力者の中でも、更に何かに特化した人間。それを指定能力者と言う。

具体的には、普通の人間の範疇を超える力を行使できる存在。

指定能力者自体数が少なく、発現の条件も曖昧だ。

その力を発現させる条件を研究してるのが指定能力研究施設、だったか。

あまりこういう内容は得意じゃないな。武信やひよこの方が詳しくうだ。

「人質の数はわかってるん？」

「恐らく15人。その時間まで施設に残っていた人間全員です。

2課が向かっていますが、そちらに最終的な指示を頂きたい、と」

「ついあたなの立て籠もりなら適当に突入させて終わらせちゃえっつーの。なんかまずい事でもあんのかあ？」

直毅が欠伸びながら質問を投げる。緊張感が足りていない。

言いよどむ。

「犯行グループが、自らを円卓の騎士と名乗っています」

「だろおとは思ってたけどなあ。おいジョニー。どうすんだ」
少し遅れて、スピーカーからジョニーの声が響く。

「うーん・・・さすがにこっちの人員は回せないし、君達を全員回すわけにもいかないし・・・」

「こっちで二手に分かれるのがいいんじゃない？立て籠もり組のほうと、待機組のほうにさ」

ひよこが提案すると、不意に4課の1人がインカム越しに何かを話し始めた。

かなり焦燥しているようだ。堪らず声を掛ける。

「どうした、動きがあつたのか？」

「はい。犯人グループの要求は、現在収容中の囚人の解放。要求が聞き入れられない場合、人質ごと研究所を爆破する、と言っています」

「それは急がないとだねー。とりあえず立て籠もりなら、俺確定だよね？」

「あとは俺でいいかあ。怪我人増やすのもアレだしよお」
ひよここと直毅がそれぞれ立候補し、班決めが終わる。

こういうやりとりをしていると、まだ平和だった学生時代を思い出

してしまつ。

「さて行くかあ。運転は任せな」

「頼むから着く前に事故るなよ・・・」

「一応ここから指示を飛ばせるようにしておく。何かあったら連絡しろ」

「あいよ。ちよつくら行つてくるわ」

俺はジョニーの代わりに2人を送り出し、会議室へと戻った。

012 - 季節はずれの蜚1

3月4日。 17時半頃。 施設内警備室。

「施設外周および全区画、異常ありません」

『そうか。引き続き外の動きを警戒しておけ』

「了解しました・・・ん？」

『どうした』

「黒いコートを着た男がこっちに・・・」

直後。施設内の電気系統は、一斉に眠りに就いた。

男2人を乗せた黒いセダンは、夕暮れ時の街中を疾走する。

街中は学生が多く、スーツ姿の人たちもちらほら見える。交差点は信号待ちの人で溢れているし、バス停も混み合っている。要するに、帰宅ラッシュ真っ最中なのだ。

車道の交通量も少なくない中、黒いセダンは疾走する。車の間を縫うようにして。

「いやーゴキゲンだねえ。ハヤイハヤイ」

法定速度を軽く超えたセダンを操る直毅は、かなりの上機嫌だ。

「街中なんだからスピード落とせよー・・・」

ひよこはカーオーディオを操作し、ジャズ調の落ち着いた曲をかける。

直毅は口で言ったところで車のスピードを緩めない。高ぶった気分を落ち着かせるためには、こういった曲を流すのが一番なのだ。それを裏付けるように、車は次第に減速を始める。

「ジャズ聴くと煙草吸いたくなるよねー」

「お前はいつも吸ってんだろ。火借りるぞ」

「あーごめん、オイル切れたっぽい」

ひよこは何回かライターの点火を試みるが、やはり火は点かなかった。

「時にひよこちゃんよお」

直毅が正面を向きながら。

「ちゃん付けはやめれ。どした？」

ひよこに問う。

「・・・畏だと、思うか？」

「うーん、畏っていうかねー。陽動つての？俺たちを分散させて、一人ずつ消していく算段じゃないかな？」

木戸は、脅威となる人間を消す、と言っていた。

彼の能力の特性上、1人で居るところに自害を誘発するような命令をするのが、最も手早く効率的に標的を仕留められる。

それを避けるために7課メンバーは、木戸からの電話以後、極力2人以上での行動を心がけていた。

「まあ、俺等個人の携帯番号でも手に入れない限りは、一対一で会話することなんてそう無えだろうしなあ」

「用心するに越したことは無いけどねー。さて、そろそろ着くんじ

やないん？」

既に街中を抜け、山道に入っていた。ダッシュボード上の煙草が小刻みに揺れる。

「よくもまあこんな辺鄙な場所に建てるもんだ」

「辺鄙な場所だからこそ、じゃないの？ いかにも怪しい研究やつてますよーって感じでさ」

舗装の行き届いていない道路を越え、木々に遮られていた視界が開ける。小高い丘の上に、それは建っていた。

研究所の外観は、そんないかにもな雰囲気漂わせていない。一見するとデザイナーズマンションと見紛う佇まいである。2階建ての造りに、バルコニーまであるようだ。

周りを取り囲むように、パトカーを含む車が計8台止められていた。そこから更に離れた場所に駐車し、2人は研究所へと向かう。

「7課の増援でーすよー。状況はどんなかんじですかい？」

間延びしたひよこの声に、コートを羽織った中年警官が答える。

「芳しくないですね。既に二人、人質が殺されています」

「・・・あ？お前等はそれを黙って見てただけか？無能共」
直毅の声が荒くなる。

「し、しかし、囚人の解放ともなると、時間がかかりまして」

「嘘でもいいから開放したつつつときゃあ、殺されなかったんじゃねえのかよ」

声に凄みが増す。

「おい直毅、攻撃する相手が違う」

「ucci、まあいい。ひよこ、中の様子はどうなってる」

ひよこは直毅を宥めると、すぐさま力を使い、建物内を探る。

「ちよいとお待ちを。・・・うーん、クリンコフ抱えた奴らが七人と、座らされてる人達が十三人。一部屋にまとめられてるね。その部屋の前にも銃持った奴が一人いる」

「あ、そうだ。監視カメラとかついてますここ?」
警官に尋ねる。

「付いてます。これが見取り図ですが」
ひよこは地図を受け取りにこやかに笑うと、

「いや、配置が知りたいとかじゃないんですよ。2課の皆さん、悪いけどお願いしますねー」

2課に指示を飛ばす。

「糞野郎共は八人かあ。そんだけわかりや充分だ」
直毅はP90を構え、入り口へと歩いていく。

その背中に向かって、警官が声をかけた。

「お、おい！まだ中には人質が・・・」

「全員生きた状態で助け出してやんよ。人質は、だがなあ」
直毅は語尾を上ずらせ、歩みを早める。

「彼一人で本当に大丈夫なんですか・・・？」
直毅に声を掛けた警官が、ひよこに話しかける。

「あ、2課から聞いてないですか？あの人は単独じゃないと、自由に動けないんですよ」

「いえ、そうではなくて・・・銃を持った数人を相手に、人質全員無傷で救出などと、普通じゃ考えられません。ましてやそれを単独でなんて」

「うーん、ちょっと心外だなあ」
ひよこは苦笑し、

「俺たちは普通じゃないんですよ。有り得ない事を起こすのが当たり前で、常識外れが正常なんです。まあ、少し待ってて貰えば判りますよ」

警官はそれ以上、何も言えなかった。

「ひよこちゃんよお。ナビは任せるぜえ」

「ちゃん付けやめろつての。まあ任せるよ・・・正面に標的無し。奥の部屋に二人。階段に二人。あとは全部二階だ・・・あー、駄目だバレたわこれ。奥の奴等がこっち来てる」

「オーケー。Lock・n・load・行くぜ糞共」

P90をコッキングすると、直毅は正面から堂々と建物に侵入した。

夕陽の射し込む薄暗いロビーを抜け、直毅は2階へと続く階段に向かうため、廊下を歩く。

『そのまま進んだ先にT字路あるからね。そこを左』
ひよこがナビゲートし、その通りに歩いていく。
廊下はロビーよりいくらか明るかったが、カーテンのようなもので窓が覆われているため、日中よりは見通しが悪い。

『そこから二人。両方こっち来てるね。接触まで三秒くらい』
耳を澄ますと、T字路の左側から2人分の足音が聞こえてくる。

「了解つと」
迷い無く、左に曲がる。

確かにクリンコフを持った二人組が、こっちに向かってきている。
直毅はその横を堂々と通り抜け、背後から声を掛ける。

「おいおい、顔パスとは俺もVIP待遇だなあ」
振り向く暇も与えず、背中に向けて銃弾を浴びせる。

「んーん。 yummy」
銃口から立ち上る煙に息を吹きかけ、直毅は再び歩き出す。

『無駄口叩いてないで早く階段向かって』

「わあったよ。んで次は？」

『しばらく歩いて突き当りを右。その次の突き当たりの左に階段だ』

「へいへい」

施設の外では、いつでも突入できるように警官隊が待機している。それを一瞥し、ひよこは煙草を吸っている。ライターは2課から借りた。

『テメエ悠々と煙草ふかしてんじゃねえぞひよこお』

「吸ってた方が集中できるんだって。今は作戦第一だからね。ホラ早く早く」

『これだからバックアップはよお・・・っと、居やがるなあ』
直毅が立ち止まる。

「階段中腹に一人、二階あがったところに一人だねー」

『仲間二人やられて見に行かないあたり、薄情な奴等だなあおい』

「見に来てたら来てたで、馬鹿な奴等だぐへへー、とか言うんだろ？」

『よくわかってるじゃねえか。終わったぞ』
会話している最中にも、直毅は二人を掃除した。

二階に上がり廊下を確認する。

ひよこの話によれば、この先の管制室に一人、その扉の前に一人いるはずだ。

「ここから先はスピード勝負だ。サツと行くぞサツと」

『そこは貴方様の手腕にかかっていまっせ。人質部屋前の奴はまだ動き無いね』

「なら良かったぜ。さて行くか」

肩を鳴らし、直毅は管制室に向けて一直線に走り出す。少し走って左に曲がり、突き当たりを右へ。

曲がる前に、左側の扉の前で無線機に向かって話している大柄な男のこめかみを撃ち抜き、そのまま人質の捕らわれている部屋へと向かう。ここからはそのまま一直線に走り、ロビーを抜けたすぐ先が目的地だ。

『直毅ストップストップ！部屋から一人出てきてた！！』

「遅えよ。見つかった」

見ると、ロビーの真ん中に一人、銃を構えた男が待ち構えていた。

「お前が下の奴等をやったのか」

声に怒りが籠っている。その怒気は、離れていても伝わる程だった。

「聞くまでもねえだろ？まあとりあえず、死んどけ」

間髪入れずにP90を乱射する。

しかし、放たれた計38発の弾丸は、1つとして男を捉えることは無かった。

「ああ？あーあれかお前。今流行りの弾の軌道見える系男子か」

銃弾を全て避けきった男は何も言わず、腰ために構えたモスバークM590の引き金を引く。

「ショットガン！？聞いてねえんだけどお！？」

直毅は咄嗟に目の前にあったテールブルを蹴り上げ、散弾の盾にする。そのまま横に立て掛けられていた長机を男に投げつけるが、これもあっさりと避けられる。

一瞬で距離を詰められ、今まさにM590の引き金が引かれる直前、

「タイムタイム！マジでそんなんで撃たれたら流石の俺もミンチだつて！」

一瞬躊躇したが、そのまま直毅の頭に向けて発砲する。

放った弾丸は、壁に穴を開けるに留まった。

「愉快だねえお前」

後ろから、声がする。先程頭を吹き飛ばす予定だった奴の声が。男は意識を集中させ、振り返りざまにM590を撃つ。しかし、またしても散弾が直毅をミンチにすることは無かった。

アドレナリンの意図的な過剰分泌によりスローモーションになった景色の中、男は周囲を見回す。直毅の姿は見受けられない。

「突入された。人質を全員始末しろ」

無線機に指示を飛ばすが、返答は無かった。

「おい、どうした！？」

「いやあほんと愉快だわ。いい加減気づけよ」

再び周囲を見回す。打ち抜いたテーブルも、避けたはずの長机も、全て元の位置に戻っていた。

そして目の前には、P90を構えた直毅。

「貴様つ・・・時間を操作して・・・？」

「ハッハア！！んなわけねえつての！！」

直毅は左手で顔を覆い、笑っている。その間にも、銃口は男を狙っている。

男は既に発砲する気も無くしていた。こいつには絶対勝てない。本
能がそう告げている。

「一つだけ教えてやらあ」

「能力者つてのが認知されてから、メディアで超能力やら手品の特集しなくなったんだわ。どうしてだと思う？」

男は気づく。机は元からそこにあって、動かされていないことに。自分の放った散弾が、全て壁と床に着弾していたことに、気づく。

「まあつまりは、そういう事だ」

答えを聞く前に、直毅のP90は、マガジンに残っている弾丸全てを吐き出した。

『危なそうな奴等は全部始末したぞ。警察の皆々様方に突入の命令でも下せ』

1 本目の煙草を吸い終わる前に、直毅から任務完了の報告を受ける。

「お疲れーい。あ、皆さんもう入っても大丈夫みたいですよ？」
煙草の火を消しながら、ひよこは警官隊に指示を出す。

『ああ、それと』

「ん？」

『管制室に閉じ込められてるマヌケ一人居るから。そっちは何とかしといてくれや』

ひよこは再び意識を集中させ、2 階を探る。

管制室の前に死体が1つ、ドアにもたれかかるようにして倒れている。

「成程、つつかえ棒的なアレね」

『まあ偶然だけだなあ。ああ疲れた』

インカム越しにため息が聞こえ、通信が切れた。

そういえば、と思い、ひよこは2 課の一人に尋ねる。

「すいませーん。犯人の要求って、囚人の解放でしたよね？」

「はい。それが、何か？」

「具体的に誰を解放して欲しかったのかなーと」

「ああ、報告していませんでしたね。開放を要求された囚人は全部で九人。名前は・・・」

ひよこは読み上げられた名前を確認していく。どれも殺人犯やテロリストの名前だったが、そのうちの一人に、聞き覚えがあった。

「どうしてここでその名前が出てくる・・・奴等の目的は陽動じゃないのか・・・？」

ぶつぶつと独り言をつぶやくひよこをよそに、煙草を啜えた直毅が建物から出てきた。

「いやー腰痛ってえ。ひよこ、火くれ」

「ライター持ってんだろ。自分で点ける」

「部屋に忘れちまったみたいでよあ、仕事終わりに今すぐ一服」
言い終わる前に、通信が入る。

『事件解決ご苦労様、すぐ動けるかい？』

「おおジョニーか。そっちはどうだ？」

時計を見ると、午後6時を回っている。総理の帰国予定時刻を過ぎていた。

『すまない、やられたよ』

「・・・は？」

『総理が、木戸に攫われたようだ』

「What's the fuck! ? なんのために出迎えしてたんだクソが!!」

頭を抱える直毅。無理もない。

『車は優輝君達が空から追ってる。君達はとりあえず』

「ジョニーと武信拾いに行くわけね。了解了解。ホラ直毅行くぞ」
ひよこに引つ張られ、直毅は再び車を運転する。

日もすっかり暮れた午後6時10分。黒いセダンは、林の中へと消えていった。

c a s e . 0 4 e n d

こんな光景を、以前も見ていた。

神が救ってくれないのなら、俺が救ってやる。あいつにそう誓った。

二度と同じ過ちは繰り返さないと、自分に誓った。

あの時は駄目だったが、今回ばかりは譲ってやれねえな。だってそうだろう？

人間ってのは、失敗を乗り越えて成長してくモンなんだから。

奴の口元が、動く。

「さあ、そいつの頭を撃ち抜け」

そして俺は、クソッたれに向かってこつこつ言ってるのだ。

「もし俺が」

c a s e . 0 5 - p r e t e n d e r .

17時45分。東京中央空港。

ジョニーと武信は、他の警官隊と共に整列している。

「もうすぐ総理大臣機が到着する。各自、先程指示されたとおりの配置につけ」

現場指導責任者である夜見川翔平^{やみかわしょうへい}の指示を聞いている最中である。

「尚作戦中は、先の坂上議員の事件を考慮し、通信機の類は使用できない。作戦行動中に通信機を使用した場合、もしくは使用しているのを見かけた場合は、発見した者が直ちに止めに入れ」

「空港を出てからは、作戦を別の部隊に引き継ぐ。しかし空港出るまでが作戦だ。各自気を抜くな。以上だ。では、持ち場に戻れ」
小学校の校長のような号令と共に、整列していた警官隊が一斉に散っていく。

「・・・みかさん、偉くなったね」

武信がジョニーに耳打ちする。みかさんとは、夜見川のおだ名である。彼は7課メンバーの中学時代の先輩であり、ジョニーの後輩だった。

「彼も頑張ってるからね。君達と同じように」

「何々、俺のはなしー？」

夜見川がとことこと近づいてくる。

「・・・みかさん、持ち場につかなくていいんですか？」

「いやー本当は無線で指示しなきゃなんだけどー。今回無線ダメじゃん？だから暇で暇で」

「・・・いや、指示以外にも色々やる事あるでしょ」

「おお？言うようになったねえ武信君」

「まあまあ夜見川君。僕達もなんだかんだ、総理が来るまで暇なんだ」

ジヨニーが会話に刺さる。

「あ？誰だテメエ喧嘩かゴラ」

夜見川が物凄い剣幕でジヨニーに食って掛かった。

「一応、君の先輩なんだけどね・・・」

「いやいやー冗談ですよ冗談。他のみんなは元気してます？」

「元気すぎて逆にみんなテンション低いくらいだ。今度呑みに行こうか」

「あ、もう着く時間じゃないかな？」

夜見川は腕時計を確認し呟く。まるで話を聞いていなかった。

「そうだね・・・僕昔からこんな扱いだったね・・・行こうか武信君」

「二人とも頑張ってねー」

ジヨニーは誰が得をするのかわからない泣き真似をして、武信とタ

ラップへと向かう。

17時50分。特別駐機場。

移動式のタラップが飛行機へと接続される。

その中から黒いスーツを着た男達とともに、白髪に立派な白髭をたくわえた日本国総理、船木が姿を現す。

護送車までのルートには空港関係者や先程の一部の警官隊員が一行に並び、総理の帰国を見届けていた。

「・・・総理、お疲れ様です」

武信が声を掛ける。

「ふむ。君は・・・誰だったかな」

「・・・武信ですよ。一ヶ月で顔忘れないでください」

「おおそうだったそうだった。武信に、ジョニーもおるな。出迎える苦勞」

「お元気そうで何よりです」
ジョニーが一礼する。

「うむ。まだまだ元気だ。下の方も」

「公衆の面前で堂々と下ネタを披露しないでいただけますか」

「おっと、そういえば」

総理がポケットをまさぐり、

「土産だ」

小さいこけしのようなものを取り出し、ジョニーに手渡す。

「何ですかこれ？トーテムポール？」

「僕とお揃いだぞ？ほら喜ばんか」

渡したものと同じ物をちらつかせ、白い歯を見せ付けるように笑う。

「はあ、どうも・・・」

「では僕は失礼させてもらおう。これから大事な用があつてな」

「会見ですか？」

「いや、帰って寝る」

言葉も出ない。

「旅疲れという事にしておけ。それと、その土産は大事に持つておくのだぞ？ではな」

横のボディーガードに出発を促し、総理は護送車へと乗り込む。

「・・・あんな糞ジジイが国のトップで大丈夫なの？」

「武信君、さすがに糞ジジイは言いすぎだ・・・」

護送車の開いた窓から、総理が笑顔で手を振っている。

そして、何か口元が動いたように見えた。

「・・・総理、今なんて」

一瞬の間があり、

「大変だ。武信君、出動準備して」

「・・・え？え？」

状況を把握できていない武信を余所に、ジョニーは待機班に無線を飛ばす。

「優輝君、出動準備だ。総理が攫われた可能性がある」

「詳しく聞いている時間は無さそうだな。了解した」

「護送車の発信機から、場所を特定してくれ。こっちは車で向かう」

「なら俺等はヘリのが速えな。先にヘリポート行ってンぞ」

ヤスが駆け足で会議室から出ていく。

「恐らく総理自体に危害を加えることは無いはずだけど、用心してね」

「了解。俺達も行くぞぐんま」

「ホヒヒー」

ジョニーは無線を切ると、続いて立て籠もり班に繋げる。

無線を終えたジョニーは、ため息を一つついた。

「施設からここまで恐らく10分もかからないはずだ。その間に準備を済ませないと」

「・・・ジョニー、なんで総理が攫われたの？普通に護送車に乗ったじゃない」

「追ってこい」

「・・・え？」

「追ってこい、だよ。総理はそう言ったんだ。加えて言うと、護送車を運転しているボディーガードは、小型の無線機をつけていた」

「それに、この土産は」

ジョニーが土産を耳元に近づけると、確かに総理の声がした。

3月4日、18時15分。総理大臣護送車内。

「ふむ。儂の家はこっちでは無いはずだが」
運転手は、何も答えない。

「儂は早く帰って床に就きたいのだが、寄り道か？磯貝よ」

「そんなところです」

磯貝と呼ばれたボディーガードは、前を向いたまま返答する。

「何処へ向かっている？それくらい聞かせてくれても良からうて」
船木は、再び磯貝に尋ねる。

「ボスの所へ、お連れします」

「ふむ・・・なあ磯貝よ」

「何でしょうか」

「儂、寝ててもいい？」

「・・・」

総理は、ドライブを楽しむ気は無いらしい。

18時20分。7課人員輸送へリ。

『優輝君、そっちはどうなってる?』

「総理護送車を発見、追跡中だ。今のところ以上は無い」

『了解。こつちもそろそろ・・・来たね』

『迎えに来たぞジョニイイイイツ!!』

『直毅速いって!!止まれ止まって止まってください!!!』
インカム越しに騒がしい声が聞こえる。どうやら、ひよこ達が空港に到着したらしい。

『ヘイお待ちい』

『死ぬかと思つたー・・・』

『二人とも本当に申し訳無いんだけど、武信君連れて護送車を追つてくれ』

『マジで人使い荒えのな。ジョニイはどうすんだ?』

『僕はいつも通りだ。ここから武警に指示を出すよ』

『ジョニーもたまには前線出張れよ。なまっちまうぞあ？』

「役割分担だ。司令塔が居なくなれば、俺たちはただの木偶の坊だ」

『まあ文句はないよん。とりあえず武信はやく乗って』

『・・・う、うん』

「ヤス、車は何処に向かつてるかわかるか？」

「まだ特定できねえな。走り方から見て、目的地に一直線ってわけじゃ無えみたいだが」

「追跡振り切ってるんじゃないか？なあ、なあて」

「やかましいぞぐんま。どの道、ヘリの眼からは逃げられない」

18時25分。セダン車内。

「で、なんで攫われたってわかったんだジョニーよあ」

直毅がインカム越しに問いかける。

『総理総理の口の動きもそうだったけど、決め手はこの土産だ。どうやら小型の通信機らしい』

「抜け目ないねー。まるで自分が狙われるの知ってたみたいなの周到さだね」

『僕も一連の事件については総理に逐一伝えていたからね』

「・・・まあさすがといえさすが、だね」

感心した素振りをみせる武信。糞ジジイ発現も何処へやらである。

『それで、護送車内の会話が筒抜けというわけか』

『うん。運転手はボスの所へ連れて行く、と言っていたよ』

「このタイミングじゃあほぼ確実に木戸のところだろうなあ。んで、総理は今どうなってる」

『寝てるみたいだね』

『・・・あの糞ジジイ大した肝っ玉してやがンぜ』

「まあ船木の爺さんらしいけどねー。あ、あれ護送車じゃない？」

『ついでに目的地みたいだよおホヒヒー』

護送車は住宅街の外れにある、一際大きな家の前で停車した。

18時28分。護送車内。

「総理、着きました」

「・・・おお？もう着いたのか。惰眠を貪る暇も無かったわい」
船木は磯貝に促され、車から降りる。

「ボスがこの中でお待ちです。私が先導します」

「ふむ。ボスとは、円卓の騎士の木戸優一の事か？」

「そこまで掴んでおいででしたか。ならば話は早い」
磯貝の口ぶりが変わる。

「総理、貴方に話がある。今少しだけ、私の話を聞く気は無いか」

「その前に一つ質問じゃ、木戸よ」

「何だ」

「こやつは、磯貝は、お主に操られているだけなのか？」

「そついつ事になる」

へりの羽音が聞こえる。

「ふむ・・・ならば、良かった」

そう言って一呼吸置くと、船木はにやりと笑い、

「側近を手にかけるのは、いささか気乗りしなかったものでな」

磯貝の首に、手刀を振り下ろした。

そのまま地面に倒れる磯貝を抱きとめ、運転席に寝かせる。

「若造の与太話に付き合うほど暇では無い。僕は帰って寝るのだ」

18時30分。7課人員輸送へり。

「総理、お迎えにあがりました」

優輝が低空飛行するへりへと、船木を迎え入れる。

「はて、君は誰だったかな・・・？」

「・・・ヤス、出せ」

「おオよ」

船木のボケを受け流し、へりは再び浮上する。

「怪我等は・・・無いようですね。よくぞ無事で」

「それよりも、昼飯はまだだったかのぉ」

「うつせーぞ糞ジジイ。ボケるには早えンだよ」

「何だと！？僕は総理だぞ！貴様誰に向かって口を利いておる！！」

「いきなり国家権力を振り翳さないでください」

『優輝君、そっちは大丈夫かい？』

「問題ない。総理をこのまま送り届ける」

『こっちは任せろや。頼んだぞヤス』

ヘリの中から、直毅達が家屋に突入していく姿を認めた。

「よし、このまま・・・おい、何だこの音は」

警告音のような音が、断続的に機内に響き渡っている。

「・・・オイオイマジかよ、ちょっと揺れンぞ」

ヤスが眩き、ヘリの機体が傾く。

その横を、ロケット花火を大きくしたようなものが、煙を引いて通過していった。

「RPGか！？どこから・・・」

場所を特定する間も無く、次々とミサイルが飛んてくる。

「馬鹿がよお。俺のヘリに当てられると思ってンのかあ？」

「あいつら見境なしかよお！？お祭りなんだけどホヒヒ」

「この揺れは、ちと年寄りにはきついわい・・・」

「ジジイ根性見せろよお」

「お年よりは大事に扱えと教えなかったか？ぐんまよ・・・」

「ああ？俺、女子供と年寄りにはつえーから」

「最低だなお前・・・ヤス、いけそうか？」

「たりめえよ。直線軌道は予測しやす・・・あ？」

先程とは違う警告音が聞こえた。

「91式か！？誘導弾にロックされた、避けらんねえ！！！」

「フレアも間に合わない、か。ヤス、機体を横に向ける」

「正気の沙汰じゃねえだろ！？何言ッて・・・」

「横に、向ける」

それ以上、優輝は何も言わない。

「・・・任せたぜエ、凄腕さんよ」

言われるがまま、ヘリの機体をミサイルの軌道と垂直に向ける。

優輝がうわ言のように呟く。

「目標12時方向、2時方向。無風。揺れを考慮・・・修正。ミサイル距離約70、60・・・捉えた」

「生憎、爆発物は嫌いだな」

優輝の構えたバレットライフルから、瞬時に2発の弾丸が発射され

た。

1発目はミサイルを確実に捕らえ、2発目は、次弾を発射しようとしていた射手の91式を貫いた。

爆発に伴う揺れをヤスは瞬時に修正し、全速力を以って住宅街から遠ざかる。

「パネエっす優輝さん！！儂マジリスペクトしてるっす！！抱いて！！」

「年甲斐も無くはしゃがないください。それと、まだ狙われる可能性があるので何かに捕まってただけですか」

「うむ。一ついいか」

「なんででしょう」

「捕まってさえいれば、寝ていても問題ないのか？」

「どんだけ寝たいんだあんたは」

ヘリはとっくに住宅街を抜け、海へと差し掛かっていた。

18時35分。邸宅入口。

大きな屋敷だった。今日制圧に出向いた施設と同じか、それよりも大きい。

「ひよこ。中の調査を」

「今終わったとこ。1階の奥の部屋に男が一人・・・居るんだけどひよこが言葉を切る。」

「・・・どうしたの？」

「いや、それがこいつ・・・」

『皆、聞こえているか』

優輝から3人へ通信が入った。

「船木のジジイはどうなった？」

『問題無い。安全圏に抜けた。今から一旦、7課に戻るところだ』

「そいつぁ良かった。こっちも今から木戸を確保する」

『気をつける。俺達はRP・・・撃を・・・何らか・・・通信に、ノイズが混じる。』

「おい優輝、聞こえるか!？」

『・・・した・・・ろ・・・直・・・』

混じっていたノイズの度合いが増し、遂には完全にノイズに侵食された。

「糞が、電波妨害かよ」

直毅は齒噛みし、通信を切る。

「・・・とりあえず、奥の奴を確保しに行こう」

「あ、ああ・・・」

「んだよひよちゃんよお。何か気になることでもあんのか？」

「奥の奴・・・多分だけど、死んでる」

18時37分。7課人員輸送へり。

総理は宣言どおり、ヘリの座席にしがみつながら寝ていた。

「駄目だ、通信が切れた」

『木戸の妨害と見て間違いないだろうね。1課と3課で手の空いてるものを向かわせたよ』

「出来るだけ早めに頼む。俺達じゃ時間がかかり過ぎる」

このまま7課に戻って総理を預け、また向かうとしたら確実に40分は掛かる。ましてや総理を連れたままなど問題外だ。

武警の応援が到着するとしても最短でも20分。途中でへりを妨害してきた集団のことも考えると、それ以上かかるのは確実であった。

「まああいつらなら大丈夫なんじゃないかねえか？」

「俺たちじゃどうやっても間あに合わねえしなあ。ホッヒヒ」

「そう、だな・・・」

18時40分。邸宅1階寝室。

「武警7課だ。動くなよ糞野郎」

寝室のドアを蹴破ると、確かに1人、男が居た。

作業服を着た男は体を椅子に預けたまま、微動だにしない。

「ほんとに死んでやがんのかテメエ」

直毅が銃で男の頭を小突くと、男は力無く床に倒れた。

「・・・みたいだね。しかも、死んでからまだ時間経ってないみたい」

武信が体を調べる。男に目立った外傷は無く、眠るように死んでいる。

「・・・この作業服、大川重工の従業員・・・？」

「そういえば突入のとき、一人足りなかったねー。だとしても、なんでこんな」

「動くな。その状態で止まれ」
3人の背後から声がした。

「まず手に物騒な物を持っている君は、それを床に捨てて貰おう」
直毅は、声に従いP90を床に置く。

「能力を使われても困る。当分使わないで貰おうか」
7課にかかってきた電話の声と、同じ。

「私の言った事が理解できた者は、こちらに顔を向ける」
武信とひよこが振り向き、次いで直毅も後ろを向く。

「・・・あなたが木戸さん、ですか」

狡猾な笑みを浮かべた男が、そこに立っていた。

「問うまでも無いだろう。君達の今とった行動を考えればな」

「わざわざ本人がご登場とは、こつちとしても好都合だ」

「私としても出向きたくは無かったがな。死体の前でお喋りも気が進まない。着いてこい」

木戸は踵を返すと、2階へと歩き始める。3人もそれに倣い、木戸の後ろを歩く。

「武装した奴等相手に背中向けるなんて、大した余裕ですねー」
ひよこが愛想笑いを浮かべる。木戸は振り返りもせず、

「それに対する回答も、最早する必要が無いだろうな。今現在君達が体験している感覚、それが全てだ」
撃ちたくても、撃てない。止まりたくても、止まらない。足が勝手に動いている。

「ここだ。先に入ってくれ」

武信がドアを開け、3人は中へと通される。

正面の壁一面が大きな窓になっており、夜景が良く見える。窓の前には大きめの机が1つ。左右の壁には本棚が並べられ、本が隙間無く敷き詰められていた。どうやら書斎のようである。

木戸は3人を部屋の中心に立たせ、椅子に深々と腰掛けた。

「そうだな。まずは、隠している武器の類を、全て床に置け」
言われるがまま、各々所持している銃を床に並べる。

「しかしすげえな。意識しなくても勝手に体が動きやがる」
直毅が計5丁の銃を床に並べ、頭を掻きながら呟く。

「催眠術のようなものだ。私の声は人の意識に干渉する。尤も、こ

のような簡単な指示は反射に近い。急に熱いものに触れると、咄嗟に手を離すだろう？その様なものだ」
ひよこが鼻で笑いながら言う。

「木戸さん木戸さん。自分で自分の能力解説しちゃう悪役って、絶対負けるって知ってた？」

「勝ち負け等既に決まっている。君達はここで私に屈するか、死ぬ。確実に。それに私は、悪ではない」

「・・・実験と称して人を殺しておいて、悪じゃない、と言うの？」
武信が割って入る。

「そうだ。彼のような汚い政治家は、私の描く日本には必要無い」

「・・・ご高説を垂れ流した人の台詞じゃないね。大したエゴイストだ、あなたは」

「どうしても言うがいい。誰かが動かなければ、この世の中は変わらない。そういえば君の声は聞き覚えがあるな」

「・・・7課に電話してきた時には、僕が受け答えしてましたから」

「ふむ、成程。あの時は名前を聞いていなかったな。名前は何かという？」

「・・・武信です」

「武信君か。いい名前だ」

一呼吸置き、

「また、私の話に付き合って貰おう」
木戸は、語り始める。

「武信君、まず質問だ。そっちの二人の名前を教えてください」

「・・・金髪が直毅、その隣がひよこです」

「ふむ。ひよこ、というのはコードネームか何かかな？」

「・・・学生の時のあだ名です」

「学生の時という事は、学生時代からの友人というわけか。そうなのかな、直毅君？」

木戸は会話の対象を直毅に移した。

「ああ。つーか今そんな話は必要無えんじゃねえのか」
不機嫌そうな顔を形作る直毅。

「許してくれ。人とまともな会話するのは久しぶりなんだ」
一つ咳払いをし、

「話を戻そう。私の考えは、以前坂上を通して君達も聞いていたはずだ。覚えているかな？」

「さあな。政治家の演説なんかいちいち覚えちゃいねえ」

「まあそうだろうな」

木戸は笑う。

「すまない、気が利いていなかった。長話になるから、皆座ってく

れ」

直毅とひよこはその場であぐらをかき、武信は律儀に正座する。

「あの時は少し過激な言い方をしてしまった。私の目指す社会というのは、平たく言くと差別の無い社会だ」

「金や権力、能力者の差の無い社会。そういうものを理想としている」

「思想が共産主義者スレスレじゃねえか。時代に逆行してやがる」

「いや、一概にそうとも言えない。事実今の日本は民主主義を謳いつつ、実際は社会主義の体制に移行しつつある。そう感じたことは無いか？直毅君」

「まあ確かに、国民の意見なんか結局反映されて無いように感じるな」

「そうだろう。近々この国は社会主義国になるのではないかと私は危惧している。現在の政治家達思想が引き継がれたまま社会主義になってしまったらどうなると思う？武信君」

「・・・少なくとも、いい結果にはならないでしょうね」

「うむ。私もそう思う。思うからこそ、今を変えていかなければならない」

「今日船木総理と話をしようとしたのも、それが理由だ。あの方は影響力が凄まじいからな。あの方に話を通しておけば、下で働く者たちも考えを改めるかもしれない。そう考えた」

溜息を吐く。

「私が政治家であれば、こんな回りくどい事をせずに済んだのだがな。私は日財に就く前は、中学校で教師をやっていたんだ」

「能力が無かった頃でも、生徒は熱心に話を聞いてくれたよ。今の君達のように」

「お陰で私のクラスはイジメ一つ無かった。まとまりのあるクラスだったんだ。最初はね」

「ある時、クラスの生徒一人が、能力者となった。原因は家庭内暴力による、過度のストレスだったらしい」

「最初はクラスの注目の的だったが、彼女としては複雑だったんだろう。あまりクラスの輪に入ろうとしなくなってしまったね」

「そこからイジメに発展するまで、時間はかからなかった」

「私も見て見ぬふり等できなくてね。イジメをやめる様、クラスに呼びかけた。しかし、それが原因でイジメがエスカレートした」

「君達も最近まで学生だったならわかると思うが、最近のイジメは陰湿だ。最初は靴を隠され、次に机、鞆。アザを作ってくる日もあったね」

「彼女は三ヶ月程耐えていたが、遂に体調を崩してしまってね。学校に来られなくなった。家庭訪問しようにも、私は家に入れてもらえなかったよ」

「それから一週間もしないうちに、彼女は自室で首を吊った」
木戸が引きつった笑みを浮かべる。

「自分の無力さを呪ったよ。私が生徒達にもっと強く言っていれば、あの時無理にでも家に押し入って話を聞いてあげられたら、何か変わったかもしれない、とね」

「葬式では私以外誰も泣いていなかった。彼女の両親すらも、誰一人として」

「そのことにひどくショックを受けてしまってたね。私は三日ほど寝込んだ。私にもっと力があれば、と思いながら」

「結果として私は、その時に能力者となった。誰もが私の発言に絶対に従うという能力を授かった」

「皮肉なものだろう？彼女の自殺が原因で、彼女の自殺を止める手段を手に入れたのだから」

「そんな時だった。円卓の騎士と呼ばれる集団があることを知ったのは」

「彼等は今の日本の現状を変えるために様々な策を講じていた。私の力があれば日本を変えられるかもしれない、とも言ってくれた」

「私は教師を辞め、日財に入った。円卓の騎士としての活動をする為にね」

「二度とイジメや争いが起きないような、そんな誰もが幸せな世界にするために、私は立ち上がったんだ」

「私はこの力を使い、この国を支配する。たとえ独善的であろうとも、誰かがやらねばならないからな」

木戸は深呼吸し、3人に呼びかける。

「君達の力があれば、私達の計画も簡単に実行できる。あの時は断られたが、今一度聞こう。私達に協力する気は無いか」

「断る」

ひよこが力強く答えた。

「あんたは宗教家に向いてるよ、木戸さん。神様にでもなるつもりか？ただまあ、俺たちの心には届かなかったけどね」

「俺”たち”というのは、語弊がありそうだ。違っかな、武信君？直毅君？」

木戸が歪な笑みを浮かべ、2人に問いかけた。

「・・・協力します、ボス」

「OK, Boss」

「おいおい二人とも、何言って・・・」
言いかけて、ひよこは気づく。木戸の術中に嵌められていた事に。
木戸の話を聞いた時点で、彼の張る蜘蛛の巣に絡め取られていた事に。

「お前、さつき二人に関係ない話をしたのは・・・」

「坂上の件を何も生かしていないな君達は。私の話を少しでもまともに聞いたら、それまでだというのに」

「下準備ってわけかよ、糞野郎が」

「今更気づいても遅い。既にひよこ君以外の二人は、私の意のままだ」

武信も直毅も、木戸から視線を外さない。武信に至っては目が虚ろである。

「おい武信！直毅！目覚ませ！！」

「無駄だよ。それにしても君は面白い。聞く気が無いとはいえ、私の話を聞きながら、洗脳に耐えるとは」

「他人の人生なんか興味無いんだよ。自分のことだけで手一杯なんでね」

ひよこは床から銃を拾い上げるが、

「止まれ」

木戸に先手を打たれる。

「くそっ・・・！！」

「君は何か洗脳に対する対策をしているようだな。流石に解けるのが早すぎる」

「言ってる。どの道もつお前に逃げ場は無い」

遠くからパトカーのサイレンが聞こえる。増援が到着したようだ。

「ふむ、少し話すぎたようだな。もう7時10分過ぎか」

「頃合いだ」

木戸は立ち上がる。

「直毅君、ひよこ君。立つんだ」
2人とも、指示に従い立ち上がる。

「直毅君は床から銃を拾いたまえ」
直毅がファイブセブンを床から拾い上げた。

「君の死を以って、円卓の騎士始動の第一歩としよう」
ファイブセブンの銃口が、ひよこの額を捉える。

「おい嘘だろ・・・？直毅、返事しろよ直毅！！」
直毅の耳には、誰の声も届かない。

「さあ、そいつの頭を撃ち抜け」
直毅は深呼吸し、別れの言葉を告げる。

「もし俺が」
口角を吊り上げ、

「もし俺が絶対に屈しないと云ったらどうする」
その銃口を、木戸へと向けた。

「貴様っ・・・洗脳が効いたフリを・・・!!」

「長々語ってんなよプリテンダー。欠伸が出るぜ」

木戸はベレッタを取り出すが、僅かばかり判断が遅かった。直毅の放った銃弾は木戸の右肩に命中する。

「ぐっ・・・!!」

右肩を押さえてよろめくが、まだ倒れない。

木戸に銃口を向けつつ、木戸に歩み寄る直毅。

「止まれ」

彼の歩みは止まらない。

「止まるんだ!」

木戸の声は届かない。

「聞こえないのか!!止まれ!!!!!!」

明らかにうるたえている木戸を余所に、直毅はファイブセブンの銃口を木戸の眉間に押し付ける。

「馬鹿なっ!私の声は、確かに貴様に伝わって・・・」

「お前が元センコーで助かったぜ木戸よお。唇の動き読むっつーのは、案外簡単なもんだ。はつきりと喋るような奴は特にな」

「イイ子ちゃんクラスだったらしいがなあ。案外、携帯持ってきてたりする奴とか居たんじゃねえか?この分だと」

「な……に……?」

「持ち物検査、もつと徹底しねえとなあ」

直毅は左手の中指で自分のこめかみを叩く。その両耳には、インカムが取り付けられている。

「ここの連中全員、インカムに音楽プレーヤー仕込んでんだわ。生憎不真面目の集まりでなあ。馬鹿二人は真面目にお前の”講義”聞いてたみてえだが」

「そんな物で、私の声を遮断しただと……?」
この場で木戸の声を聞き取れる者は、既に誰も居なくなっていた。

「……木戸さん。貴方の実験は、少し手落ちだったみたい。声を発した者が死ねば洗脳が解けるんじゃないかって、恐らく痛みを感じたり、精神的に不安定になれば、効果が薄れるんだと思います」
意識を取り戻した武信が木戸に語りかける。

「……貴方とはお話したい事がたくさんあります。大人しく、僕達についてきてください」

「まだだ」

俯く木戸の左手には、何かが握られている。

「抗ってみせる。こんな運命から」

左手に握った何かを、前方へと放り投げた。
握っていたのは、机の上に置かれていた砂時計。砂の代わりに、赤

い液体が入っている。

それに気を取られた3人の隙を突き、木戸が窓へと走る。

「!？ 武信！木戸を止めとけ!!」

ひよこは投げられた砂時計に向かって走り出す。

「馬鹿が。悪あがきしてんなよ」

直毅は冷静に木戸の足を打ち抜き、倒れた木戸へ武信が駆け寄る。

「・・・木戸さん、話はまた後でゆつくりと。おやすみなさい」

武信が木戸の額に触れ、呟く。その途端、木戸は意識が遠のき、ゆつくりと瞼が落ちていく。

「催眠・・・だと・・・」

「・・・そんなかんじです。今は、休んでください」

「結局捕らえられたか・・・ふふ・・・どの道私・・・・・・・・・・は・・・」

木戸は薄く笑うと、ゆつくりと瞳を閉じた。

「あつぶねー！ギリギリセーフ!!」

2人が振り返ると、ひよこがダイビングキャッチの体勢で固まっている。

「ああ耳痛つてえ。つーかただの砂時計だろそれ？そんな必死にな

る事ねえだろ」

『おい三人とも！聞こえてないのか！！』

音楽再生機能を切ると、続けざまに優輝の怒鳴り声が飛んできた。

「悪い悪い。今大サビだったんだよ」

『またテメエは作戦中に音楽聴きやがって・・・くそ・・・』

「・・・まあ今回は、そのお陰で助かったみたいだけどね」

『三人ともお疲れ様。木戸はどうなってるかな？』

「ジョニーもお疲れ様。木戸はこっちで生け獲りにしたよー」

「あと死体が一つ転がってる。そっちの回収も頼む」

『生け獲りって言い方はどうなんだろう・・・とにかく了解した。あとは、3課に引き継いでくれ』

3人は現場の引継ぎを済ませ、セダンに乗り7課へと戻る。

武信が運転するセダンは、安全運転で7課へと向かっていた。

「いやあマジで疲れた。これはあと一月休んでも怒られねえな」

「・・・ほんとに休まないでよ」

「わあってるよ。つーか木戸預けてきちまったけど、あれ大丈夫なのか？もし途中で目覚ましたらまずいんじゃないの？」

「・・・醒まさないよ。少なくとも、12時間は」

「悪いねー武信。能力使わせちゃって」

「・・・大丈夫。僕もいつまでも、引き摺ってるわけにはいかないから」

車内に沈黙が流れる。車のエンジン音が、やけに大きく聞こえた。

「まあ、とにかくお疲れさんだ。ひよこ、火くれ」

「ライターの油切れてるって言って・・・あ、ちょっと待って」
ひよこは左ポケットを漁ると皮手袋をはめ、人差し指で親指を弾く。すると、人差し指の先端に火が点いた。

「そんな手品使えんなら最初からやってくれよ」

「戦利品だよ戦利品」

「意味わかんねえっての。すまねえな」
人差し指から火を貰い、満足げに煙草をふかす直毅。

『三人とも聞こえてるかい？』
ジヨニーから通信が入る。

『総理は無事に自宅に送り届けたよ。幸いにも今回の騒動に総理が関わったことは洩れてないみたいだし、公にはちよつと寄り道して帰った、という事になるだろうね』

「・・・間違つてはいないね。それが無難かも」

『それと電波妨害してきた集団の詳細がわかったよ。”天空の泉”と呼ばれる国内PSC（民間軍事会社）の一つだ』

「国内PSCねえ。なんか面倒な事になってきてんなあ」

「まあその調査も含めて、木戸には色々聞かないとねー」

『そうだね。彼が目を覚まし次第、取り調べようか』

「・・・うん。そろそろそっちに着きそうだ。詳しくはまた後でね
ジョニー」

『了解。みんな本当にお疲れ様』

「・・・ちよつと待つて。まずいことになった」

「どうした武信!？」

「・・・ガス欠みたいだ」

case . 05 end

木戸の確保から3日が経過した、3月7日正午過ぎ。都内警察署。

「ちーっす」

直毅が取調室のドアを開ける。

中には椅子が乱雑に並べられ、1つの空席を残しその全てが埋まっている。

その中に見知った顔が3人。それ以外に14人もの人間が1部屋に缶詰にされていた。部屋の前に置いてある机にはマイクが取り付けられ、壁にはモニターが設置されている。

「なんだこりや。映画鑑賞会でもおっ始めんのか？」

「普通の取調べだと能力を使われる可能性がある。それを考慮して、聞く側の人数を増やす事で能力使用を防止しているらしい」
優輝が答える。

「肝心の木戸はどこだよ」

「署内独房で拘束中だ。直接の接触は避け、それを通して取調べするようだな」

モニターを指差す。

「・・・仮に、取調べを真面目に聞いて、途中で話をすり返られた

ら」

武信の疑問が口に出きる前に、ジョニーが手で制した。

「これだけの人数を相手に能力を行使するのは難しいはずだ。まあ、苦肉の策なんだよ。万一に備えてこの部屋に危険物の類は持ち込まないようになっているし、独房の鍵もここからじゃ開けられない。しかも彼、抵抗する気は無いみたいだしね」

「なるほどねえ。そういや、ひよことヤスはどこ行った」

「ひよこ君は調べ物があるとかで欠席だ。ヤス君はお墓参りの後、病院らしいよ」

ちなみにぐんまは通訳のため海外出張中だ。

「んだよ、俺もサボリやよかったぜ」

「いいから座れ。取調べを始める」

優輝に促され、直毅が椅子に腰掛けると、モニターの電源が入った。

「・・・木戸さん、聞こえますか？」

『武信君か。しばらくぶりだな』

映し出された独房は、一見するとワンルームマンションの一室のようだった。椅子にテーブル、ベッド、本棚すらある。しかし、窓が無い。

椅子に腰掛けた木戸は、やれやれといった表情で肩をすくめた。

『君と話が出来てうれしいよ。そこにいる連中は会話が成立しなくてね。まるで尋問だ』

「・・・これは取調べですから。会話にはならないと思います」

「随分と良い部屋貰ったじゃねえか木戸よお」

『そちらが勝手に用意したのだろう。私としても有難い処遇だが』

「・・・そろそろいいかな。取調べ、始めます」

真面目に取り合わないようにして、取調べが開始された。

「・・・まず2週間前の事件からです。大川製鉄所で銃を密造していた件について、心当たりは？」

『あれは私の指示だ』

木戸があっさりと口を割ったため、取調室でどよめきが起こる。木戸はここ3日間の取調べで、何一つとして有益な情報を吐き出さなかったためだ。

『当初の計画では、政府への抑止力として大量の武器が必要だったからな。尤も君達に押さえられてしまったから、計画を変える必要があったがね』

「・・・そこで坂上の演説を自らの能力の実験場にし、総理と直接コンタクトをとる策を練った、というわけですか」

『そうだ。あの時点で有効範囲や人数を調べ、総理を操った時に不備が無いようにしていた』

「ではその総理についてです。あなたは何故、総理を攫おうとしたのですか？」

『君には話したはずだがな。私の思想を直接、手っ取り早く社会に反映させるためだ』

「でも、それならわざわざ総理を呼び出すまでもなかったんじゃないでしょうか。あの時あなたは、総理のすぐ傍にいる人の洗脳に成功しています。その人を通して総理と接触する、という気にはならなかったんですか？」

『これも前に話したな。私の声は、意思を伝える段階が増えることに、効力が薄れる。先の実験で確認したように、ボディガードから伝えた思想など、彼は聞く耳を持たないだろうからな。仮に伝わったとしても、そこから彼が直接政治家どもに指示を下したところで、正常な効果はほとんど得られないだろうと考えた』

「・・・なるほど。それで僕達の介入を防ぐために、先に指定能力研究施設を襲わせ、指揮系統を混乱させた、と？」

『何の話だ』

再びどよめく取調室。

「・・・あなたは傭兵を雇って、総理の乗っている僕達のへりを攻撃させましたよね？」

『ああ、間違いない』

「その1時間ほど前、街外れの施設が襲撃されたのは、ご存知ですか？」

『初耳だな』

「ざけんなよテメエ。襲撃した連中は円卓の騎士を名乗ってたんだ、関係ないと言わせねえ」

席から立ち上がり、一気にまくし立てる直毅。

『知らないものは知らないのだ。このような状況で嘘をついたとして、私に得が無いだろう』

いつの間にかベッドに腰掛け、すっかりくつろいでいる木戸は溜息をついた。

「円卓の騎士は、組織立って動いているわけではないのか？」
優輝が会話に参加する。

『我々是一个の思想に基づいて組織されているが、それらを実行に移すのは組織の決定ではない。個人の意思だ』

「・・・日本を変える、という思想ですか・・・」

『そうだ。そこからどういった行動を取るのかは、各々の判断に委ねられる』

「・・・要するに、木戸さんとは別の人が研究施設を襲わせた、ということですか？」

『だろっな』

「・・・その人に、心当たりはありますか？」

『あると言えはあるが・・・』
言葉を濁す。

『この組織は、お互いの素性は明かされていない。顔は見ているが、二度三度会った程度でよく覚えていない。わかっているのは、私を含めて8人の騎士が居るということぐらいか』

「その8人の中に、襲撃を指示した人物が居るってわけか？」

『違うな。恐らく施設を襲う指示を出したのは、円卓の騎士を結成した人物だろっ』

「・・・そう思う根拠は何ですか？」

『なんとなく、だよ。・・・いや、気が変わった』
木戸は笑みを作ると、

『”そういう事になっている”からだ』
ベッドから立ち上がり、椅子へと戻る。

「どういう意味だ」

『言葉通りの意味だよ。それ以上でも以下でもない』

テーブルに置いてあったコーヒを啜りつつ、木戸は再び笑ってみせた。

「木戸、お前は何を知っている。やはり総理誘拐と施設襲撃は関係があるのか!？」

『さあ、どうだろうな』

「答える!!!」

声を荒げる優輝。

「優輝君、落ち着くんだ」

「だがジョニー・・・!こいつは明らかに何かを隠している!」

「そうだね。木戸君、君に聞く時間はたっぷりあるんだ。話す気になるまでそこから出られないよ」

『話したところで出られないだろう。それに、私にはもう時間が無い』

「何を言っている!!」

『武信君、まだ聞いているかな?』

木戸は気にする様子も無く、会話の対象を武信へと戻す。

「・・・はい」

『私からの忠告だ。円卓の騎士にはこれ以上関わるな。でないと』

「・・・僕はもう、今より不幸になることはありませんから。ご忠告ありがとうございます」

直後、独房で異変が起こった。

金属製のベッドがバラバラに分解され、それを形作っていたパーツが、宙へと浮き上がる。

「何だ、これは・・・？」

「ポルターガイストみてえだな・・・」

取調室の面々は、ただ唖然とモニターを眺めるしかなかった。

『そうだったな。なら君は今までどおり、七峰の線を追うといい』

「！？何故、あなたがその事を・・・？」

木戸の言葉に同様に隠せない武信。

『君との会話はなかなか楽しかったよ』

『私というイレギュラーによつて、この世界が変わることを祈っている』

言い終わると、かつてベッドだった無数の金属の塊が、一斉に木戸へと降りかかる。

そこで、映像は途切れた。

「木戸さん！！」

「オイどうなってやがる！」

「部屋に設置されているスピーカーごと、カメラが壊れて・・・」
機材管理者らしき男がうるたえる。

「見りゃわかんだよそんな事！近くの無線持つてる奴に繋げ！！」

「部屋前の看守に繋がります」

「看守さん、そっちはどういう状況ですか！？」
珍しくジョニーまでもが焦っている中、看守の無線が繋がる。

「わ、わかりません・・・ただ、ベッドの脚が木戸に直撃し」
それ以上言葉は続かず、バットでボールを打つような打撃音が返ってくる。

「どうした！応答しろ！おい！！」
優輝がマイクに向けて呼びかける。

一瞬の間があり、

「もしもし。これ血がかっちゃったけど、ちゃんと使えるの？」
看守の代わりに、若い女の声がした。

「誰だお前は」

「あ、使えんじゃん。警察のみなさんこんちわー。円卓の騎士でえす」

「円卓の騎士だと・・・?」

『だからそうだって言ってるじゃん。あんたちよつと耳遠いんじゃないの?』

女は気だるそうに答える。

『とりあえずウチは裏切り者掃除しにきたただだからもう帰るけど。掃除とかいって部屋メツチャ血まみれじゃん。マジウケる』
スピーカーからケラケラと笑い声が漏れる。

『そういうわけでお風呂入りたいし帰る。あーマジ鉄くさいココうつざいなあ』

再び通信が切れ、その直後、署内に地響きが起こる。

「Bitch、マジでどうなってんだ!？」

「ジョニー、独房は!？」

優輝の問いに、携帯電話を耳に当てたままジョニーが返答する。

「2階の奥だよ。でも、どうやってここに入り込んだんだ・・・?」

「・・・わかった。ひよことヤスには?」

「それが、両方とも連絡がつかないんだ・・・」

「俺達だけに行くしかないな。後のことは任せたぞ」

優輝達は取調室の面々に状況を引き継ぐと、独房へと向かった。

「馬鹿野郎！何故不審人物が署内に侵入している！！」

階段を駆け下り、2階の廊下に出た3人が真つ先に耳にしたのは、旧知の仲である夜見川の怒鳴り声だった。

「いえ、それが・・・」

「誰も不審人物なんか見てねえだ！？そんな馬鹿な話無いだろうが！！」

20代半ばの男が40歳になる手前の男を叱責している様は、非常時でなければひどく滑稽に見えただろう。

「夜見川課長！」

廊下を全力疾走してくる3人組を見るや否や、夜見川は指示を飛ばす。

「犯人は壁ブチ破って外に出たらしい。こっちは入り口のドア潰されてて時間がかかる。外に回れ」

「了解した」

直毅と優輝は踵を返し、開いている2階の窓から飛び降りた。武信は一礼すると、律儀に階段に向かう。

「不審人物が居なかったかどうかは後で調べる。前田警視は入り口をどうにかしろ。俺も犯人を追う」

指示を出し終わり、夜見川は階段の奥へと消えていった。

「糞、ノンキャリアの若輩者が偉そうに・・・！」

夜見川からお叱りを受けていた男、前田は入り口のドア撤去作業を部下に任せ、一人2階の窓から外を眺めている。

「聞こえていますよ、前田警視正」

「誰だ」

振り返ると、黒い丈長のコートを羽織った男が、壁に寄りかかっていた。

「彼は確かに若いですが、実力は確かです。現にキャリア組の貴方を追い越して、あの若さでは異例の警視長という立場にいるのですから」

男はズレた眼鏡をなおすと、前田の正面へと向き直る。

「ジョニー外交官・・・！？失礼致しました！！」

「やめてください。どうも堅苦しいのは苦手です」

ジョニーは人差し指で頬をかいた。

「ただ、やっぱり若さ故に冷静さを欠いてしまうようなこともあります。階級ではなく年長者として、彼をサポートしてあげてください」

「はぁ・・・ところで、なぜ外交官がここに？」

「今回の総理誘拐未遂の事情聴取ですよ。参考人として」

『ジョニー、犯人と思われる人物を発見。立体駐車場に追い込んだ』
優輝からの通信が入る。

「了解、そのまま確保してくれ。十二分に気をつけてね」

『わかっている。切るぞ』

立て続けに携帯電話が鳴る。

『もしもし、ジョニーどしたん？不在着信きてたけど』

「木戸が襲われた。優輝君たちは犯人を追ってるみたい」

『俺もそっち向かえばいいの？』

「いや、夜見川君と直毅君、武信君も一緒だし、ひよこ君はこっちに戻ってきて貰えるかい？」

「おっけー。5分で戻るわ」

立体駐車場地下。

「動くな。両手を頭の後ろで組め」

グロックを構えた優輝は、壁の端まで追い込んだ犯人にそう告げる。

「よくウチが犯人だってわかったねえ」

「目立つからな、その格好は」

犯人の風貌は、ベージュの冬物のコートに灰色のプリーツスカート、頭にバイクのヘルメットという、目立たないほうがおかしい出で立ちだった。

「コートを脱いで床に置け」

「武器なんか持ってないよ。持つ必要ないし」

「いいから脱げ」

「脱がせてどうすんの？ウチ襲われちゃうの？」
直後、駐車場に銃声が反響する。優輝のものだ。

「次は無い。コートを床に置くんだ」

「こわあい」

頭の横を銃弾が掠めたにも関わらず、女は動揺一つ見せずにコートを脱ぎ、床に置いた。

「ヘルメットを取り、コートの上に置け」

「はいはい。襲われたくないもん」

素直に従い、女はヘルメットを取った。肩甲骨あたりで切り揃えられた茶色い髪が揺れる。

「そのままこちらを向き、床に伏せる。両手は組んだままだ」
返事は無く、代わりに女がゆっくりと振り返った。

「何っ・・・？」

「まだ、子供じゃないか・・・!!」

まだあどけなさが残る整った顔立ちの少女に、優輝はある人物を重ねてしまった。

(・・・けて・・・)

「・・・やめろ」

銃口が、震える。手にうまく力が伝わらない。

(助けて・・・)

「やめろ」

「どうしたのお？なんか興奮してるみたいだけど、ウチに欲情しちゃった？」

少女の声は、優輝には届いていなかった。

(お兄ちゃん、助けて!!！)

「やめろおおおお!!!!」

「優輝！ソイツを撃て!!」

振り返ると、1階への入り口に人影が見えた。

「ヤス、か・・・？」

「ばあか。死んじやいなよ、あんた」

少女は歪んだ笑みを浮かべると、コートとヘルメットを拾い、一直線に優輝の元へと駆け出す。

「早く撃て優輝！！」

「できない・・・こんな子供に・・・」

優輝は銃を構えてはいるが、照準が定まっていな。それどころか、トリガーに指が掛かっていなかった。

「さよなら。痛いと思うけど、あんたはきつと天国いけるよ」

ヘルメットを被りなおしてそんなことを呟き、優輝とすれ違った少女は入り口へと駆けていく。

「バカが。こんなもん、さつさと撃ちや終わりなんだよ」

ヤスはベレッタの照準を走ってくる少女に合わせる。

直後、少女の背後で爆発が起こった。停めてあった車の何台かが爆発したようだ。

「優輝！！このクソガキがあ！！！！」

ヤスが少女に発砲するが、弾は全て明後日の方向へと消えていった。

「あんたも死にたいの？いいよ、ここなら楽に殺せるし」

手にしたコートの背中側からUZIを取り出した少女は、眼前の獲

物へと喰らいつく。

しかし少女の撃ちだした弾丸もまた、ヤスを捉えることはなかった。

「避けられた！？なんで・・・」

「ガキが大の大人と張り合えるわけ無えだろ！死んでな！！」

すれ違いざまにゼロ距離で発砲するが、それすらも少女には当たらなかった。

「なんでさつきから弾が当たらねえんだよ糞が！！」

「へえ、あんたも能力者なんだ。めんどいし今は逃げるね」

ヤスは咄嗟にナイフを抜いた。

「待て！テメエはここで」

わき腹に、鋭い痛みが走る。力が抜け、ヤスは地面に崩れ落ちた。

「オイ、マジかよ・・・？」

自分が撃たれたと気づくのに、数秒かった。次いで両足にも痛みが走り、立体駐車場入り口は血で染まっていく。

「本当に、あいつの言った・・・通りに・・・」

意識を失う直前、武信の声が聞こえた気がした。

署内2階廊下。

『ジョニー！ヤスが撃たれた！！応急処置はしておいたけど優輝が居なくて爆発が』

「落ち着くんだ武信君。犯人はどうなってるんだい？」

『そんな事よりヤスが大変なんだ！！』

「武信君。今はどちらを優先すべきか、わかるね？」

『い・・・今、直毅とみかさんが追ってるよ』

「ヤスが負傷なんて今までで初めてじゃない？敵さんもなかなかやるねー」

「軽口叩いてる場合じゃないよ。ひよこ君は木戸を頼むね」

「了解。入り口は・・・まーだやってんのか。瓦礫が邪魔してるみたいだし裏から回るわ」

ジョニーがインカムを手渡すと、ひよこは階段を降りていく。

『ジョニー、僕はどうすればいい』

「救急車は手配しておいたから、ヤス君と優輝君をお願いするよ」

『・・・わかった。取り乱してごめん』

「構わないよ。武信君も無事でね」

署内独房。

「よつと」

壁の崩れた箇所を手をかけ、ひよこは独房前の廊下へと飛び乗った。血の臭いがひどい。

「うわ、これはエグい」

見ると、看守らしき男が2人、うつ伏せで倒れていた。後頭部から見えてはいけないうものが見えていたが、直接見ないようにして独房へと入る。

独房の中は荒れ果てており、鉄パイプが本棚やテーブルに突き刺さり、それらの原型をわからなくしていた。

「木戸さん生きてるー？どう見ても死んでるようにしか見えないけど」

木戸は意識を失っていたが、生命活動は停止してはいなかった。どうやら生きているようだ。

「ジョニー、木戸生きてるわ。どうする？」

『なんとか運び出せないかな？入り口はまだかかりそうだし』

「運ぶにしても、怪我人を抱えて二階からダイブってのはちょっとね・・・」

『救急車を裏に回そう。すぐ着くと思うから、君は止血を』

「しておいたよ。幸いシーツとか毛布もあるしね」

『わかった。その間、犯人の手がかりになりそうな物を探してくれ』

「了解ー」

「しかし、こんだけ荒れてると何処から手つけていいか・・・」
改めて部屋を見渡すが、空き巣がそこら中に鉄パイプを突き刺しながら部屋を物色したような有様である。

「本棚がある独房とか聞いたことねえなー」

「コーヒーマーカーからティーカップまであるし、完全に税金の無駄遣いじゃん」

「鉄パイプに血痕か。これでぶん殴られた系かな？」
ひよこは鉄パイプを拾い上げた。両端は引き千切られたような痕があり、先端には血が付着している。どうやらベッドの骨組みのようだ。

「こんな直撃で生きてるとか、木戸さんどんだけ生命力あるんだ・・・あれ？」

ひよこは鉄パイプをしげしげと眺め、

「木戸さん、あんた運が良かったね」

気がつくと、階下に救急車が到着している。ひよこは木戸を背負うと、救急隊員に引き渡すために歩き出した。

3月4日。

真っ白い壁に天井、床。4畳ほどの空間にあるのはベッドとトイレが1つずつ。部屋の主は1人だけ。

24時間のうちのほとんどもをこの部屋で過ごすというのはどれだけ暇なんだろうか。想像したくもない。

こいつも好き好んでこんな部屋に住んでいるわけではなく、俺だっ
て好きでここにいるわけじゃない。仕事をしているだけだ。

部屋の主は重罪人で、俺は壁一枚挟んだところで、椅子に腰掛け雑誌を読んでいる。

決してサボっているわけではなく、独房の看守というのは暇なのだ。
交代まではこうやって時間を潰していないと精神的に持たない。

とは言っても、部屋の主がよく話しかけてくるお陰で、最近は暇では無くなってしまった。

「看守、今何時だ」

独房に収容されている罪人、1255番の様子が変だった。日付と時間をしつこく聞いてくる。

以前は特に問題も無く、現に今も行動に目立った問題は無いのだが、
ここ1週間程前からえらく時間を気にするようになった。

俺は今日何回目になるかわからない動作で腕時計を確認する。午後
17時57分。そろそろ晩飯の時間だ。

「そうか。あと数分で私は自由の身だ。貴方にも、世話になった」
妄言も大概にしろ。お前がここから出られるのは、恐らく死んでからだろうよ。

「看守、今何時だ」

いい加減しつこくなってきたので、無視を決め込む事にした。飯食えばこいつも大人しくなるだろう。

18時を回り、食事の時間を知らせるブザーが鳴り響いた。

牢獄の鍵を開けると同時、看守長が書類の束を持って入ってきた。またこいつに何か書かせるのだろうか。

書類全てにサインを終えた1255番を食堂へと連れて行こうとする、

「おう待て待て。1255番は本日付で仮釈放だよ」

一瞬看守長の言っている事が理解できなかった。頭にハテナマークが浮かぶ。

「容疑が晴れたらしい。冤罪だったそうだ。私も詳しくは聞いていないが」

第一こんな時間に釈放なんておかしいだろう。もう夜だぞ。

「今まで、お世話になりました。二度とここに帰ることはないですよ」

「当然だろう。さて、行くぞ」

頭上のハテナマークが3つを越えたあたりで、看守長と1255番が並んで独房を後にする。

俺はそれを黙って見届けたあと、食堂へと向かった。

「ヤス、もういいのか」

3月8日。7課会議室。

c
a
s
e
・
0
6
- 錯綜 -

「良か無えよ。ただ横になつてンのも気持ち悪いしな」
松葉杖をつきながら入室するヤス。

「両足と腹ブチ抜かれた翌日によく動けんあ」
直毅は煙草をふかしながら銃の手入れをしていた。

「怪我の治りは早えからな。お前らだつてそうだろ」

「まあねー。それにしてもヤスが傷負つたつてのが疑問なんだけど
もさ」

パソコンと向かい合い、何やら忙しくキーボードを叩いているひよこは、目を合わせずに応えた。

「俺もわかんねえよそんな事。だからわざわざここに来たンだろう
が」

「みんな揃つてるね。ヤス君、怪我は大丈夫かい？」
ジヨニーは開口一番にヤスの怪我を心配した。

「これが大丈夫に見えンなら病院行けよ。頭のな」

「大丈夫そうだね。それじゃあ昨日の事件について色々報告するよ」
ヤスは大きく溜息をつき、自分の机の上に腰掛ける。

「まず木戸についてだけど、一命は取り留めた。ただ意識が戻るまでは、手を出せないね」

「俺が見つけた時点で呼びかけに反応してなかったからねー。下手

するとそのままかも」

「あいつの証言はしばらく期待できそうに無い、か。何か知っている口ぶりだったが」

「でもあいつは夢中なんだろう？今は起きるのを待つしかねえな」

「・・・彼は僕が美月、いや、七峰に関して調べている事を知ってた。それに施設襲撃についても何か知ってるみたいでした。起こそうと思えば無理にでも起こせるんじゃないですか」

「武信、気持ちはわかるが」

「彼の証言は重要だと考えます。事件の真相に近いのは恐らく彼なんです。ここは薬でもなんでも使って木戸に直接話を」

「武信！！」

室内に怒声が響き渡る。

「怒鳴ンねえで貰えるか。傷に沁みる」

「・・・何だよ、優輝」

「仕事に私情を持ち込むな。木戸は意識不明で、今は他を調べるしかない。そつだな？」

「・・・でも」

「他にも色々気になる事あるんだし、とりあえず木戸のことは後回しにしよう」

ひよこが話を切り替えようとするが、空気を読めない男が一人。

「まあ気持ちはわかるぜ武信ちゃんよお。もしかしたら死んじまつた美月の事についてわかるかも知れねえんだもんなあ・・・あれ？」
言っではいけないことを口にしてしまった直毅に対し、全員が目を逸らす。武信を除いて。

「・・・生きてるよ、美月は」

2年前の夏、国営の研究所で事故があった。

研究所の一部装置が故障し、研究者と作業員33名が装置の爆発に巻き込まれた。

爆発の規模が大きく、研究所は全壊。事故に遭った33名のうち死亡が確認されたのは29名、行方不明者が3名。この3名は爆心地付近にいたらしく、人の形すら残さずに文字通り”消滅”した。

生存者はたったの1名。その生存者が武信であり、行方不明者のうちの1人に、武信の大切な人がいた。

「あの、話進めてもいいかな？」

ジョニーが引きつった笑いを浮かべている。助けを求めるサインだ。

「木戸を襲った犯人についてだが」

冷や汗を流す直毅と、それを睨む武信を放置し、優輝が事件報告を進めた。

「誰も姿を見ていないというのは本当か？」

「ああ。どういう能力かはわからないけど、署の入り口から木戸の

独房までの道のりに居た全ての人間が、彼女の姿を見ていないと証言しているね。ただ、監視カメラは誤魔化せなかったみたいけど」
ジョニーがリモコンを操作すると、スクリーンに監視カメラの映像が映し出された。

「思いつきり映ってるねー。あつたかくなってきたのに随分厚手なコート着てる」

「フルフェイスのおかげで顔が見えねえな。顔が確認できる映像は無えンか？」

「残念ながら。だからこの中で唯一顔を見た優輝君に頼るしかないんだけど・・・」
言葉を濁す。

「見たのは見たんだが、よく思い出せない」

「オイオイそりや無えだろ。追い詰めてメット取らせたのは誰だよオイ」

最初に抗議の声をあげたのは直毅だった。武信の威圧からは解放されたようで、どこことなく生き生きしている様に見える。

「すまない。犯人の攻撃で軽く頭打ったらしくてな、ぼんやりとしか覚えていないんだ」

「・・・特定に繋がるような特徴とかは無かったの？」

「そうだな・・・身長が低めで、茶髪だったくらいしか」

「・・・顔は？どれくらいの歳だったか、とか」

「確か俺達と同じくらいか、それよりも少し上くらいだったはずだ」

「身長低い茶髪女なんかどこにでもいるじゃねえかよ。他にはなんか無えのか？」

「・・・すまない」

既に銃の手入れに戻っている直毅の問いに、答えを持ち合わせていなかった優輝は顔を伏せた。

「ただ、犯人の能力については大体わかった。恐らくは指定能力者、それも大規模な物理干渉型だろう」

指定能力者は大きく分けて2つの括りがある。

1つは直毅のような他人に幻覚を見せたり、武信の催眠のような精神干渉型。こちらは人に作用する。

もう1つはこの木戸襲撃事件の犯人のような物理干渉型である。

物理干渉型は前者に比べて絶対数が少なく、何故触れずに物を動かせるか等のメカニズムが解明されていない。

「それなら木戸のベッドが浮いたのも説明つくってわけか」

「俺の時は駐車場の車が飛んできたからな。ほぼ確定だろう」

「そうだ、聞きてえことがあったんだ。ジョニー」

ヤスは組んでいた腕をほどこ、ポケットから煙草を取り出した。

「俺を撃った野朗は誰なんだ？」

「それについても、かなりおかしい事になってるんだけど」
ジョニーが眼鏡をなおし、説明を始める。

「まず優輝君の持っていたのはグロックだったよね？」

「ああ。それがどうした？」

「いや、確認だよ。あの時優輝君は発砲していないもんね。そして駐車場には優輝君と犯人、それに遅れて到着したヤス君しか居なかった」

「あの場で発砲したのは犯人とヤス君の二人だけだ。ヤス君はベレッタ、犯人はUZIだったよね？」

「もったいつけんなよジョニーよ。何が言いてえんだ？」
手入れを終えた直毅は3本目の煙草に火をつけた。いよいよ会議室が煙たくなってきている。

「まあまあ。犯人は適当に撃ったけど、ヤス君はその時点では弾に当たらなかった」

「全部避けたからな。ンで俺が至近距離で三発ブチ込んだが、どういふわけか一発も当たってない」

「そしてその直後に、ヤス君は銃撃を受け倒れた。これで間違いないよね？」

「その確認と俺が撃たれた事になんの関係があんだよ」

「大アリなんだよ。ヤス君、結論を言うよ」

ジョニーは少し間を空け、切り出した。

「君の体内から発見された銃弾。あれは、君の銃のものだ」

「・・・ジョニー、いくらなんでもそれは無いんじゃないかな」
流石の武信も呆れているが、ジョニーは続けた。

「状況証拠からみても、それしか考えられないんだ。ヤス君の銃の
発射痕と、体内から摘出された銃弾の痕が一致した」
全員、言葉も出ない。その理屈だと、ヤスが自分で自分を撃ち抜い
た事になってしまう。

「この事について、ヤス君はどう思う？」

「なるほどねえ」

一呼吸置き、

「どうって言われても、つまりそういうことなンだろ」
一番初めに納得したのは意外にもヤスのようだった。

「俺が撃った弾が何か知らねえけど俺のわき腹と両足に当たった。
簡単じゃねえか」

「ヤス、お前自分で何を言っているかわかってるのか？」
優輝が本気で心配している。

「おう。とにかく考えてても仕方無えし、俺は帰るわ」
ヤスはそそくさと帰り支度を始め、

「優輝、病院まで送ってけ」

「あ、ああ・・・」

言葉を残し、優輝と共に会議室を後にした。

「あのー、何か思い出したりしたら報告してね・・・」

ジョニーが言い終わると、会議室にしばらくの沈黙が訪れる。

「ジョニー先生、質問です」

ひよこがゆっくりと手を挙げる。

「はい、ひよこ君」

「話についていけないです」

「大丈夫、僕もだ」

会議室を出てから今に至るまで、俺はずっと確かめたいことがあった。当然だがさっきの会議室での茶番のことである。

自分の撃った弾が時間差で自分に命中するなど、他者の介入無くして起こる現象ではない。それはヤスもわかつている筈だった。

それを踏まえたうえで、あの場でジョニーを深く追求しなかったということは、何か心当たりがあるはずだ。

いい加減車内の沈黙にも耐えられなくなり、俺から会話を始める。

「なあ、ヤス」

「なんだよ」

こうやってヤスと1対1で会話するのは、中学以来だった。色々と思い出話に花を咲かせて気分を紛らわしたかったが、空気がそうさせてくれなかった。

「お前は、さっきの説明で本当に充分だったのか？」

ヤスの性格上まともには答えないだろうが、会話からヒントを得られるはずだ。

「全くもって完璧に理解したけどなあ。簡潔な説明で助かった」
これじゃ足りない。もっと突っ込んだ聞き方をしないと駄目らしいな。

「つまり、ヤスは自分で自分を撃ったって事か？」

「そのつもりは無えンけどな。結果的にそうなったってことだな」

「そうか・・・」

充分だった。恐らくヤスは、自分の身に起こった現象の原因を理解している。

それを俺達に話さないという事は、確証を得ていないか、あるいは隠さなければならぬ理由があるか・・・。

「ところで優輝よお」
思考を中断される。

「お前、ホントに犯人の顔覚えてねえンかよ」
やはり、聞かれると思っていた。俺はあらかじめ用意していた答えを口にする。

「ぼんやりとしか思い出せないな。思い出せたら捜査も進展しそうなんだが」

嘘だ。俺は犯人の顔をはつきりと覚えている。明らかに俺達よりも年下、高校生くらいの顔つきだった。

本来このような行為は許されるものではないが、何分顔を見たのは俺だけだ。今のところは追求されなくて欲しい。

問題は顔では無い。犯人の着ていた服、それが学生服であり、その学生服に見覚えが無ければ、俺は正直に話していただろう。

「派手な爆発だったかな。無理も無えわ」

「・・・すまないな」

俺達の付き合いは短くない。俺がヤスの嘘を見抜いたように、ヤスもきつと俺の嘘を見透かしている。

それはきつと、他の7課の面々も一緒だ。わかっていて尚、深く追求しようとする。

「まあ、お互い様って事だ」

「ああ。何かわかったら話すよ」

それきり、会話は無かった。

「着いたぞ」

「おう。助かったわ」

下車したヤスは病院へとゆっくり歩き出すが、その4倍くらいのスピードで、病院の中から看護婦がすっ飛んできた。

「ちょっと井上さん！駄目じゃないですか勝手に病院抜け出しちゃ！」

「いやーすいませんねえ。運動したくなっちゃって」

「絶対安静なんですよ！？無理に動いたら傷に障りますから、早く病室へ」

ヤスは引き摺られるようにして病院へと連行されていく。

あいつが苗字で呼ばれているのを久々に聞いた気がするな。そういえば今は看護婦じゃなくて看護師って言っただったか。

俺はそんな取りとめも無いことを考えつつ、2つの影が消えていくのを見送った。

3月4日。

飯を中断し、仕事が無くなった俺は刑務所内を散歩していた。軽く社内ニート状態だ。

1255番は何故こんな時間に釈放されたのか。何故あいつは釈放されることを予言したのか。それが無性に気になった。

飯を食っている最中に色々と考えたが、結局答えは出ない。看守長に直接聞いてみるしかないか。

看守長の居場所を同僚に聞くと、どうやらついさっき散歩に出向いたらしい。暇なのは誰でも一緒なのだろうか。

正面の門から外に出て、あたりを見回す。看守長は・・・いた。横断歩道の向こう側だ。何故か書類の束を抱えたまま歩いている。今を逃せば2度と真実を知ることが出来なくなる気がする。それと同時に、真実を知ってしまうと、何かとてもまずい事になる予感もあった。直感ってやつだ。

俺は歩を早め、気がつくのと走り出していた。理性より好奇心が勝った。

看守長との距離がみるみるうちに縮まっていく。20メートル、15メートル、10メートル。不意に聞こえるブレーキの音。

突然、目の前から看守長が消えた。追い抜かしたのだろうか。

下を見ると、空を見上げた看守長と目が合った。その眼は驚愕に見開かれている。

そもそも何故下を向いたら目が合うのか、地面に落ちてはじめて気がついた。どうやら轢かれたらしい。

看守長が駆け寄ってきて必死に俺の名前を呼んでいるが、そんな事は知ったことではない。手元の書類を凝視する。

釈放書類の記名欄。囚人番号1255番。囚人名：井上 仁。どうして釈放されたのか。聞こうにも声が出ない。

叫ぶ看守長と、駆け寄ってくる車の運転手。書類。自分の血。それが俺の見た最後の景色だった。

case . 06 end

よく晴れた昼、木戸の取調べをブツチして集団墓地まで歩いて来た。最初は墓の位置すらわからなかったもんだが、ここ最近通い詰めているおかげで迷うことも無くなった。目を瞑ってでもたどり着ける気がする。

比較的新しめの墓石の前で荷物を下ろす。そこは俺も入る予定の墓であり、端的に言つと俺の先祖達が眠る墓だ。

その行為を死者が見ているとも思えないが、今はもう、こつする事しか出来ない。

俺は墓に向かつて両手を合わせ、花を添える。せめてもの弔いのために。

あまりにも唐突に、理不尽に奪われた2つの命に向けて、祈った。

そして命を摘み取った元凶の再来も、また唐突だった。

「保明、久しぶりだな」

振り向くより早く手が動いた。俺の右手に握られたベレッタは、今まさに声を発した者の命を摘み取るうとしている。

「墓前だ。そついう真似はよせ」

銃を向けられて尚、こいつは動じない。俺が撃たない事を理解しているかのように。

「撃たねえよ。俺はアンタとは違うんだ」

銃は向けたまま、ゆつくりと振り向く。

二度と顔を合わせまいと思っていた男が、そこに居た。

「なんでデメエがここに居る。わざわざ捕まりに来たか」

「顔を見に來ただけだ。保明も釈放の情報は掴んでいるだろう?」

「氣安く人の名前呼んでンじゃねえよ犯罪者が」

井上仁。無理心中を図り、自らの妻と長男を殺害。その後次男も殺害しようとするも、何らかの理由により逃走。逃走中に通行人を1人殺害。

事件発生から14時間後に警察に出頭し逮捕。無期懲役が言い渡された。ところが3日前、冤罪と判明し釈放。

「おかしいよなあ今になって釈放なんてよお。世の中おかしい事だらけだと思わねえか？なあ」

能力研究施設を襲撃した奴等の要求が、囚人の開放。そのリストに入っていた1人がコイツだった。

その要求が出た直後に釈放。どう考えてもタイミングが良すぎる。出来すぎている。

「確かに、この世界はおかしな事だらけだ。どんどんおかしくなっていく世界を、檻の中から眺めていた」

「妙な言い回しすんな。イライラするんだよ」

こいつとはもう会話しない方がいい。でないと引き金を引いてしまいそうだ。

「俺の前から消える。二度とツラ見せんじゃねえ」

「まだ時間はある。父さんはせめて墓参りだけでもと」

見ると、左手にコンビニ袋を提げている。供え物だろうか。

「どの口が墓参りとか言ってるんだ、アンタにその資格は無えよ。それに」

「アンタはもう、俺の父親じゃねえ」

「・・・そうか」

仁は少しだけ悲しそうな目をし、背中を向ける。

「一つだけ、助言しておく」

「病院には行かず、街へ戻れ。でないと優輝君が死ぬ」

瞬時に頭に血が上る。妄言も大概にしろよこいつ……！

「いい加減にしろ！！テメエはいつもそうやってワケわかンねえ事を……」

待て。どうしてこいつは俺がこの後病院に行く事を知っている？

「犯人は現時点では絶対に捕まえられない。下手な事をすれば、保明が怪我をする」

断片的に告げられる、警告に近い助言。

「有り得ねえよ。アイツ等は今取調べ中だ」

それにこいつは、能力者じゃない。

俺ですら見えない未来の事象を、こいつは予言した。有り得ない。

「なら確認するといい。尤も保明は今日、携帯を洗面所に置き忘れていたから無理だろうが」

得体の知れない冷気のような感覚が、全身を這い回る。

その感覚は恐怖、あるいは疑念となり、意外な程に俺を冷静にさせた。

知られている。俺しか知りえない事をこいつは知っている。

「……何が狙いだテメエ」

「助言だ。とにかく街に行け。走り回っていれば、自ずと先は見えてくる」

それきり仁は振り返ることなく、来た道を引き返していった。

「何なンだよ糞ツタレが」

銃を仕舞い、仁の言っていた事を整理する。

俺が街に行かないと優輝が死ぬ。下手すると俺が怪我する。

優輝がへまして死ぬのは有り得る話だが、俺が怪我する事は100%確実に有り得ないと言い切っている。

なんせ未来が見えるからな。正確には未来を予測しているだけだが。広範囲に隙間無く爆撃でもされない限り、全て防いでみせる。

「まあ、どの道昼飯時だしな」

あいつの言う事を鵜呑みにするわけじゃないが、病院に行くのにも街は通らなければならぬ。

誘導されているようでなんとなくシャクに障るが、俺は踵を返し、街へと走った。

そのあとはまあ、知つての通りだ。

3月9日。第一病院304号室。

「釈然としねえ」

ベッドの上でノートパソコンをカタカタ言わせながら、ここ数日の

出来事を整理していた。

井上仁が突然釈放され、木戸が襲撃される事を予測し、俺に助言。結果、俺は自分で自分を撃って負傷。これらから導き出される答えは1つ。

井上仁は、木戸襲撃に加担している。

これなら事前に襲撃を知ることが出来る。木戸を始末、ついでに俺等を殺すことで円卓の騎士について詳しく知っている奴等を一括削除、ゴミ箱へポイだ。

その場合釈放の手引きは騎士連中が手配したことになる。あいつ等の素性がわからない以上、有り得ないとも言切れない。

他の可能性も考えられなくは無いが、どれも納得のいく理由がつかない。現状で答えを出すならこれがベターだろう。

ただわからない事が1つある。俺の負傷の原因だ。

俺が撃った弾が時間差で俺に当たった。アホくせえ。んなわけ無えだろ。

犯人に向けて撃った銃弾が全部俺に返ってきたのは事実だが、数秒間を空けて飛んでくる意味がわからない。

恐らくは何らかの能力の介入だが、あの場には俺と優輝、それと犯人しか居なかったことは後の調べでわかっている。

犯人の能力と考えるのが妥当だろうが、実はどう考えても説明のつかない現象が、あの場で起こっていた。

消えたんだ。俺の撃った弾が。どこにも当たらずに、完全に消滅した。

そして気づいたら背中から飛んできた。犯人にこんな芸当が出来るんだとしたら、最初からUZIで蜂の巣にされてただろう。

突拍子も無いことを考える。現場のはるか遠方から俺の撃った弾だけを消し、運動量を変えずに運動の向きを変え、狙った位置に出現

させる。そんな事出来る奴なんか居るのか・・・？

不意に、携帯が震動する。心臓と一緒に体が跳ねた。俺の未来予測は、人間の動きにのみ作用するらしい。

犬の動きはどうやっても予測できなかったし、明日の天気もわからない。何より携帯の着信ごときに驚くくらいだ。

普段起きることが予測できている分、こういうイレギュラーな事態にはかなりビビる。

見ると、ジョニーからの着信だった。

『ヤス君、調子はどうだい？』

「大分落ち着いた。能力者ってのは回復能力もフルパワーなんだな。今週中にはもう退院らしい」

『君はここ入ってから大きな怪我してなかったからね。自分の回復力に驚いたろう』

「そりや三日かそこらで傷塞がったら誰だって驚くだろ」

『それもそうか。木戸については、何かわかったかい？』

「そういえばあいつの経歴漁ってたんだったな。報告しとくか。」

「ああ、4課の情報網もザルだな。こんなンも見抜けねえとか給料減らせよ」

「どうやら木戸は18歳から一貫して日財勤務らしい。教師ってのはウソだ」

『だろーとは思ってたけど、よく裏が取れたね』

「生憎暇だからな。ここ十年の教員リストと、木戸の周辺情報を片っ端から調べた」

『君の情報収集能力には舌を巻くよ、4課に入ったらどうだい?』

「その4課から俺を引っ張ってきたのは誰だったか思い出せよ」

『そうだったね』

糞野郎のせいでお先真っ暗だった俺を拾い、4課に入れたのは他ならぬジョニーだった。

『この事件は何か臭う。長引きそうだし、今のうちにゆっくり休んでね』

「とか言いつつパソコン渡すあたり抜け目無えよなジョニーは」

『給料分は働いて貰わないとね。ただ、無理はしなくていいんだよ?』

「わかってる。今は体の方は休ませて貰うわ。そろそろ切るぞ」

『お大事にね』

再び思索にふける。

釈放の根回し、木戸襲撃の意図、井上仁の予言めいた助言、一度消えた銃弾。

全てを関連付けて考えるのも間違っているかもしれないが、これら

は一貫性のある事柄な気がしてならない。
療養中の宿題は、思ったより難易度が高い。

洗面所に向かい、顔を洗う。寝起きは最悪だった。頭が痛む。ひどい吐き気に見舞われたがなんとか堪え、病室のベッドへと戻る。今見た夢の内容はもう覚えちゃいないが、症状からして昔の思い出でも引つ張り出してしまったんだろう。

過去を振り返ったところで得られる物は少ない。問題は、今どうするかだ。

木戸の身辺調査は経歴を偽っている以外、目立ったものは見つからなかった。ジョニーの報告によると木戸襲撃犯の足取りも掴めていないらしい。

「まあ、なるようになるか」

そろそろジョニーの定時連絡の時間だ。報告することといったら、俺の退院が明日に迫っている事くらい。要するに何もわかつちやいない。

退院したらまず煙草買わないとなあとか、ラーメン食いたいなあとか呑気に考えつつ、着信を知らせる携帯電話を手に取った。

「もしもし、ジョニーか」

3月15日。 7 課会議室。

今日の会議室は普段以上に空気が張り詰めており、それに比例して煙が濃い。

長机を2つ向かい合わせにしてくっつけ、一同は麻雀に興じていた。

「・・・はい」

「よいしょー」

「よしきたっ！リーチ！！」

「通らん。ロン、白のみ」

「テメエ！俺の四暗単騎をそんなゴミ手で・・・！？」

「切り方が判り易いんだよ直毅は。自分の手しか見えてない」

「そもそも単騎ならリー棒投げる必要無いけどねー」

「そこはお前アレだ、ゲンカツギっつーの？」

「・・・目立ちたいだけでしょ」

「おう武信ム力つくなお前。正解だよf x x k野朗」

「もっと言うと、それを切らなくてもツモでアガれたぞ。ツモ三暗トイトイだ」

「あ、あどいつもこいつもうるせえ！俺はリーチと役満しかわからねえんだよ！！」

灰皿は既にフィルターで溢れかえり、灰皿代わりの空き缶も既に人数分消費している。いよいよもって部屋の視界と空気、直毅の言葉遣いが悪くなっていた。

「あの、ちょっといいかな？」

「ん、どうしたジヨニー。次で替わるか？」

「いや、もう時間がね・・・」

掛け時計を指差すジヨニー。煙でよく見えないが、短針が重力に従って真下を向いているあたり、恐らく18時を回っている。

「おいおいもうこんな時間かよ。俺等何時間遊んでんだ？」

「聞き込みやら調査やらが終わってからだから、5時間くらいかな」

「休日とはいえ遊びが過ぎたな。帰るぞ」

優輝は雀牌を手早く片付けると、我先に帰り支度を始めた。

「みんな車だっけ？俺今日は歩きだし先帰ってるわー」

「あいつ片付けくらいしてけよな・・・」

ひよこは直毅の尤もらしい意見を聞き流し、そそくさと会議室を出て行く。

「しかし煙がひどいな。ジヨニー、換気扇はまだ直らないのか？」

「一応回してはいるんだけどね。調子悪いみたいだ」

天井に設置された換気扇は稼動こそしているが、滞留した紫煙を運ぶことを放棄している。故障しているのはこの部屋だけではないように、ビル内でも問題視されつつあった。

「・・・動いてるって事は多分フィルターだよな。今度調べてみる？」

「だなあ。まあ片付けも終わったし、今日のところは帰ろうや」
各々帰り支度を済ませ、エレベーターで駐車場へと向かう。

「帰りにどこか寄っていくかい？君達昼ご飯抜いてるみたいだし」
ジョニーの提案に皆は目を輝かせると、

「いい考えだな。ラーメンでも食いに行くか」

「・・・最近出来たところ行ってみる？隊舎とは逆方向だけど」

「つつても俺70円しか無えよ。ジョニー頼むわ」

「はいはい。給料から天引きしておくね」

「それくらい出してくれてもいいだろ・・・？」

「駄目だよ。お金に関してはしっかり管理しないとね」

他愛ない会話をしつつ、ジョニーはラーメン屋へと車を走らせた。

しばらくぶりのラーメンは、スープの一滴まで腹に染み渡った。

最近ラーメン屋が乱立し、その度に足を運んでいたのだが、あそこまで美味しい塩ラーメンを食べた記憶が無い。

「いやーたらふく食った」

直毅も満足そうに腹を撫でている。3杯食った上にライスもつければ腹も満たされるだろう。

「あの店は久々の当たりだったな。また行ってみよう」

「・・・そうだね。今度はひよこことヤスとぐんまも連れて」

「さて、みんな着いたよ」

ジョニーの声に、ふと顔を上げる。フロントガラスの向こうに隊舎が見えた。

ここ数日は働き詰めで、まともに休日を通していなかった。たまにはこうやってゆっくり過ごすのも悪くは無いな。

俺達は車から降りると、ジョニーと軽く挨拶を交わした。武信と直毅は疲れていたらしくさっさと隊舎に入ってしまったが。

「いつも済まないなジョニー」

「いいよ。僕は現場だと大して動いてないからね。休日くらいは足になるよ」

人一倍働いておいて、嫌味無くこの台詞が吐ける人間。それが彼だ。この人の下で働いてもう3年近いが、未だにジョニーには勝てる気がしなかった。

「その分現場ではこき使ってくれ。割に合わん」

「義理堅いのもいい事だけど、先輩の厚意は素直に受け取っていいんだからね？」

不意に響く携帯の着信音。ジョニーのものだ。

「そういえばヤス君に連絡いれてなかったか。それじゃ優輝君、明日までゆっくり休んでね」

携帯を開きつつドアのウィンドウを閉めたジョニーは軽く手を挙げ、車を走らせた。俺はそれを見えなくなるまで見送る。休日によく見るやりとりだった。

夕陽に向かう車のシルエットの頭上、歪な形状の塊が落ちてきたのを、俺は見逃さなかった。

塊は車に直撃し、それきり車は動かなくなった。

徐々に落ちていく夕陽が車だったものの影を伸ばし、俺の足元にまとわりつかせる。

それはさながら、血溜まりのようにも見えた。

3月15日。 武警隊舎前。

「ジョニー!!」

俺は車へと全力で走る。呼びかけには、すぐに反応が返ってきた。

「僕は大丈夫だ！ヤス君が”見て”くれている！」

ヤスが、見ている。

人間が見守るだけで状況を変える事など到底出来やしないが、その”見ている”人間がヤスならば、話は変わってくる。

ジョニーはそのまま路地へと足を向け、走り出した。急いで後を追う。

車の脇を走り抜ける時に、車へと落下した塊を横目で追う。どうやら工事現場の廃材を寄せ集めたものらしい。

路地では流石に大きなものを降らせるのは無理なようで、先程のような廃材が降ってくる事は無かった。

しかし走っている最中にも降り注ぐゴミ箱、鉄筋、ガラス片、物、物、物。

ジョニーはそれを横っ飛びで、立ち止まって、時には道を変えて避ける。携帯を耳から離さないあたり、ヤスの指示は的確なのだろう。

しかしヤスの能力は、実際に肉眼で物を捉えていないと発揮できないはずだった。こんな狭い路地の中、ジョニーを常に見続けていら

れるとしたら、それは俺か空だけだ。

見上げるが、見えるのはビルの窓と暗くなった空だけ。どこから見ている……？

ひとしきり考えるが答えは出ない。それよりも今は、この状況を打破する事が重要だ。重要だが、有効な打開策が無い以上、今はヤスに頼って走り続けるしか無い。

どうしてこんな事になっているのか。考えられるのは襲撃。それもあり規模のでかいものだ。

手で触れずに物を投げる。あるいは吹き飛ばす。こんな芸当が出来る普通の人間は居ない。

そもそも能力者の仕業だったとしても、これを引き起こす程の能力を持った者を俺は一人しか知らない。

木戸を襲った少女。立体駐車場で、車を吹き飛ばした少女。

恐らくこれは彼女の能力だろう。だとして、何故ジョニーを狙っている？

彼女とジョニーとは何ら接点が無いはずだ。直接彼女の姿を見たのは、俺とヤスだけ。特に俺は、はつきりと顔を見ている。

そして、気づいた。何故俺が狙われなかったんだ……？

15分くらい走っただろうか。狭く入り組んだ路地を全力疾走しているため、さすがに息があがってくる。さっきのラーメンが逆流しそうになるのをなんとか堪え、必死でジョニーの後ろに食らいつく。幸いなことに姿を見失ったとしても、ジョニーの通った道は一目見ただけでわかるようになっていた。明らかに荒れているのである。

追跡開始から20分。遂に終わりが見えた。

辿り着いた先は海に面した倉庫街。大川製鉄所制圧の時に通った道だ。海に面しており、近くにはコンテナや資材を積んだ船が停泊している。

その道の中央に人影が2つ。1つは息を切らしたジヨニー、もう1つは、

「食後の運動っていうのもたまには良いもんでしょ？」

黒いフルフェイスを被った小柄な姿。以前と違うのは、上着が武長の白いダッフルコートという点だろうか。

「さすがに、ちょっと、ハードすぎると、思うよ・・・」

「それにしてもすごいね。ウチの攻撃全部避けてここまで来られるなんて、ちょっと想像してなかった。まるで未来が見えてるみたい」

「まるでじゃなくて、本当に見えているからね」

ジヨニーは息を整え、携帯に話しかける。

「ヤス君ありがとう。助かった・・・あれ、切れてる」

ズレた眼鏡をなおしつつ、ヘルメットの少女と対峙した。

「優輝君、この人が木戸を襲った犯人かい？」

ヘルメットを外さないことにはわからないが、体格や声からして恐らく本人だろう。俺は頷く。

「ありがとう。さて、貴方を公共物破損、及び殺人未遂の重要参考人としてこちらで保護します。ご同行願えますか？」

「保護つて。逮捕じゃないの？」

少女は飄々とした態度で応じる。

「まだ確たる証拠が無いからね。まあ、調べれば色々出てくるだろうし」

「断つたらどうなるの？」

少女がポケットに手を突っ込む。

「・・・断らせない」

俺はベレッタを取り出し少女に向けた。やはり子供に銃を向けるのは抵抗があり、照準が定まらない。

「ダメ。あんたは余計なことしないで」

少女がポケットから取り出したのは、無数の薄い金属片。それらを手から零した直後、金属片は既に俺の眼前へと迫り、銃を構えた両手と顔の手前で静止した。

「カッターの刃だよ。ちょっとでも変なことしたら、それ全部刺さるから注意してね」

少女はけらけらと笑う。

俺はこの少女を少し甘く見ていた。今まで大きな物を適当に飛ばしていた事で、精密な動作は苦手だと踏んでいたのだ。

「さてと。あんたには聞きたい事があるの」

少女はコートの背中からUZIを取り出し、ジョニーへと向けた。

「奇遇だね。僕も君にいくつか質問があるんだ」

「ダメ。ウチの質問が先だよ」

「ウチ等はね、人を探してるんだ。脚本家さん。知らないかな？」
質問の意味がよくわからない。何かの隠語だろうか。

ジョニーも同じなようで、少し考える素振りを見せた後薄く笑い、

「ああ、知ってるよ。どうして僕が知っていると判ったのかな？」
涼しい顔をして嘘を吐いた。

「そんな事はどうでもいいの。どこに居るの？」

「簡単には教えてあげられない。まず僕の質問に答えてくれたら教えるよ。約束する」

「・・・まあ、どの道あんたは地獄行きなんだし。いいよ。何が聞きたいの？」

少女は案外単純なようで、容易くジョニーの口車に乗せられている。時間稼ぎをしてきている間に打開策を考えなければならぬ。

ここから少女まで10メートル弱。銃撃すればまず外さない距離だが、迂闊に発砲は出来ない。下手をすればヤスの二の舞だ。

押さえ込むにしても、カッターの刃が邪魔だ。この2つの問題をどうにかしなければ・・・。

「まず君の能力についてだ。発射された銃弾を消したりする事は可能なのかな？」

随分とストレートに聞いたものだ。交渉術には詳しくないが、こういう時はもつと会話を引き伸ばすべきなのではないかと思う。

「はあ？出来るワケ無いじゃんそんなの」

少女が呆れたような声を出しているが、返答に意表を突かれたのはこちら側だった。

「なら、銃弾の軌道を変えたりとかも出来ないのかい？」

「当たり前じゃん。そんなん出来たらウチ無敵だし。マジ意味不なんですけど」

ならばヤスが負傷した説明がつかなくなる。少なくとも彼女的能力では無いらしい。

とにかくこれで第一条件はクリアされた。発砲は、恐らく可能。次はこの刃をどうするか。

「じゃあ次の質問だ。何故僕は君に殺されかけているのかな？」

「質問は一回までだよ。それに、あんたは罪人なの。自分が一番よくわかってるでしょ？」

「人に怨まれる覚えは結構あるからね。職業柄」

「めんどくさいねあんた。いいから脚本家の居場所を教えなよ。早く」

先程までの態度とは打って変わり、少女の声に苛立ちが混じる。当然そんな意味のわからない質問に答えられるわけも無く、倉庫街には波の音と、汽笛の音が響くばかりだった。

「まあいいや、次の人に聞くから。さよなら」

少女がトリガーに指を掛ける。

この際負傷覚悟で突っ込んでいこうと覚悟を決め、顔を伏せていた俺は少女へと向き直った。

いつからそこに居たのか、少女の後方に懐かしい顔を見つけた。

「彼に聞いても無駄だ」

随分と痩せたようだが、あれはヤスの・・・。

「・・・井上仁。最優先。殺して！早く！！」

少女はこちらを無視して振り向くと、全力で走り出した。仁に吸い寄せられるようにして、金属の軋む音と共に、停泊していた船から無数のコンテナが降り注ぎ、埠頭を襲った。

場に動きがあつたことにより、第二条件である刃の問題もクリアされた。

眼前の刃は何よりも速く仁へと向かつていったが、仁は身体を反らすだけでそれらを避け、少女を引き付けるようにして走り去っていく。

「待て！」

背中を向けた少女の足に向け発砲するが、コンテナの破片に弾丸を弾かれる。おまけにコンテナが埠頭に降る衝撃で揺れがひどい。またともに立っているのも難しい状況だ。

なんとか2人を追おうとするものの、無造作に積み上げられたコンテナに行く手を遮られている。

「くそっ・・・!!」

「優輝君後ろだ！」

振り返ると、地面を転がりながら俺達へと迫るコンテナが目に残った。

コンテナは地面を削り取る度に軌道を変えている。大きさから見て、直撃すれば大怪我じゃ済まされない。

右は倉庫のシャッター、左は船。俺だけならば上に跳んで回避できるだろうが、ジョニーは一般人だ。彼を抱えた上で跳ぶと、恐らく高さが足りない。

考えている間にもコンテナは距離を詰めてくる。もう悩んでいる暇は無い。

俺はジョニーの元へ向かおうと後ろを向くが、肝心のジョニーが居ない。

呆気にとられる暇もなく、俺は何者かに襟首を掴まれ、背中から地面に叩きつけられた。

この分だと、俺等が少しでも遅れていれば2人ともお釈迦だったな。俺の記憶力に感謝だ。

「馬鹿、お前が死ぬぞ!!」

ジョニーを抱えたまま倉庫に飛び乗ったひよこが喚いている。

「なんともねえよ」

目の前にでかい金属の箱が迫っているが、俺は特に気にするでもなく、その場に突っ立ったままだ。むしろ下手に動くほうが危ない。コンテナは突如として巨大な8枚の板へと形を変え、俺と優輝の両脇と上方へと吹き飛んでいく。優輝があのタイミングでジャンプしてたとしたら、確実に直撃コースだった。

コンテナ同士の接触音がしばらくの間続き、周囲が先程の静寂を取り戻したあたり、

「そのコンテナだけ傷んでたのかねー。バラバラやん」

「こっちはなんとも無いけど、お二人さん大丈夫かい？」
ひよこが倉庫の上から頭だけ出して様子を伺っている。

「もう飛んでこねえから降りて来い。あと優輝が気失ってる」
首根っこ掴んで思いつきり倒した影響か、優輝は地面に伸びていた。

「しっかし派手に散らかしたねー。これ誰が片付けるん?」

積み上げられたコンテナの山を仰ぎ、溜息を漏らすひよこ。

ギリギリで追いついたから詳しくは見ていないが、どうやらメットの女は井上仁を殺そうとしてるらしい。

「今はそれどころじゃねえだろ。とりあえずジヨニーは大丈夫そうだが」

「ああ、何度も済まないねヤス君」

「気にすんな。ひよこ、メット女はどこ行ったかわかるか?」

こいつの能力なら、ある程度の範囲なら索敵可能はずだ。

「わっかんねーなあ」

拍子抜けする。なんのために連れてきたと思ってやがるんだコイツは。

「いや、途中で偶然会ったから車乗っただけじゃん? 第一ジヨニーの安全確保でそれどころじゃなかったからさ。それに」
積み上がったコンテナを指差す。

「こんなんするほど必死に追ってるなら、荒れてる道を辿ればいいんじゃない?」

日も完全に落ち、路地裏は薄明るい裸電球が照らす灯りで、辛うじてその輪郭を保っている。

ジョニーと優輝は俺達の乗ってきた車に置いてきた。今頃は恐らく状況説明に追われているだろう。

ひよこの言ったとおり、倉庫街から続く道に荒らされた通りを1本発見した。その道を駆け足で辿っている最中だ。

「いやー疲れた。ちょっと休まない？」

「バカかお前は。犯人逃げちまったらどうすんだ」

「もう結構時間経ってるし、どうせ見つからないっしょー」

「それでも探すんだよ。仕事だからな」

「さすがに休日なんだからさー・・・」

ひよこの愚痴を聞き流しつつ、荒れた裏通りを走る。

始めは遠くの方でガンガン喧しい音が聞こえていたが、それももう聞こえない。逃げられたのか、あるいは物を投げる必要がなくなったか。

「でけえ通りにぶつかったな。ひよこ、探せるか」
かなりの距離を走ったらしく、街中の表参道まで来てしまったようだ。

「はいよー」

軽い返事を返し、目を閉じるひよこ。

「いねーわ」

「早いなオイ。もっと本気出せってんだ」

「出したって。少なくともその通りに怪しい奴は居ないし、近くの裏通りも至って普通の荒れ具合だわ」

普通の荒れ具合という言い回しが気にかかったが、突っ込むのはやめておく。

「つー事は、人ごみに紛れて逃げちまったか・・・」

「どうするん？まだ探す？」

通りに出てみたはいいが、人の流れが早すぎる。これじゃ探しようも無い。

「いや、帰るわ。走り回って疲れたしな」

「だなー。車は現場の人が回収してるだろうし、俺達は直接会議室行こか」

肩を回しながら背伸びし、俺へと振り返る。

「ところでヤス、さっきの電話の人についてだけど」

聞かれるとは思っていた。何れにせよ、いつかはバレル。

「明日話す。今はまず帰ろつや」

「いや、この後絶対召集かかるでしょ」

「俺の退院は明日だかな」

「そういう問題じゃ無いと思うんだわー・・・」
ネオンが照らす表通りを、俺達はゆっくりと歩き出す。

3月15日。事件発生から数時間前。病室。

「もしもし、ジョニーか」

『私だ』

通話を切る。すぐさまコール音が鳴る。よく見ると、ディスプレイには非通知と表示されていた。

『聞いておかないとお前とお前の仲間に不利だぞ、保明』

うんざりする。どこで番号を調べたのか、井上仁は俺に再びコンタクトをとってきた。

「なんの用だ。今気分悪いんだわ。主にオマエのせいだな」

『私を邪険に扱うのは構わないが、こちらとしても大事な用件だ』

「さつさと話せ」

また誰か死ぬとか言い出したら今度こそ本当に切ってやるつもりだった。

『3秒後、外の患者同士が廊下でぶつかり、点滴が倒れる』

がちゃん、と音がした。廊下に顔を出すと、どうやら患者同士がぶつかったようで、その拍子に点滴が倒れたようだ。すぐさま周囲を見渡すが、仁の姿は見えない。

「・・・何しやがった」

口にしてみるが、恐らくコイツは何もしていない。

『これからの私の発言を信用してもらうためだ。よく聞け保明』

『ジョニー君、と言ったか。15分後、彼に電話をするだけでいい』

「ジョニーか」

アイツの言つとおり、ジョニーからいつもの時間に連絡が来なかった。

連絡の遅れた理由は、ラーメンを食いに行っていたから。そう聞かされた。万が一の時のため、既に病院のロビーに待機している。

『もしもしヤス君？いやあごめんごめん、今さつきまで』

「ラーメン・・・食いに行ってたのか？」

ここでのジョニーの返答次第では、俺が動かなければならない。否定の言葉が返ってくることを強く願った。

『よくわかったね。優輝君あたりに聞いたのかい？』

結果は肯定。またしてもアイツの言うとおりになってしまった。悔しかった。信じたくない奴の言葉を信じなければならぬ事に。そして、これからそいつの言う通りにしなければいけないという事実。ただただ唇を噛んだ。

「今すぐ車から降りろ」

『え？』

「今ジョニーの車を見る。降りなきゃ死ぬぞ」

車のドアが開く音。遅れて聞こえてくる破壊の音。自動車事故のそれに似ていた。

「クソが!!」

すぐさま病院のロビーを飛び出し、前方を横切る車に向かって全力で走った。

車の主はすぐにこちらに気づいたようで、停車と同時に後部座席のドアが開く。

「お客さん、どちらまで？」

運転手は帽子を被るわけでもなく、制服を着ているわけでもない。そもそもこの車はタクシーじゃない。

「ふざけてる場合じゃねえんだよひよこ。隊舎までフルアクセルだ」

「なーんかタダ事じゃないね」

ドアを閉めた直後、凄まじいGが身体を襲う。けたたましいタイヤ

の音と共に、車は急発進した。

「そのまま路地裏に走れ。携帯は手放さないように頼む」

『言われないでもね！ナビゲート頼むよ！！』

ひとまず、アイツの指示はここまでだった。しかし事態を見る限り、これで終わってくれそうも無い。俺は頭を抱えた。

「たまたま病院の近く通ったから寄ってみたんだけど、まさか出てくるとは思わなかったわー。どしたん？」

「後でいくらでも説明してやる。今は飛ばせ」

「はいはい。・・・ん、電話だ。ヤス代わりに出てくれ」

ダッシュボードから携帯をスループাসで投げるひよこ。電話の主はただ一言、

『右に曲がれ』
と告げる。

「ジョニー右に曲がれ！」

『オーケー』

鉄筋が崩れたような音が響いている。

『立ち止まれ』

「一旦止まれ！！」

『了解。っと、危なかった』

ガラスの割れる甲高い音が耳に障る。

『左だ』

「左に曲がれ！！！」

ジョニー側の携帯からは、何かの爆発音やら衝突音が断続的に響いている。

ちなみに今俺は両手で両耳に携帯をあてがい、左の携帯から聞こえた内容を反芻して右の携帯に伝えている。かなりシニールな構図だ。

「ヤスごめん、真剣なんだろうけどギャグにしか見えない」

バックミラーに映るひよこの口元が明らかに笑っていた。

「ああもう面倒臭え！！！」

思わず携帯を投げ捨てたい衝動に駆られたが、どうにか抑える。今は人命優先だ。

『そのまま直進しろ』

「真っ直ぐだ！」

『っはあ、ッはあ・・・』

気がつけば喧しい音声は影を潜め、息を切らしたジョニーの吐息と、汽笛の音が響くだけだった。

『これで私の指示はお終いだ。あとはこちらで処理する。ではな』

「処理ってどういうことだ！おいクソ野郎！！！」

抗議の声を上げるが、既に通話は切れている。

「ざっけんな！ジヨニー生きてるか！？」

返答が無い。代わりに聞こえてきた声に、俺は覚えがあった。

『食後の運動っていうのもたまには良いもんでしょ？』

ヘルメットの女。木戸と優輝と俺を殺そうとした女。ソイツがジヨニーの目の前にいるらしい。

つまり俺は、いや仁は、襲撃を避ける指示に見せかけ、コイツの元へジヨニーを誘導した・・・？

「ジヨニー聞いているか！今すぐそこから離れ・・・」

携帯から鳴り響くアラート。電池切れを知らせる無機質な電子音。

「なんでこの重要な時に・・・！」

「着いたぞヤス。うーわ、車グツシャグシャやん。なにあれ」

車を停止させ、降りて確認しに行こうとするひよこを呼び止める。

「待てひよこ！ここから15分程度で・・・クソツどこだよー！」

「落ち着けつて。俺まだなんの説明も受けて無いんだけど？」

説明なんか今はどうだっていい。15分間全力で走ったとして、行ける範囲は限られる。限られるが、いくらなんでも広すぎる。風潰しにそのあたりを走り回ったところで、間に合うとは思えない。

「ジヨニーに直接聞けばいいだろうよ」

「電池切れなんだよ！クソツたれ、こうなるなら切れる前に聞いておけば・・・？」

電話の切れる直前に聞いた音。汽笛の音。あれは電車じゃなく貨物船かなにかの音だ。

「港か・・・？ひよこ、隊舎から15分全力で走って港に辿り着けるか？」

「可能。ただ港つつつても範囲が広いねー」

必死に仁の方向指示を思い出していく。最初にその路地を真っ直ぐ、8秒走って左、12秒経ってからその次を右、そこから・・・。驚くほど正確に曲がった方向と時間を把握していたため、寒気を覚える。俺はこんなに物覚えが良かったか？

「すげーな、焦ってた割によく覚えてんじゃない」

考えが口に出ていたようで、ひよこに感心される。特に気にも留めずに思考を続けた。

「最後に・・・直進だ。ひよこ、今の道順を走った場合、着く場所はどこになる」

「港だねー。大川製鉄所の近く」

いくら聞こえていたとはいえ、頭の中に正確な地図が入っているコイツも大概だな。

「世の中にはね、自分の代わりに地図を覚えていてくれる有難いもんがあるのよ。カーナビって言うんだけど」

指差す先の小さなモニターに、目的地が示されていた。

「多分ジョニーはそこだ。恐らく木戸襲ったヤツに絡まれてる。急ぐぞ」

「よっしゃい」

隊舎の横を全速力で通過し、車は海へ出る道へと進む。

c a s e . 0 7 e n d

3月8日。警視庁。

「夜見川課長、事件発生直後の署内にいた者への聴取、完了致しました」

「んー、わざわざありがとー前田さん。で、どうだったの?」

「それが、やはり誰一人犯人を見ていないようで・・・」

「ふーん。前田さんはどう思う?」

「どう、と言いますと?」

「0点」

「・・・は?」

「その返答、0点。質問に質問で返すのは馬鹿の証拠だ。いいか、少なくとも署の入り口から2階の突き当りまでの区間には少なくとも4人居た。そいつらのすぐ前を犯人が通過してんのが監視カメラの映像に残ってたんだ。それについてどう思うか聞いている」

「恐らくは犯人による署の人間への視線誘導か何かかと考えられます。あるいは犯人がチームを組んでおり、外部から能力を行使し、犯人を視界から消したものと」

「よし、それでいい」

「へ？」

「今回の不始末の説明、全然考えてなくてさー。助かったよ前田さん」

「はあ・・・？」

「ああ後、国が確認できてる一般能力者から最重要指定能力者までリストアップしてね。あとで調べるから」

「直ちに」

それだけ言うと、前田は踵を返して歩いていった。

「はあ。どいつもこいつも無能、か・・・」

一言呟き、俺は会議室へと足を向けた。

3月16日。正午。7課会議室。

「んで現場に俺達が着いたら、なんとコンテナが空中浮遊してたってわけだ。世の中不思議なこともあるもんだねー」

ひよこがわざとらしく驚いた素振りを見せる。

その後俺はヤスに気絶させられ、目を覚ましてからは裏路地を全力疾走中に呼んでおいた応援に状況説明をし、犯人の目撃情報を集め、今に至る。ちなみに徹夜だ。

「・・・ごめん。もつと早く異常に気づけばよかったんだけど、外出たら2人とも居なくて。携帯も繋がらないし」

「気にするな武信。仮に着いてきていたとしても、あの状況では何も出来なかった」

「ンで？犯人見たヤツは居たンかよ優輝」

退院して間も無く駆け出されて不機嫌そうなヤス。

「ヘルメットにコート姿の目撃情報は得られなかった。路地での音についても聞いたが、不良の喧嘩だと思って聞き流していたらしい」

「まあ、それが普通だわな」

直毅はふんぞり返って天井に煙を吐き出している。

「井上仁についてはどうなんだ。優輝と身長同じぐらいだし、結構目立つと思うんだがなあ？」

「そっちは1課と2課が追っている。昨日の時点で予約していたホテルをキャンセルし、そこからの足取りは掴めていない」

「なんか出所してから延々ホテル梯子してるっぽいね。今回の事件より前から追われてるみたいだけど」
ひよこが説明を補足する。

井上仁は出所してから12日間、8箇所の宿泊施設を転々としているようだ。そして仁がチェックアウトしてからすぐ、仁の身内と名乗る人物から所在を聞かれているらしい。

「以上、ホテルマンさんの証言でした」

「・・・その井上仁の身内っていうのは、本物じゃないんだよね？」

「当たり前だバカ。アイツは親戚の類とは絶縁してるし、犯罪者を出所早々ストーキングする物好きな身内なんか居てたまるか」
ヤスが冷たく言い放った。

「ひよこ、そいつらについての情報は？」

「4課が血眼で調査中。まあ、1人はすぐ割れたみたいだけどね」
そう言うと、スクリーンにホテルの監視カメラ映像が映される。カ
ウンターで何やら話し込んでいる男性。男性が振り向き、顔が見え
たあたりで映像が止まった。

金色に染め上げられた短髪、色黒。サングラスをかけており、左耳
に大量にピアスが付いており、土木作業員のような作業着を着用し
ている。

「これをあらかじめ拡大したものがこちらになります」

夕方の料理番組のような手際の良さで画面が切り替えられ、男性の
顔写真と、詳細なデータが表示される。

「新山晃、^{にいやま あきひ}所属は公安だねー」

「公安・・・？同業者じゃねえか。なんでそいつらが仁を追ってん
だ」

武警と公安。業種的にはかなり近いが、能力者絡みの犯罪はだいた
いがこちらに回される。反対に一般人によるテロなどは向こうが処
理しているようだが、お互いの立場上あまり情報が入ってこない。

「それも調査中。一日二日で事件は進展しないものなのだよ直毅君」

「わかってっけどよあ。っーかどう見ても土木のおっちゃんだろこ
いつ」

「井上仁が何故公安に目をつけられてるかってのいうのは後々わかる
として、だ。まず目先の事をどうにかしないとね」

ジョニーが切り出した。

「僕がヘルメットの女に襲われた。事前にその情報を井上仁から聞いていたヤス君が僕を犯人の元へ誘導、一悶着あった後に井上仁が出現し、犯人は仁を追うために逃走」
これが大体の流れだね、と区切りを入れる。

「まず何故僕が襲われたのかだね。僕自身に心当たりは無いんだけど」

「脚本家がどうか聞かれていたが、あれについて何か知ってるか？」

「うーん……あの時はその場凌ぎで答えただけだったし、なんなんだろう……」
頭を抱えている。

「それもわかんないけど、犯人の能力自体もおかしなもんだと思うけどねー」

考えても答えが出ない事を察してか、ひよこが話題を切り替えた。
車が潰された場所から犯人と接触した場所まで約8キロ、その間俺達は全力で走っている。人影は見えていないし、気配も無かった。
犯人は恐らく高校生程度の年齢と考えると、能力者という条件を入れても、俺達と並走しながら能力を使えるというのはおかしい。しかも現場に着いたとき、犯人は息一つ切らしていなかった。遠距離から能力を行使できると考えるのが妥当だろう。

「……仮に能力の範囲が8キロもあつたら、僕達の手に負える相手じゃない気がするんだけど……」

そんな距離なら狙撃も不可能だ。爆撃機でも張り合えるか怪しくなってくる。

「しかも2トンのコンテナ何個もぶん回せんだろ？無理だわ。世界の終わりだわジーザス」

範囲が8キロ無かったとしても、カッターの刃を10メートル程度移動させたり、50メートル先のコンテナを操ったりしている。少なくとも半径100メートルは危険と見ていいだろう。

「話脱線してンぞ。どうして犯人がジョニーを狙ったかつてのもわかんねえが、俺はそれ以上にアイツの行動が終始わかんねえ」
井上仁の行動。ジョニーを犯人の襲撃から救ったかと思えば犯人の元へと誘導し、更に自分を囫にして俺達から犯人を遠ざけた。ように見える。

「予め事件の発生がわかってたんだ。ジョニーを助けるだけなら、別に犯人に接触させる必要が無えだろ」

「・・・逆に言うと、助けなくていいなら電話かけてくる必要も無いね。仁が優輝やジョニーを殺そうとしたっていう線は無いと思う」

「ならなんでもわざわざ優輝とジョニーをあそこまで連れてった。逃がすだけなら逆方向でも良かったろうが」

「・・・それは・・・」

武信が言葉を詰まらせる。その問いに対する回答を出したのは、意外にも直毅だった。

「会わせた上で助ける必要があったんだろ。どうしてそうしたのかとか聞くなよ？俺にもわかんねえしなあ」

曖昧な回答だが、今出せる答えの中で最も正解に近いのかもしれない。

ジョニーに死んで欲しいのなら助け舟を出す必要は無い。恐らく最初の車への一撃で事は済んでいたはずだ。

だが助けたにも関わらず、一時的に俺達を窮地に追い込んだ理由。

犯人と俺達が接触する必要があったのか、あるいは別の理由で……。

「ダメだな。いくら考えた所で、答えは出ない」

俺達は心理学者じゃない。考えるのは別の連中に任せるとしよう。

ヒントが少なすぎるなら、自分達で見つければいい。

「俺達も動くぞ。俺とヤスとひよこは現場に戻って犯人の手がかりを探す。武信と直毅は仁の足取りを追ってくれ」

俺が指示を出すと、各々が調査の準備を始める。

「あの、僕はどうすれば」

「待機だろ。よくわかんねえけど狙われてんだろ？」

直毅はP90を小脇に抱え、マガジンを鞆に詰めていた。何をしに行くかわかっているのだろうか。

「だろうね、ははは……」

「井上仁は見つけ次第重要参考人として保護しろ。本人に直接聞いたほうが早い」

「・・・こっちはどうするの？大体の捜査終わっているようだけど」

「2課と合同で捜査だ。見落としが無いとも限らない」

「まあ、部屋に籠ってるより動いてた方がマシだな。行くぞ武信」
一通りの銃器を鞆に詰めた直毅は、武信と共に会議室を出て行った。

「さて、俺達も行きましょうかねー」

「運転は優輝で頼むわ。こいつに任せたらいつか事故ンぞ」

「急がせたヤスが悪いだろ！？俺だって普段は安全運転で」

「言い合いは車の中でな。それじゃあジョニー、留守番は任せた」

「了解。何かあったら連絡するね」

13時30分。車中。

「結局何も見つからねえもんなあ」

「・・・そうだね」

2課との捜査を早々に切り上げた僕と直毅は、街中を車で適当に流している。

仁さんの足取りは未だ掴めず、公安の動きもわからず仕舞い、優輝達の連絡も無い。

「・・・まあ、まだビル出てきてから時間も経ってないから。焦らずいこう」

「そうだな」

直毅はギアを1段上げると、首都高速へと道を切り替えた。

「・・・どこに行くの？」

「いや、そこらへんぐるぐる廻ってんのも暇だろ？ドライブ付き合えよ」

「・・・後で怒られても責任取らないよ」

バレねえから問題無えよと言いながら、カーステレオを操作する直毅。70年代のハードロックが大音量で流れている。少しうるさい。

「そつえばよお。ヤスの事だが」

「・・・何か気づいた？」

「いや、あいつの家庭環境のことだ。高校じゃクラスも違ったからどうか知らねえけど、あいつの家仲良かったよなあ？なんであんなことになっちゃったのかって。ちよっと思っただけ」

あんなこととは、恐らく無理心中の話だろう。

「・・・僕も、正直納得いつてないよ」

ヤスの家は高校の頃も昔と変わらず夫婦円満だったし、兄弟仲も良かった。ヤスの兄さんとは、小学生の頃遊んでもらったのをよく覚えてる。

事件前日にも、家族旅行に行くから3日間欠席するって届けを担当に提出していた記憶がある。その後すぐに、無理心中のニュースが新聞で報道されていた。

「あの時期は平和だったからもつとでかく報道されると思ってたんだがなあ。事件から裁判まで随分静かだったな」

「・・・ヤスへの配慮じゃないの？未成年だったし」

「そんなもんかねえ。マスコミはそういうの御構い無しだと思うが」

「・・・ちよつと待つて。無線貸して」

ダッシュボードから無線機を強引に引っ手繰る。

『こちら4課です。何か進展ですか？』

「7課の武信です。井上仁の無理心中についての記録と、釈放の情報を全部こっちに送ってください。大至急お願いします」

『了解しました。数分で送信します』

「直毅、仁さんが捕まってた刑務所まで向かって。早く」

「おいおいおい、何だよ突然。何か思いついたか」

「おかしかったんだよ。恐らく、最初から」
井上仁。家族2人を殺害した後、通行人を1人殺害して逃走。そして自首。そこで調査は一段落着いた。

そして2週間前に冤罪と判明し釈放。そして釈放についての記事は・
・。

パソコンに資料添付付きのメールが届いた。4課からだ。

「やっぱりだ。あるべき筈のものが無い」

添付された資料には、現場の詳しい状況、裁判の記録まで事細かに載っていたが、井上仁の釈放についての記事や報道は、一切載っていない。

ヤスと優輝の負傷でこっちに目が向いていなかった。なんで疑問に思わなかったんだらう。

「冤罪で投獄されてた人が出てきたんだ、ちょっとくらい話題になってもおかしくないはずなのに」

「全く何も出てこないっつーのも不自然な話だな。で、どうして刑務所なんだ？」

「釈放の資料。取ってあるんじゃないかと思って」

「なるほどねえ。了解、ぼちぼち急ぐぜ」

さらにギアを1段上げ、セダンは首都高速を矢のように駆けていく。

3月16日。13時。隊舎へ続く大通り。

「着いたぞ」

「へーい」

俺がひよことの口論を繰り広げている間に、どうやら現場付近まで来ていたようだ。

潰れた車の残骸は既に撤去されているようで、ヒビの入ったアスファルトだけが昨日の襲撃を記憶していた。

「路地のチェックは昨日のうちに警察と優輝と3課が調べてるし、俺等どうするん？」

「俺とヤスはここから港までの路地をもう一度調べる。ひよこは車で繁華街の方に向かってくれ」

「あれ、一緒に調べるんじゃないの？」

「港から繁華街までの逃走経路を洗ってくれ。仁は人ごみに紛れて姿を眩ませたようだ。犯人がどうやって現場から消えたのかは判っていない」

「了解。んじゃ適当に調べてくるわ」

「完璧に調べろ。それと車その辺に止めるなよ、あのあたりは路駐

してたら五分でタイヤ止めが付くぞ」

「あいあい」

わかっているのかわかっていないのか曖昧な返事をしながら、俺達は車が遠ざかるのを見送った。

陽が西に傾き始めてからまだ間もない筈だが、路地裏に射す光はほとんどなく薄暗く、湿った空気が漂っている。

「この辺は立ち入り禁止になって無エのな」

「こっち側は完璧に調べ上げたからな。潰れた車と一緒に、飛ばされた廃材なんかも回収済みだ」

「へえ」

回収したという割にそこかしこに物が散乱している。フレームの曲がった自転車や傘の骨組み、どこから飛んできたらしいタオル。小奇麗に清掃された表通りの裏側は、こんなにも薄汚れている。何か皮肉めいたモノを感じさせた。

「ここらへん調査済ませてあんなら、わざわざ調べるまでも無いんじゃないのか？」

「少し気になる事があってな」

そう言うつと優輝はポケットから地図を取り出し、印をつけていく。

「なんだ、港までの経路の確認か？」

「それはもう済んでいる。問題は飛んできた物とその箇所なんだ・
」

地図を見ながら何やらぶつぶつとつぶやいている。俺はその後ろを黙ってついていく。時折立ち止まって地図にペンを走らせ、また歩き出す。俺はその後ろを黙ってついていく。これの繰り返しだった。

「おい優輝」

「・・・ん、どうした。何か見つけたか」

「さっきから何地図と睨めっこしてんのか理由を聞かせろってんだ。俺は散歩しに来たワケじゃ無え」

こいつの悪い癖だ。何か1つ気になる事があると、それ以外が疎かになる。

「すまない。説明してなかったな」

俺に地図を手渡すと、今までの順路を指で示していく。

「スタート地点はここだ。ここから裏路地に入って、ここでゴミ箱が飛んできた。そしてここでガラスが降ってきて、右に曲がった」
犯人の妨害によって進めなくなった道にはバツ印が描かれ、それぞれ飛んできた物が書きこまれている。

「ここからはしばらく真っ直ぐだな。そして大きな通りの手前で左に曲がった」

「次に立ち止まってから右、そのまま道なりに走って・・・ここで右だ」

指を追ううちに、俺はある事に気づいた。

「でけえ通りに出そうになると、毎回道塞がれてンな」

「一度大きな通りに出てしまえば攻撃も難しくなるだろう。逃げ道も大量にある」

道順をなぞる優輝の指は地図から離れ、前方を指差す。

「最後に、ここを真っ直ぐだ」

ジョニーと優輝が犯人と接触した地点、鬼ごっこのゴールとなった港。大した証拠も見つからず、ここまで歩いてきてしまったようだ。コンテナの撤去作業はまだ続いており、重機が軋みを上げながら働いている。

「昨日のはコンテナ運搬中の事故って事になってンだっけか？」

「ああ。能力者の暴走による事件や事故は、住民にとって不安材料になるからな」

能力者はその力の大小問わず、発現した時点で一度病院へ搬送。そこから公的機関の検査を受けおおまかな能力を判定し、国の管理する能力者リストに登録される。能力者による犯罪が起きた場合の迅速な対処のためらしい。

ただし、発現した事を隠したまま生きてるようなヤツも極々稀に居る。

「災害レベルの能力者が野放しになっている事など、普通は有り得ないのだがな」

「まあ、国の信用に関わるし上も隠すのに必死なんだろう」

「そういえばひよこはどうした。隊舎からここまでよりも、ここから繁華街のルートのほうが距離が短いはずだが」

周囲を見回すがひよこの姿は無い。どうせサボって煙草でも吸っているんだろう。

『もしもし。二人とも聞こえてますかー』

タイミングを見計らっていたかのように、インカムから間延びした声が聞こえてくる。

「テメエまた仕事ほったらかして遊んでんじゃねえだろうな」

『ちゃんとやってるって。そっちはどうなのよ』

「こっちは証拠になる物は無かったが、犯人の意図が大体わかったぞ」

「オイ聞いて無えぞ。どういうこった」

優輝は再び地図を広げ、説明を始めた。

「ヤス、これを見て本当に何も気づかないか」
地図に目を落とす。

車を降りて右手の路地へ進入。

十字路。左からゴミ箱、前からガラス片。右へ。

直進。路地のガラスが降るが走り抜けて回避。

十字路。大通りにぶつかるが、前の通りからコンクリートブロック、

右からガラス片。左へ。

直進。路地の木材が倒れるが前方に走って回避。

十字路。前方から左の通りにかけて鉄筋が道を塞ぐ。右へ。

左曲がりの緩やかなカーブを描く道。特に何もなし。

三叉路。大通りにぶつかるが、前方上部から梯子が落下。右へ。

十字路。右から崩れた塀の一部、前方から鉄筋。左へ。

しばらく直進。港へ。

以上がジョニーと優輝の通った道順だ。

優輝が呟いていた言葉を思い返す。問題は飛んできた物と、その箇所。

13時50分。都内刑務所応接室。

「・・・今何と仰いましたか？」

聞こえていなかったわけではない。目の前の女性の言った言葉があまりにも予想とかけ離れていたため、つい聞き返してしまう。

「ですから、囚人番号1255番は釈放されていません。二週間程前に北海道の刑務所に移送されました」

何でしたらご自分でご確認を、と資料を渡される。

「・・・3月4日に府中刑務所から網走監獄に移送・・・」

だったら、ヤスや優輝達の前に現れた井上仁は何なんだ・・・！？

「・・・向こうの刑務所から、移送完了の報告は受けているんですか？」

「はい。当時の看守長が確認しています」

「当時の、とは？」

女性は眼鏡を外し、胸ポケットへと仕舞った。

「看守長は移送手続きを終えた直後、事故で亡くなりました」

車に戻ると、直毅がシートを倒して仰向けで煙草をふかしている。

「で、どうだったよ」

僕は直毅に応接室で聞いたことを話した。

「・・・看守長のほかに看守も一人亡くなってる。轢き逃げらしいね」

轢き逃げ犯の車は事件前に借りられていたレンタカーで、数km先の路上に放置されているのが見つかっている。

「その言い方だと犯人が見つかってねえみたいじゃねえか」

「・・・見つかってないんだよ。犯人の証拠は指紋はおるか、髪の毛一本すら発見されてないらしい」

「借りたハナから犯罪に使う気だったってわけかよ。レンタカー借

りた奴は引つ張つてねえのか」

「・・・そのあたりは今聞くと。車出して」

直毅はシートを起こし、キーを回した。その間に携帯を操作し、夜見川さんに電話をかける。

「・・・もしもしみかさん？武信です」

『おーどうした？飲みに行くにはまだ早いよ？』

向こうも木戸の件で鬼のように忙しいだろうが、そんなときでもおどけてみせる夜見川さんに少し安心する。

「少し調べて欲しいことがあるんです。3月4日の事件について」

『3月4日ね・・・はいはい。最近は事件が多いから』

電話の向こうからキーボードを叩く音が聞こえてくる。

「看守2名の轢き逃げについてです」

打鍵音が止まる。

『先に謝っておくね。もしかしたら答えられないかもしれない』

「・・・何故です？」

『公安が絡んでるんだよ。ホラ、あの人達ちょっと複雑な連中だから』

キーボードの音に混じった乾いた笑いと共にそう告げられた。

「・・・やっぱり、井上仁の関連事件は公安が捜査してるんですね」

『よく知ってるねー。なんか色々あるらしいよ?』

「・・・答えられる範囲でいいんです。轢き逃げに使われたレンタカーを借りた人物について、お聞かせ願えますか」

『はいよー』

返事の後にはばらく間が開き、いつの間にかかけられていたカーステレオから流れるギターソロが耳についた。

『・・・仏さんの名前は田中吉郎。死亡推定時刻は3月3日、午後6時40分。東京湾の埠頭に停泊してる漁船の持ち主が男性が浮いてるのを発見して通報。死因は溺死。睡眠薬らしき薬物反応も出る』

頭の奥がぴりぴりと痺れていくのを感じる。井上仁の移送手続き。看守轢き逃げ。男性の水死。これらは間違いなく関連付けられている。

「・・・井上仁の移送については、何か聞いていますか」

『知ってるよ。その様子だと詳細は知っているかと思ったんだけど』

『移送手続きがあつたのは本当なんだ。ただ、どうやら何かの手違いで移送途中に井上が逃げ出したらしいね』

手違いが起こったにも関わらず、移送完了の手続きが出来るはずがない。耳鳴りがしてきた。ずれている。それも完璧に。

「・・・みかさん。井上仁の脱走の背景には何があるんですか」

『それを今公安が追ってるわけよ。こっちも色々調べてはいるんだけど』

「くそがつ……！！！！」

左にハンドルを切られた車が急ブレーキに耐えられず、がたがたと音を立ててエンジンを停止させる。

「……直毅、突然どうし」

言い終わる前に、直毅の判断が功を奏したことを身をもって知った。息を切らし、ハンドルにもたれかかった直毅が何か言葉を発している。

「」

それを聞き取ることが出来ない。

耳鳴りがひどい。超音波のようなそれがやがて頭痛へと姿を変え、僕の思考を遮り、意識を絶った。

3月16日。13時30分。港。

「十字路がおかしいな。殺すだけならわざわざ一箇所だけ抜け道を
用意する必要が無え」

「付け足すと、途中の分岐の何箇所かは袋小路になっている。しか
しそちら側には進ませなかった」

『俺地図とか見えないから何もわからんのだけど』

「行き止まりに誘い込みや一発だかな」

「全力疾走させた状態で危機的状況に追い込む事により咄嗟の判断
を要求させ、ご丁寧に作られた抜け道を進ませるように計算されて
いる」

要するに。

「俺が電話しなくても、港に誘導されるようになってんのか」

「そうだ。道なりに進んでいる時に前を塞がれることも無かった。
全て走っているだけで避けられたからな」

『聞いてますかー』

「つまり犯人は、はじめから俺達を港に誘い込むつもりだったと言

うことだ」

『ちよいと待ちなさいお二方』
いつものようにひよこが会話を遮った。

『しよっぱなの車潰されたのはなんなのよ。あれそのまま乗ってた
ら即死じゃないん？』

確かに車の残骸を見た限りでは、殺すつもりで放った一撃のように
思える。

「違う。あれはジョニーが車から降りたから直撃したんだ」

ドアの鍵を開け、シートベルトを外し、車から飛び出すまでの僅か
な時間。アクセルは踏み込まれていない。

「あの速度を維持したままなら、本来瓦礫がぶつかるはずだったの
は後部座席より後ろになる」

『そのまま乗ってたとしても、ジョニーは死ななかったって事？』

「恐らくはな。そして瓦礫に潰された車は走行不可になり、嫌でも
車から降りなければなくなる」

「なるほどねエ。本題は港に着いてからの会話ってわけか」
港での犯人の質問。優輝から聞かされたところによれば、

私達は脚本家という人物を探している。居場所を教える。
それだけ聞くと、犯人は仁を追って逃走したらしい。

『そつちの話はもう済みましたかい？俺も報告あつて連絡したんだけどさ』

「そうだったな。ひよこ、今どこだ？」

『繁華街だけど』

「完璧に調べろとは言ったが、時間をかけすぎではないか」

『時間掛けて調べる価値があつたわけよ！。見つけたよ、犯人の逃走経路』

13時40分。繁華街裏路地。

ひよこに車で迎えに来させた俺達は、近くのコインパーキングに車を止め、仁と犯人が消えた繁華街へと向かった。

「で、犯人はどっから逃げたってんだ」

「此方にてございます」

ひよこに案内された先は、仁が消えた地点から少し先の路地。

「この先に逃げたという事か？」

「ちがーう。犯人はここで別の経路を使って逃げたんだ」

「どうやってだ。この先は繁華街にぶつかるとし、両側ビルだぞ」

左側の壁には窓の代わりに排気口が顔を覗かせ、その横には壁沿いのくぼみにでかい金属製のゴミ箱が置かれているだけだ。上に登るか地面でも掘らない限りは・・・。

ふと、ゴミ箱の置かれている場所に目をやる。ビルとビルの間に路地に多少はみ出して設置されたストッカータイプのゴミ箱。その後には結構な高さの壁があり、自力でよじ登るには少々難儀しそうだ。

「俺も最初はそこから反対の路地に回ったと思ったんだけどねー。

あ、ちよつとそこどいて」

ゴミ箱を調べていた俺を手で押しのけると、ひよこはゴミ箱を手前に引っ張り出す。

「ここの構造少しおかしいっしょ？ビルと壁が、まるでゴミ箱を避けるみたいに建っててさ。最初からここにゴミ箱置くような位置取りだよー」

その実、ビルはゴミ箱を避けていたわけでは無い事を、ゴミ箱の下にあったそれが告げていた。

「マンホールか」

「随分前に閉鎖されたみたいだねー」

ゴミ箱を端へとどかし終えたひよこは、ポケットからビニールケースを取り出した。

「これ、蓋に挟まってたんだわ」

中身は何かの繊維が数本。犯人は事件当日、白いコートを羽織っていた筈だ。

「それじゃあ中調べようぜー」

おもむろに下水道へ入ろうとするひよこを制止する。

「んだよ、まだ何かあるかもしれないやん」

「それをするのは俺達じゃ無え。警察の皆様方に任せときゃいいんだよ」

「えー、折角ライトとか長靴とか色々用意してたのに」

「お前、まさかそれを用意するのに時間食ってたんじゃないだろうな」

怪訝そうな顔を浮かべる優輝に、

「そうだけど？」

悪びれる様子も無く答えるひよこ。

「馬鹿者。まず見つけた時点で真っ先に俺等に連絡、そしてビニールケースを向こうに渡してくるのが筋だろう」

「たまには遊んだっていいじゃないっすかー。そうだ、ジョニーに連絡しといてね。俺はこれ渡してくるからさ」

ビニールケースを持つ手をひらひらさせつつ、ひよこは繁華街の方へと消えた。

「あいつまだ連絡入れて無かったンか・・・」

「ふざけていられる状況じゃ無いんだがな」
優輝はインカムに指を当て、ジョニーへと繋ぐ。

「繁華街裏路地にて犯人の衣服から剥離したと思われる繊維を発見した。今鑑識に・・・」

背筋に悪寒が走る。何か漠然とした不安が全身を抜けていく。階段を踏み外した時のような、屋上から飛び降りる人影が見えた時のような、駅のホームで後ろから突き飛ばされるような。

「ん、ジョニーに繋がらんぞ。故障でも・・・」

言葉の後半部は、頭の芯から響くような耳鳴りに掻き消される。平衡感覚すら失いかねない程の耳鳴りに、俺は堪らず両耳を押さえ、壁に身を預けた。

「糞、あの時の耳鳴りか！？ヤス！！」

以前も似たようなことが何度かあった。そして耳鳴りの後には、決まって良くない事が起きる。前総理大臣の時も、俺の時もそうだった。

「おいヤス大丈夫か！？」

肩を揺すられるが一向に良くなる気配は無い。この音は聞いてはいけないと、身体が拒否反応を示している。自分の意思とは関係なく、意識が遠のいていく。

視界の端に人影が見えた。立ち膝をついた状態で固まっている。此方に背を向けた女。その黒髪は腰まで伸びていた。

不意に女の輪郭がぼやけ、テレビの砂嵐のようなノイズが走る。ノイズは視界全体に現れているわけでは無いようで、周囲の景色はそのままなのに、女の周りだけ砂嵐が発生している。女はゆっくり立ち上がるが、立ち上がっている最中にも砂嵐は身体を浸食し続け、

輪郭がはつきりしなくなっている。

完全に立ち上がった女らしき物は、砂嵐と共にひよこの向かった路地へと歩き出す。もはや元が何だったのかわからない砂嵐の塊は、路地を曲がる前に俺の視界から消えた。

「幻覚か・・・？」

「おいヤス！しっかりしろ！！」

このままだと頬を張られるので、優輝の手を左手で止めた。

「荒治療過ぎンだよバカ。それで治るワケ無えだろ」

「目が虚ろだったんだ。それより耳鳴りは大丈夫なのか？」

気がつくのと頭痛のような耳鳴りは止んでいる。それに伴い周囲の喧騒も戻ってくるはずなのだが、寧ろさつきよりも静かになっているような気さえする。

『二人とも大丈夫！？今なんかすごい耳鳴りしたんだけど』

「俺は大した事は無い。ヤスが少々ふらついてるが、ヤス、大丈夫か？」

「いい。自分で歩ける」

肩を貸そうとする優輝を制止し、壁から身体を起こす。

『こつちも結構やばいレベルだったからさ。これ周りの人とか聞こえて・・・』

ひよこの声が詰まる。

「どうした？」

『こっち戻ってきて。早く』

その声色にいつものふざけた様子は一切感じ取れない。ただならぬ雰囲気を感じた俺達は、ひよこに言われるがまま繁華街へと戻った。

14時3分。繁華街。

繁華街から裏路地への入り口で、ひよこが立ちつくしている。それに並ぶ形で前に出た俺達は、ひよこに問うまでも無く異変に気づいた。

「人が、居ない・・・？」

正面の大通り、そこから続く道、左右の交差点。どこにも人の姿は見受けられない。

「オイオイどうなってんだこりゃ」

俺が繁華街へと進もうとすると、

「出るな」

ひよこに襟首を掴まれ引き戻された。

「痛ってえな何すんだよ」

「見てわからんの？この時間にここの人通りが途絶えるなんて有り得ないだろ」

「それと俺を引き止めたのとなんの関係が」

「危ねーかも知れねえだろうが。ちょっと待ってろ」
襟首を掴んだまま目を閉じるひよこ。

「・・・人が居ないのはここを中心とした半径100メートルくらいの道路。建物の中には人も居るっばいね。危ない連中とかでは無いみたい」

「なら離して貰っていいか。若干首絞まってンだが」

「あ、悪い悪い」

「・・・妙だな」

優輝が首を傾げる。

「携帯の電波は通ってるみたいなんだが、ジョニーと武信に電話が繋がらない。インカムも不通になっている」

どうやら話し中になっているらしく、携帯からは断続的な電子音が漏れていた。

「なんだろうねこれ。耳鳴りがしたと思ったら急に人が居なくなっ
た」

「ひよこ」

さっきのひよこの言葉に妙な引つ掛かりを感じていた。

「さっき女を見なかったか？耳鳴りしてる最中に裏路地に居て、そっちの方に歩いてったんだが」

「いや、見てないねー。どんな感じの人？」

「服装とかは覚えて無えンだが、腰くらいまで伸びた黒髪の女だ。蹲ってたソイツが立ちあがって、この路地に歩いてったように見えただが」

ひよこは考えるような素振りを見せたが、やがて首を横に振った。

「さすがに俺の横通り過ぎたりしたら絶対わかるはずなんだけどない」

「優輝は？」

「俺も見えていないな」

「そうか・・・いや悪イ、忘れてくれ。多分耳鳴りで頭やられてたんだ」

幻覚という事にしておく。万が一幽霊とかだったら怖いからな。

「で、この状況は何なんだひよこ」

「いやー俺に聞かれてもねー・・・耳鳴りする前はこころへん人通り多かったし、さっきのが原因だとは思っけど。気になるのは、建物の中に人が居るのに誰も出てこないって事」

「ひとまず様子を見に行くぞ」

俺達は大通りに出ると、隊舎方面へと歩き出した。よく目を凝らすと、かなり遠くで人が歩いているのが見える。こちら側に向かつて歩いてくる人は居らず、皆通りと垂直に歩いているようだ。

「誰もこのあたりに入ってこないねー」

通りに面した喫茶店。その中には談笑する若者やノートパソコンを操作するサラリーマンの姿が見受けられる。

「それだけじゃない。その喫茶店の連中も、あそこのコンビニで立ち読みしてる連中も、誰もこっちを見ていない」

一人くらい外を見てるヤツも居そうなものだが、どういうわけかこのあたり一帯の建物内部に居るヤツ等は窓の外に目を向けていなかった。

「・・・ほんとに、どうなってるんだよこれ」

交差点まで歩いてきたが、人影一つ見えない。ここだけ世界から切り取られてしまったかのような錯覚を覚える。

「人払いだよ」

路地裏からの声。それと同時に、この通りで初めてとなる人影が姿を現した。男は俺達と正対すると、こちら側へと歩き出す。

「一般人を指定した範囲から遠ざける暗示のようなものだ。主に能力者を判別する手段として用いられる」

「わざわざ捕まりに出てくるなんて殊勝な心掛けじゃねエか、井上

仁

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5757s/>

R.A.G Rebellion Against God

2011年11月17日21時36分発行